

前橋市青梨子町・群馬町金古

a o na si ka mi ya si ki

青梨子上屋敷遺跡

群馬町金古

ka ne ko ki ta zyu u sa n tyo u

金古北十三町遺跡 2

主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

2003

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

前橋市青梨子町・群馬町金古

a o na si ka mi ya si ki

青梨子上屋敷遺跡

群馬町金古

ka ne ko ki ta zyu u sa n tyo u

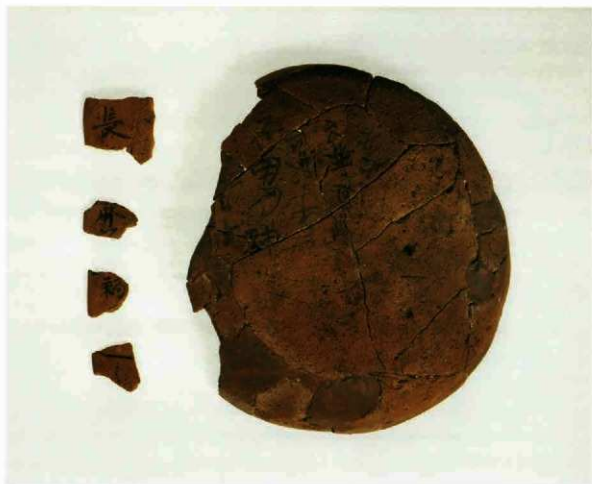
金古北十三町遺跡 2

主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

2003

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

口 絵



青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区2号住居出土土師器杯（遺物No.1）

序

主要地方道高崎渋川線は近世の三国往還を踏襲しており、古くから往来が盛んな道路として知られております。現在では高崎市街地を南北に縦断しながら国道17号線と交差して渋川市を結ぶ地方幹線道として、近年交通量がさらに増加しています。

本道路改築（改良）工事1期は、現道の東側を迂回するバイパスとして整備しつつあり、渋滞緩和のため早期開通が囑望されておりました。この工事に先立って、当該する埋蔵文化財の記録保存として昭和63年からは群馬町教育委員会、そして平成6年からは当事業団が発掘調査を実施してまいりました。

本遺跡の周辺には三ッ寺I遺跡、保渡田古墳群、上野国府跡、上野国分寺跡、山王廃寺跡、総社古墳群のような重要な遺跡が存在しております。また、周辺では高速道路、新幹線建設、土地改良工事などに伴って、発掘調査が数多く行われてきました。それらの中間に当たる地域として、本遺跡は当地域の歴史を究明する上で重要な資料を提供することと思えます。

本遺跡は奈良時代から中世・近世にいたる、特に集落、館跡などの痕跡が発見されております。その中で青梨子上屋敷遺跡から出土した墨書土器は県内では類例を見ないもので古代の祭祀行為を復元するうえで貴重な資料です。今回の調査で発見した集落は新たな見知を与え、当地の古代史を解明する上で重要な資料となり得ると確信します。

本報告書の刊行にいたるまでには、群馬県土木部道路建設課、高崎土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会の諸機関並びに地元関係者の皆様に大変な尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げますとともに、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、序とします。

平成15年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本報告書は、群馬県主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は以下のとおりである。
青梨子上屋敷遺跡 群馬県前橋市青梨子町、群馬町大字金古字北十三町
金古北十三町遺跡 群馬郡群馬町大字金古字北十三町
3. 事業主体 群馬県土木部道路建設課・高崎土木事務所
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 2000年（平成12）4月1日～2000年（平成12）8月31日
6. 調査組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事長 小野宇三郎
7. 事務担当 赤山容造、能登 健、相京健史、坂本敏夫、笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、
柳岡良宏、森下弘美、片岡徳雄、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子
8. 調査担当 小野和之、大沢 務、小林 徹
9. 整理期間 2002年（平成14）4月1日～2003年（平成15）3月31日
10. 整理組織 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 理事長 小野宇三郎
11. 事務担当 吉田 豊、神保佑史、萩原利通、巾 隆之、西田健彦、植原恒夫、小山建夫、須田朋子、
田中賢一、高橋房雄、吉田有光、森下弘美、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、
本間久美子、北原かおり、狩野真子
12. 整理担当 神谷佳明
13. 報告書作成関係者
編集 神谷佳明 本文執筆 神谷佳明、高島英之（当事業団専門員） 遺物観察 神谷佳明
石器・石製品石材鑑定 飯島静男
写真撮影 遺構 発掘調査担当 遺物写真撮影 佐藤元彦
整理補助 長岡和恵、小久保トシ子、小菅優子、猪野熊洋子、中橋たみ子
遺物実測補助（スリースペース）田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子、田中精子、酒井史恵
遺物保存処理 関 邦一、土橋まり子、小村浩一
14. 発掘調査、基礎整理作業は平成13年度に（主）地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に配属された事業団登録発掘調査作業員の方々に従事していただいた。本来なら本書にご芳名を記載すべきところであるが紙面の都合上割愛させていただいた。
15. 発掘調査、本報告書作成にあたり多くの方々よりご指導、ご教授を得た。記して感謝の意を表す。
群馬県道路建設課、高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、文化課、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、前橋市青梨子町自治会、群馬町金古自治会
16. 記録図面、記録写真、出土遺物、その他記録類等は群馬県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は座標北を表している。
2. 本報告書で使用したテフラの略号は下記のとおりである。
As-B 浅間山B軽石、As-C 浅間山C軽石、
Hr-FA 榛名二ツ岳噴出火山灰、Hr-FP 榛名二ツ岳噴出軽石
3. 挿図中の遺構図縮尺は原則下記のとおりである。その他の縮尺を使用したときは個々に明示した。
竪穴住居 1/60、竪穴住居カマド 1/30、土坑・井戸 1/40、溝 平面・断面個々に表示
4. 挿図中の遺物図は原則1/3であるが、大型品については1/4・1/6、陶器小型品・石器・金属製品・銭貨などの小型品については1/1・1/2で掲載したものがあつた。原則以外の縮尺を使用した場合は遺物No.の右側にその縮尺を明示した。
5. 挿図中の遺構名称は全体図を除いて調査区名称を省略してある。
6. 挿図中のスクリーン・トーンは下記のとおりである。
平面 波線は概乱を表示
断面 斜線は礫を表示
7. 本報告書で使用した地形図は下記のとおりである。
国土地理院 地勢図「長野」・「宇都宮」(1/200,000)
使用は昭和58年横山衡器製作所100周年記念調整図を使用。
地形図「前橋」(1/25,000)
群馬町都市計画図 No. 3・4・7・8 (1/2,500) 都市計画図は縮尺を変更して使用している。
8. 遺構の面積はデジタルプランメーターを使用して3回計測した平均値である。
9. 図版中の縮尺は任意である。
10. 遺物観察中の計測値単位はcm、gである。これ以外の単位については単位を記載した。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

挿図・表・図版目次

I 調査の経過

1. 調査に至る経緯 2
2. 調査の経過 4

II 調査の方法

1. 調査区の設定 6
2. 基本的土層 7

III 遺跡地の環境

1. 地理的環境 8
2. 歴史的環境 10

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

1. 概要 14
2. 竪穴住居 20
3. 堀・溝 24
4. 列石 35
5. 道 35
6. 井戸 37
7. 塼塞 37
8. 土坑 38
9. 遺構外出土遺物 52

V 金古北十三町遺跡16区の遺構と遺物

1. 概要 63
2. 住居 64
3. 土坑 69
4. 遺構外出土遺物 69

VI 考察

1. 青梨子上屋敷遺跡I区2号住居出土の墨書土器について 70

図版

遺跡抄録

挿図目次

1 図 遺跡位置図 (1/200,000)	1	31 図 I 区 1号井戸 遺構図	36
2 図 遺跡調査位置図 (1/25,000)	3	32 図 I 区 1号井戸 遺物図	37
3 図 青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡16区調査範囲図	5	33 図 I 区 1号埋栗 遺構図・遺物図	37
4 図 調査区設定図	6	34 図 I 区 1～6・8～10号土坑 遺構図	39
5 図 基本土層模式図	7	35 図 I 区 7・11～22・25号土坑 遺構図・遺物図	40
6 図 遺跡周辺地形標相図	9	36 図 I 区 23・24・27～41号土坑 遺構図	41
7 図 周辺の遺跡図	13	37 図 I 区 42～69号土坑 遺構図・遺物図	42
8 図 青梨子上屋敷遺跡 全体図 (1/500)	15	38 図 I 区 70～101号土坑 遺構図	43
9 図 I 区全体図	16	39 図 I 区 102～125号土坑 遺構図	44
10 図 II 区全体図	17	40 図 III 区 1・2・4号土坑 遺構図・遺物図	45
11 図 III 区全体図	17	41 図 III 区 3・5・6・8号土坑 遺構図・遺物図	46
12 図 IV 区全体図	18	42 図 III 区 9号土坑・IV 区 1号土坑 遺構図・遺物図	47
13 図 金古北十三町遺跡16区全体図	19	43 図 IV 区 2・3号土坑 遺構図	48
14 図 I 区 1号住居 遺構図(1)	20	44 図 遺構外出土遺物 遺物図(1)	52
15 図 I 区 1号住居 遺構図(2)・遺物図	21	45 図 遺構外出土遺物 遺物図(2)	53
16 図 I 区 2号住居 遺構図・遺物図(1)	23	46 図 遺構外出土遺物 遺物図(3)	54
17 図 I 区 2号住居 遺構図(2)	24	47 図 遺構外出土遺物 遺物図(4)	55
18 図 I 区 1号堀 遺構図	25	48 図 遺構外出土遺物 遺物図(5)	56
19 図 I 区 1号堀 遺物図(1)	26	49 図 遺構外出土遺物 遺物図(6)	57
20 図 I 区 1号堀 遺物図(2)	27	50 図 遺構外出土遺物 遺物図(7)	58
21 図 I 区 2号堀 遺構図・遺物図	28	51 図 金古北十三町遺跡16区 全体図	63
22 図 I 区 3号堀 遺構図	29	52 図 16区 1号住居 遺構図(1)	64
23 図 I 区 3号堀 遺物図	30	53 図 16区 1号住居 遺構図(2)	65
24 図 I 区 1号溝 遺構図	30	54 図 16区 1号住居 遺物図	66
25 図 I 区 2号溝 遺構図	31	55 図 16区 2号住居 遺構図	67
26 図 I 区 3号溝・4号溝 遺構図	32	56 図 16区 2号住居 遺物図	68
27 図 III 区 1号溝 遺構図・遺物図	33	57 図 16区 1号土坑 遺構図	69
28 図 III 区 2号溝 遺構図・遺物図	34	58 図 遺構外出土遺物 遺物図	69
29 図 II 区 1号列石 遺構図	35	59 図 青梨子上屋敷遺跡 I 区 2号住居出土墨書土器実測図	71
30 図 I 区 1号道 遺構図	36		

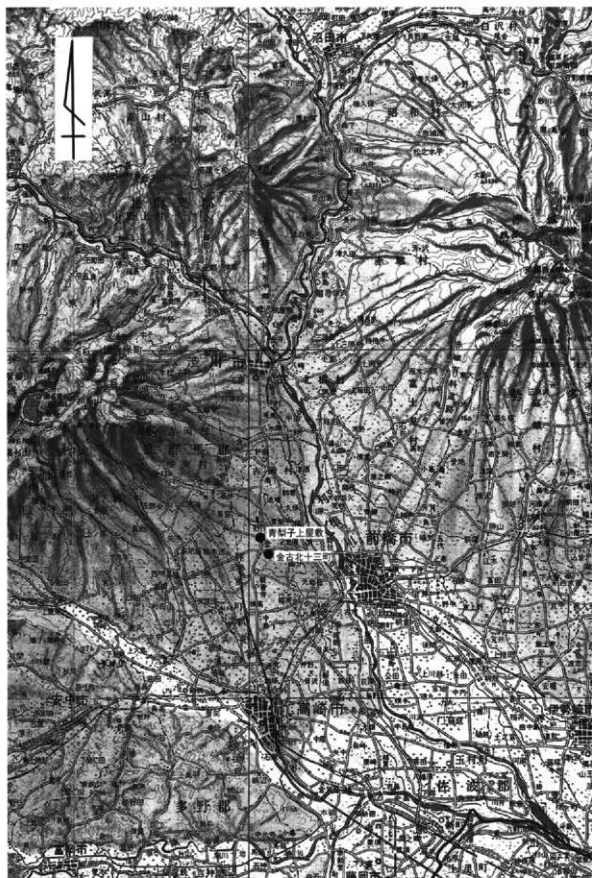
表目次

1 表 発掘調査遺跡一覧	2
2 表 周辺遺跡一覧表	12
3 表 青梨子上屋敷遺跡土坑表	49

図版目次

青梨子上屋敷遺跡	
P L 1 遺跡全景 垂直 遺跡全景 斜め 北から	
P L 2 I 区全景 垂直 I 区全景 斜め 北西から	
P L 3 II 区全景 斜め 南から III 区全景 垂直	
P L 4 IV 区北部分 斜め 南から IV 区中部分 南から IV 区中部分 北から IV 区南部分 斜め 南から 金古北十三町遺跡16区全景 垂直	
P L 5 I 区 1号住居 全景 西から I 区 1号住居土層断面 南から I 区 1号住居土層断面 東から I 区 1号住居遺物出土状態 北西から I 区 1号住居貯蔵穴土層断面 西から I 区 1号住居カマド 西から I 区 1号住居カマド土層断面 西から I 区 1号住居カマド掘方土層断面 北から	
P L 6 I 区 2号住居 全景 西から I 区 2号住居土層断面 西から I 区 2号住居 1の土器器杯出土状態 I 区 2号住居貯蔵穴土層断面 西から I 区 2号住居カマド 全景 I 区 2号住居カマド土層断面 西から I 区 2号住居掘方 西から I 区 2号住居掘方 西から	
P L 7 I 区 1号堀 全景 西から I 区 1号堀 全景 東から I 区 1号堀土層断面 西から I 区 1号堀土層断面 東から I 区 1号堀掘出土状態 東から I 区 1号堀底面掘削時工具痕	
P L 8 I 区 2号堀 全景 南から I 区 2号堀土層断面 南から I 区 3号堀 全景 南から I 区 1号溝 全景 東から I 区 1号溝土層断面 西から	

- I区3号溝 全景 南から
 I区3号溝土層断面 南から
 P.L.9 I区4号溝 全景 北から
 I区4号溝土層断面 南から
 III区1号溝 全景 南から
 III区1号溝 全景 北から
 III区1号溝土層断面 北から
 III区1号溝礫出土状態 南から
 III区2号溝 全景 西から
 P.L.10 III区2号溝土層断面 西から
 I区1号道 全景 東から
 I区1号道 全景 北東から
 I区1号道硬化面土層断面
 I区1号道硬化面土層断面
 I区1号道掘方 西から
 II区1号列石 南西から
 P.L.11 II区1号列石土層断面 西から
 I区1号井戸 全景 東から
 I区1号井戸断面 東から
 I区1号埋栗出土状態 南から
 I区1号埋栗出土状態 西から
 I区1号埋栗断面状態 西から
 I区1号埋栗掘方 西から
 I区1号土坑 全景 南から
 P.L.12 I区1号土坑土層断面 南から
 I区2号土坑 全景 南から
 I区2号土坑土層断面 南から
 I区3号土坑 全景 南から
 I区3号土坑 土層断面 南から
 I区4号土坑 全景 南から
 I区4号土坑土層断面 南から
 I区5号土坑・6号土坑 全景 南から
 I区6号土坑土層断面 南から
 P.L.13 I区13号土坑 全景 西から
 I区13号土坑土層断面 東から
 I区23号土坑 全景 北から
 I区23号土坑土層断面 南から
 I区25号土坑 全景 東から
 I区25号土坑土層断面 東から
 I区53号土坑 全景 東から
 I区53号土坑土層断面 東から
 P.L.14 I区125号土坑 全景 東から
 I区125号土坑 全景 東南から
 III区3号土坑土層断面 南から
 III区3号土坑土層断面 南から
 III区3号土坑礫出土状態 南から
 III区3号土坑掘方 東から
 III区4号土坑 全景 東から
 III区6号土坑 全景 東から
 P.L.15 III区8号土坑 全景 東から
 III区8号土坑土層断面 南から
 III区9号土坑 全景 南から
 III区9号土坑掘方 南から
 IV区1号土坑 全景 西から
 IV区1号土坑土層断面 南から
 IV区2号土坑 全景 西から
 IV区3号土坑 全景 西から
 P.L.16 I区1号住居出土遺物
 I区2号住居出土遺物
 P.L.17 I区1号堀出土遺物
 I区2号堀出土遺物
 I区3号堀出土遺物
 P.L.18 III区1号溝出土遺物
 III区2号溝出土遺物
 I区1号井戸出土遺物
 I区1号埋栗出土遺物
 土坑出土遺物
 遺構外出土遺物(1)
 P.L.19 遺構外出土遺物(2)
 P.L.20 遺構外出土遺物(3)
 P.L.21 遺構外出土遺物(4)
金古北十三町遺跡16区
 P.L.22 遺跡 全景 西から
 遺跡 全景 東から
 P.L.23 1号住居 全景 西から
 1号住居 全景 南東から
 1号住居土層断面 東から
 1号住居土層断面 南から
 1号住居カマド 西から
 1号住居カマド土層断面 西から
 1号住居カマド掘方 西から
 1号住居掘方
 P.L.24 2号住居 全景 東から
 2号住居 全景 東から
 2号住居土層断面 南西から
 2号住居遺物出土状態
 2号住居カマド 西から
 2号住居カマド 南から
 2号住居掘方断面 西から
 2号住居掘方 西から
 P.L.25 1号住居出土遺物
 2号住居出土遺物
 遺構外出土遺物



1 図 遺跡位置図 (1/200,000)

I 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

(主)地方道高崎渋川線は高崎市から群馬郡群馬町、前橋市、北群馬郡吉岡町を通り渋川市を結ぶ県中央部における南北方向の基幹的地方道である。近年の交通量は著しい増加量が見られ、この地域も例外でなく主要道との交差点を中心に慢性的な渋滞を引き起こしている。このため渋滞緩和のため新たにバイパスを建設する計画が持ち上がった。バイパスは特に渋滞の激しい高崎市、群馬町部分を第1期工事分として高崎市渋尻町の国道17号線「大八木」交差点から前橋市青梨子町の現(主)地方道高崎渋川線「金古上宿」交差点までの8km間について建設を実施することになった。

建設に先立ち県教育委員会文化財保護課は埋蔵文化財の有無について協議を行ったところ高崎市渋尻町・小八木町・正観寺町、群馬町菅谷・棟高・引間・冷水・西国分・金古、前橋市青梨子町で埋蔵文化財の存在が確認され記録保存のための発掘調査を行う必要が認められた。埋蔵文化財の発掘調査は当初、群馬町教育委員会が担当して実施したが平成6年以降は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当して実施した。

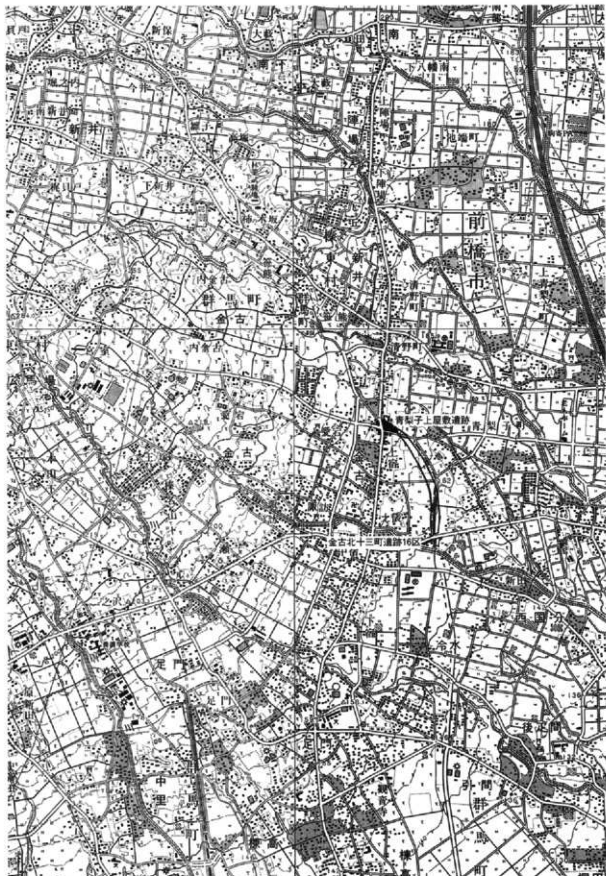
埋蔵文化財の発掘調査は昭和63年度に群馬町棟高の西三免社遺跡より実施され平成12年度に群馬町菅谷の菅谷石塚遺跡、前橋市青梨子町の青梨子上屋敷遺跡で高崎市渋尻町(区画整理とともに発掘調査を実施の予定)、群馬町棟高の付随する工事カ所(県道前橋・安中・富岡線、町道の拡幅)を除いて終了した。

(主)地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴って実施された埋蔵文化財の発掘調査は以下の通りである。

1表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	調査主体	調査期間(年度)	報告書
小八木井野川	高崎市小八木町	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H10~11	2001
小八木志志貝戸	高崎市小八木町	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H9~11	1999~ 2002
正観寺西原	高崎市正観寺町	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H9~10	1999 2001
菅谷石塚	群馬郡群馬町菅谷	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H11~12	2003他
西三免社	群馬郡群馬町棟高	群馬町教育委員会	S63	1990
小池	群馬郡群馬町引間	群馬町教育委員会	H2	1992
諏訪西	群馬郡群馬町引間	群馬町教育委員会	H5	1995
冷水村東	群馬郡群馬町冷水	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H6	1998
西国分新田	群馬郡群馬町西国分	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H6	1998
金古十三町	群馬郡群馬町金古 前橋市青梨子町	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H7~9 H12	1998 2003
青梨子上屋敷	前橋市青梨子町 群馬郡群馬町金古	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	H12	2003

調査期間のHは平成、Sは昭和の略である。



2 図 遺跡調査区位置図 (1/25,000)

I 調査の経緯

2. 調査の経過

青梨子上屋敷遺跡 遺跡は、前橋市の西端と群馬郡群馬町の北部との境界付近の前橋市青梨子町と群馬町大字金古字北十三町に所在する。発掘調査地点は、平成7年度に発掘調査を実施した金古北十三町遺跡14区・15区の延長線状で市道を挟んで隣接している。発掘調査は、道路建設用地センター批No.96以降と現主要地方道高崎渋川線の拡幅部分で用地買収が完了した面積3,320㎡が対象であった。調査対象は道路建設予定地と現在使用されている道路の拡幅部分であり市道や人家出入り口が存在している。このため調査区の設定もこうした現在使用されている道路にあわせて設定した。その結果0区、I区からIV区までの5区画の調査区を設定した。なお、0区は平成7年度に実施した本事業金古北十三町遺跡13区に隣接する未買収地である。

発掘調査は諸準備等終了した2000年4月23日よりI区調査区から開始し8月6日に調査区の発掘調査を終了した。その後出土遺物や記録図面・写真などの基礎的整理や事務所の撤収を8月31日までにいり本年度予定分について終了した。

金古北十三町遺跡16区 遺跡は群馬町の東北部前橋市との境界付近の大字金古字北十三町に所在する。発掘調査地点は平成7年度に発掘調査を実施した金古北十三町遺跡I区西に隣接する地点である。発掘調査は本事業のバイパス本線から牛池川までの現主要地方道前橋箕郷線の南側拡幅部分である。発掘調査は巾4～6m、全長110mほどの細長い範囲550㎡が対象であった。発掘調査は諸準備の後2002年5月14日より6月3日まで行った。

青梨子上原敷遺跡・金古北十三町遺跡16区調査日誌
青梨子上屋敷遺跡

2000年

4月1日～21日 発掘調査準備

22日 本日より発掘作業員出勤

23日 I区試掘坑設定、調査区方眼杭設置設定

24日 試掘調査開始

28日 I区重機による表土掘削開始

5月9日 I区遺構確認、試掘坑写真撮影、断面・平面測量

10日 遺構確認、堀・井戸等一部遺構掘削

11日 0区表土掘削、I区遺構掘削

26日 I区全景写真撮影（高所作業車にて）

19日 I区北側試掘調査

6月5日 0区遺構確認、遺構無し

6日 0区土層堆積状態等の調査

Ⅱ区表土掘削準備

7日 0区写真撮影

8日 Ⅲ区表土掘削

13日 Ⅲ区調査区方眼杭設置

15日 I区航空写真撮影準備

Ⅲ区遺構確認、遺構掘削

16日 I区・Ⅲ区航空写真撮影

19日 Ⅲ区遺構掘削

20日 I区・Ⅲ区全体図測量（～29日）

Ⅱ区表土掘削、遺構確認

22日 Ⅱ区遺構掘削

26日 Ⅱ区全景写真撮影

I区Ⅳ（As-C）層下試掘調査

27日 Ⅱ区調査区方眼杭設置

7月3日 I区Ⅳ（As-C）層下遺構確認

7日 台風接近による対策

10日 I区1号堀底面の掘削工具痕石青型取り

11日 Ⅳ区調査区設定等調査準備

13日 Ⅳ区重機による表土掘削

17日 Ⅳ区遺構確認、調査区方眼杭設置

19日 Ⅳ区遺構掘削、北側部分全景写真撮影

26日 Ⅳ区遺構掘削

27日 Ⅳ区北側部分Ⅳ（As-C）層掘削

28日 Ⅳ区北側部分遺構上面遺構確認

8月1日 Ⅳ区南側部分遺構掘削

3日 青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡16区基礎整理開始

（～29日）

7日 調査区の埋め戻し開始

8日 Ⅳ区2号土坑遺構掘削、写真撮影、Ⅳ区調査終了

24日 調査区埋め戻し終了

29日 器材撤出

30日 発掘調査区を群馬高崎土木事務所へ引き渡す

8月31日 残りの器材等を搬出して発掘調査終了

金古北十三町遺跡16区

2000年

5月8日 周辺住民への挨拶

11日 排土置き場設置

12日 安全柵設置

14日 重機による表土掘削開始

16日 遺構確認整穴住居2軒検出

17日 1号住居床面検出、2号住居埋設土掘削

22日 1号住居断面測量等、2号住居床面検出

23日 1号住居写真撮影・カマド調査

2号住居断面測量・カマド調査

24日 1号住居カマド調査、2号住居カマド調査

25日 1号住居カマド調査地、2号住居カマド調査

26日 調査区全景写真撮影、住居カマド調査

29日 住居カマド・掘方調査

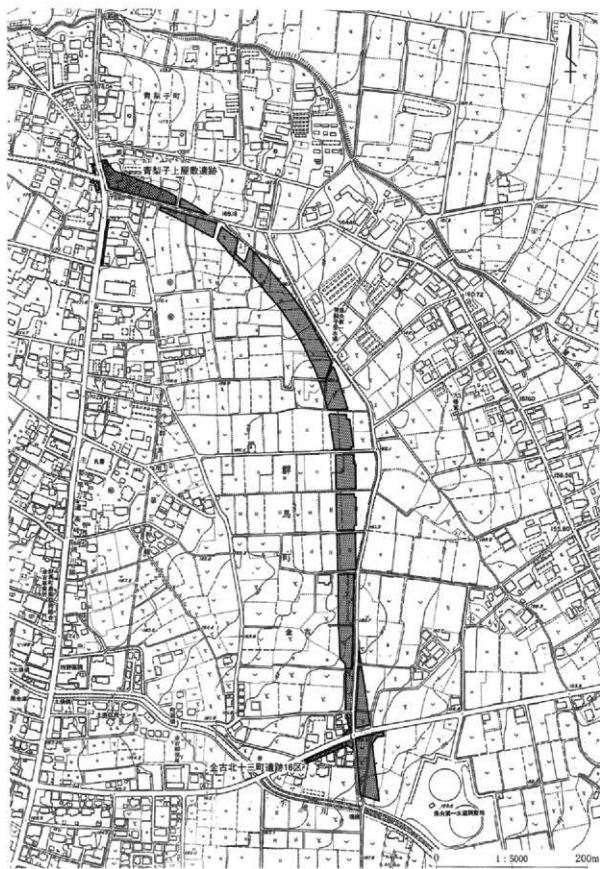
30日 住居掘方調査

31日 住居掘方調査

6月1日 住居掘方写真撮影・測量

2日 埋め戻し

3日 安全柵撤去、調査終了



3 図 青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡16区調査範囲図

II 調査の方法

1. 調査区の設定

調査区は青梨子上屋敷道路、金古北十三町道路16区とも平成7年度に実施した金古北十三町道路の調査区を使用した。

金古北十三町道路の調査区の設定は周辺の発掘調査成果や隣接する地点での発掘調査成果とあわせて検討が行い易いように国家座標を基に設定した。発掘調査は1995年(平成7)当時であることから旧日本測地系国家座標を利用してある。

基点は国家座標旧日本測地系IX系 $X=45,000$ 、 $Y=-73,700$ に設定した。各グリッドは5m四方を1単位とした。グリッドは北方向へはアルファベットを用い、西方向へは算用数字を用いた。北方向へのアルファベットはAからTまでを使用し100mごとにまたAにもどることとした。そのため100mごとに同一のアルファベットが使用されるためアルファベットの前に算用数字を付与して区別を行った。西方向の算用数字には無限大まで使用することとした。

調査区設定については上記の通りであるが青梨子上屋敷道路調査区設定を行ったとき委託測量業者がグリッド呼称を誤り東西方向を20多く付与している。この間違いは後日、明らかになったため今までのものと混乱を生じる可能性があるため誤記したものでそのまま使用した。よって金古北十三町道路との照合の際には注意をお願いしたい。



4図 調査区設定図

2. 基本的土層

遺跡地内の基本的土層の堆積状態は地形的条件などで異なるが、原則は周辺地域と同様である。その違いは微高地では火山噴出物の堆積層が薄いため後世の耕作などで残存が見られない点である。

基本層序は次のとおりである。

I層は現在の耕作土である。色調は地点によって多少異なるが概ね灰色や黄色を帯びた褐色を呈している。層位中には多量の浅間山B軽石（以後As-Bと略す）を多く含んでいるため比較的粘質のないサラサラした土質である。

II層はAs-B降下後の中世から近世にかけての耕作土である。色調はI層と同様であるが層位中にAs-Bを30～50%と多く含んでいる。

III層は1108年（天仁元年）に浅間山が噴火した時の火山噴出物であるAs-Bである。低地では軽石が10～20cmほど堆積しておりさらにその上位に灰褐色を呈する火山灰が確認できる。なお、微高地では後世の耕作によって踏み込まれてほとんど層位としては確認できなかった。

IV層は6世紀初頭に榛名二ツ岳が噴火した時の火山噴出物である榛名二ツ岳火山灰（以後Hr-FAと略す）が多量に踏み込まれている土層である。色調はHr-FAを多量に含むため灰色に近い。また層位中には5mm程度の白色軽石を含んでいる。この軽石は6世紀前半に起きた二度目の榛名二ツ岳が噴火したときの火山噴出物である榛名二ツ岳軽石（以後Hr-FPと略す）や4世紀代に浅間山が噴火した時の火山噴出物である浅間山C軽石（以後As-Cと略す）である。

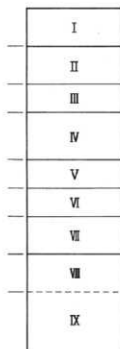
V層は6世紀初頭に榛名二ツ岳が噴火した時の火山噴出物であるHr-FAである。低地では5～10cmほど堆積している。微高地では部分的に2～5cm程度の堆積が確認されたが大部分は後世の耕作などによって踏み込まれほとんど層位としては確認できなかった。

VI層は4世紀に起きた浅間山の噴火した時の火山噴出物であるAs-Cが混入・踏み込まれている黒色

土である。この層位は概ね20cmほどの堆積が確認できる。また、II区ではAs-Cの含有量が50～70%と非常に多い箇所が確認された。

VII層はやや粘土質の黒色土である。層位内には含有物がほとんど確認されない。層位下位では上位に比較してやや淡い色調を呈している。

VIII層は総社砂層と呼称されている灰白色のシルト土である。この層位の堆積は非常に厚く下層のローム土を確認できない。



土層 基本土層堆積状況



5図 基本土層模式図

III 遺跡地の環境

1. 地理的環境

青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡16区は、群馬県の中央部に位置する前橋市・群馬郡群馬町に所在する。両遺跡は現在では僅かに痕跡を観察できる谷地を挟んで隣接している。なお、以前に発掘調査を実施した金古北十三町遺跡では南端の牛池川から青梨子上屋敷遺跡I区に隣接する区間までを同一遺跡として扱ったが13区以北は青梨子上屋敷遺跡と同一微高地状に立地する。

遺跡は関東平野の西北端部、赤城山、妙義山と上毛三山の一つである榛名山の東南麓、利根川の支流である牛池川と八幡川の間に立地する。標高は青梨子上屋敷遺跡が171～174m、金古北十三町遺跡16区が159mである。

榛名山東南麓は、その地形を見ると扇状地が発達していることが解る。遺跡地はこの扇状地の扇尖に立地している。この扇状地は相馬ヶ原扇状地と呼ばれている。相馬ヶ原扇状地は火山山麓に形成された裾野扇状地で形成に関わった河川は榛名山山帯に源流を発する白川と午王頭川である。相馬ヶ原扇状地の範囲は明確ではないが次のような範囲が示されている。

扇頂は標高600m付近の白川と午王頭川で挟まれた榛東村上野原の山麓付近である。

扇端は標高110m等高線。この付近は高崎市日高遺跡で見られるような微高地をはじめとする自然堤防状微高地が張り出しておりこの微高地を連ねた標高110m付近である。

扇側は南限が白川上流部から井野川のラインで井野川の右岸は白川扇状地である。北限は午王頭川から駒寄川のラインである。駒寄川の東側は前橋台地である。

相馬ヶ原扇状地の形成は比較的短時間でほぼ終了し板鼻黄色軽石降下時(1.3～1.4万年前)にはすでに大部分が浸水していたとされている。扇状地内は多くの河川により浸食され扇状地面と河床面では4

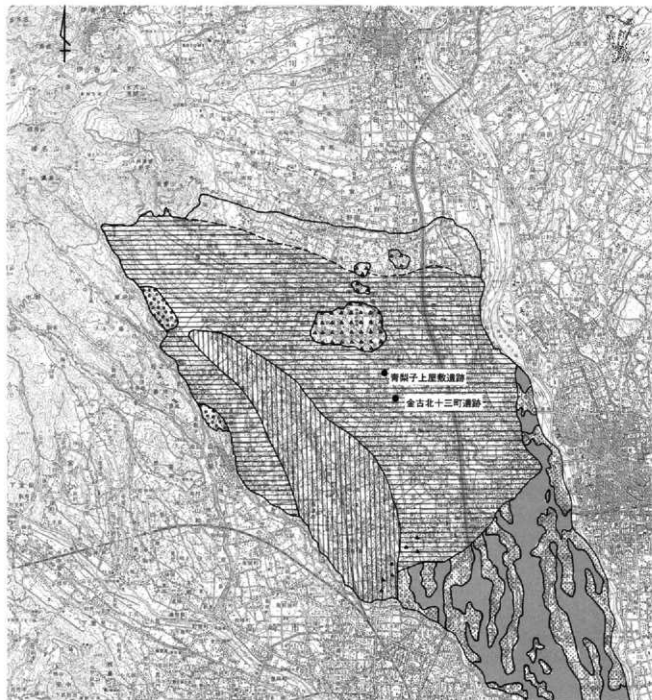
～5mの比高差をもつ。こうした河川は約1km前後の間隔で存在しており、これらの河川には扇側にあたる井野川、午王頭川や八幡川、牛池川、染谷川などがある。







相馬ヶ原扇状地の形成後に扇状地からは前橋台地にかけて存在していた谷を洪水堆積物が埋戻し始めている。この洪水堆積物は概ね灰色砂層で「総社砂層」と呼ばれているものである。この砂層は板鼻黄色軽石と浅間C軽石との間で確認され、砂層の上位では縄文時代前期諸磯式から後期中期の称名寺式の土器が出土している。こうしたことからこの砂層の形成は縄文早期頃から始まり前期から中期には部分的に自然堤防が形成されている。砂層の形成は、縄文前期から後期まで続いたとされている。

総社砂層の上位は基本土層で見られるように4世紀代の浅間C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名二ッ岳火山灰(Hr-FA)、6世紀前半代の榛名二ッ岳軽石(Hr-FP)、1108年(天仁元年)の浅間B軽石(As-B)などが見られる。遺跡地は低地から微高地に存在する。微高地では後の耕作など(古墳時代から現代まで)で攪拌され純堆積層が残存する範囲は僅かであった。低地では榛名二ッ岳火山灰(Hr-FA)、浅間B軽石(As-B)の純堆積層が確認されている。

参考文献

- 早田 勉「第1章 群馬県の自然と風土」『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県史編さん委員会 1990
 沢口 宏「第1章 地形・地質」『群馬県誌 資料編4 自然』群馬県誌編纂委員会 1995



-  陣馬尼流丘
-  相馬ヶ原古期扇状地面
-  相馬ヶ原新期扇状地面
-  ニツ岳第二軽石流堆積物
-  自然堤防および微高地
-  後背低地

0 1:100000 5km

6 図 遺跡周辺地形様相図

2. 歴史的環境

遺跡地は、群馬県の中心都市である高崎市と前橋市に隣接する群馬町の北部と前橋市の西端に位置している。群馬町南部の両市に接する地域では住宅建設などの開発に伴う発掘調査も多く行われている。北部ではまだ農村的要素が強いが農業の効率化に伴う圃場整備、開発の影響による発掘調査が多く行われている。こうした成果は多くの報告書によって公表され、群馬町では発掘調査の成果をもとに町誌が編集・刊行され地域史の解明を行っている。本項ではこれらの資料をもとに周辺の遺跡について時代ごとに記載する。

縄文時代 遺跡地周辺地域では前項の地理的環境で記載したように縄文時代前期以前は度重なる洪水により、居住するのには不向きな環境であったため遺構・遺物の検出・出土は確認されていない。この地域の縄文時代の遺跡は、他の時代に比べると数少ない。こうしたなかでもっとも古い時期の遺跡・遺構は上野国分僧寺・尼寺中間地域で検出された前期諸磯C期の埋蔵がある。中期になると自然堤防による微高地が発達し遺構・遺物を検出・出土する遺跡がやや多くなる。遺構がみついている遺跡は、上野国分僧寺・尼寺中間地域から中期後半の集落、清里長久保遺跡では中期後半から後期の竪穴住居、長久保大畑遺跡では中期中葉の集落が見つまっている。

弥生時代 遺跡地周辺は水田耕作に適した小谷地が存在していることから集落遺跡が急激に増加している。集落の顕著な増加は弥生時代後期後半からである。中期の集落は染谷川流域に位置する西三社免遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、新保遺跡などだけでまだ少ない。また、後期前半の集落は井野川流域の熊野堂遺跡、浜尻遺跡と新保遺跡などで見ついているだけで前段階と同様である。この様相は後期後半では一変している。小八木志志戸遺跡では調査区北側の0区から2区にかけて集落、墓域などが見ついている。正観寺遺跡群は環濠集落や方形周溝墓が見つかり、小八木1遺跡でも集落が見つまっている。遺跡地南西の井野川流域では井出村東遺跡、

熊野堂遺跡、雨壺遺跡などで多くの住居が見つまっている。これらの集落遺跡では数軒単位のみとまりがみられる。こうした傾向は天王川の右岸の諸口遺跡でもみることができるところからこの地域では後期後半には広範囲に小規模な集落が多く存在していたようである。

遺跡地の周囲では南東に位置する上野国分僧寺・尼寺中間地域から小規模集落、東に位置する下東西遺跡で住居が見つまっている。

古墳時代 集落は弥生時代以上に増加の傾向が見られる。特に5世紀から6世紀にかけての集落の増加には顕著なものがみられる。特に群馬町西部に位置する豪族居館が見つかった三ッ寺I遺跡の周辺に存在する中林遺跡、井出村東遺跡、三ッ寺II遺跡では顕著である。また、弥生時代から継続する熊野堂遺跡などでもこの時期に住居軒数が飛躍的に増加している。こうした背景には三ッ寺I遺跡の豪族居館に代表される豪族層の存在がある。そして新たに北谷遺跡においても三ッ寺I遺跡と同様の罫や形状をもち堀内側を高く盛り土した豪族居館が見つまっている。この北谷遺跡に隣接する冷水村東遺跡では5世紀代に新たに集落が発生している。この地域はこうした居館の豪族層に支配され農地拡大のために大規模な開発が行われた地域であると考えられる。この豪族層を経済的に支えた水田や畠は周辺地域で見つまっている。水田は古墳時代初頭の浅間山C軽石(As-C)、6世紀初頭の榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)、榛名二ツ岳軽石(Hr-FP)などで埋没したものが北原遺跡、冷水村東遺跡、菅谷石塚遺跡など多くの遺跡から見ついている。このほか水辺で行われた祭祀と想定される遺構が冷水村東遺跡で見ついている。しかし、三ッ寺I遺跡や北谷遺跡でみられる繁栄も榛名山二ツ岳の2度の噴火や噴火後に発生した土石流による生産地の埋没によって広範囲で経済的基盤を失いその後は同様な繁栄はみられない。これに変わって勢力を増大させたのが総社古墳群に被葬された首長層である。この首長層は上毛野を代表する氏族である上毛野氏と想定されている。この地域

では大規模な古墳群だけでなく「放光寺」と称されたと推定される寺院である山王廟寺が存在する。山王廟寺は金堂、塔をもつ大規模な古代寺院である。しかし、周辺の遺跡では7世紀後半以降の大規模集落は国分境遺跡、下東西遺跡、熊野谷遺跡など見つかっているが総社古墳群が造営されはじめたころの集落は少なく、総社古墳群に被葬された豪族を支えた経済基盤については今後の課題である。

遺跡地周囲での古墳は北側から西側にかけてに多く存在している。これらの古墳には諏訪古墳、庚申山古墳群、西側で愛宕山古墳、諏訪古墳群、寺屋敷古墳群・鶴巻古墳群、如來古墳群などが見られる。南側に北寝保古墳群、東窟1号墳が存在する。これらの古墳はみな後期の小規模な円墳である。

飛鳥・奈良・平安時代 遺跡地は推定国府の北西にあたり、古代律令制の郡縣制では「上野国群馬郡馬郷」に編成されていたと推定される。遺跡の東には国府の他、国分僧寺・尼寺、山王廟寺など古代上野国における中核地域が存在する。こうした中核施設の周囲にはこうした施設を維持するための大規模な集落が多く見つかっている。こうした集落に鳥羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、国分境遺跡、北原遺跡、後冗間遺跡、西国分六ツ割遺跡、西国府遺跡、熊野谷遺跡などがある。また、中核施設の北側、八幡川左岸では集落遺跡とともに7世紀末から8世紀初頭の豪族・富豪層の居宅が見つかっている。居宅は下東西遺跡、下東西清水上遺跡にまたがって見つかっており、下東西遺跡では区画溝、櫓で囲まれた内部に大型の掘立柱建物群が存在し、区画溝内部からは居宅で使用された大量の食膳具や円面碗などが出土している。

本遺跡地周囲では前出の遺跡のような住居が密集した状態の集落は見つかっていない。集落は青梨子金古墳遺跡や金古北十三町遺跡の牛池川よりと冷水村東、西国分新田遺跡で見つかっているが小規模なものである。

生産遺構は冷水村東遺跡から西国分新田遺跡にかけてAs-Bで埋没した水田が見つかっている。また、

西国分新田遺跡では同じくAs-Bで埋没した大規模な溝が見つかっており水田を開発するための大規模な用水路が開削されていたとみられる。これらのAs-B層下水田やAs-Bで埋没した水路の開発・開削は平安時代中頃、大規模に行われたと考えられる。

中世鎌倉時代の様相は若干の文献は存在するが不明な点が多い。室町時代には国府を中心に上杉氏の守護代として入部した長尾氏が勢力を広げている。その居城が国府地に造られた蒼海城である。戦国時代では箕輪城を基点とした長野氏の勢力下に入っている。遺跡地周辺ではこうした領主配下の武将の館や砦が存在している。こうした館や砦に青梨子砦跡、松田城跡がある。発掘調査でも今まで知られていなかった館が下東西清水上遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間地域で見つかっている。また、金古北十三町遺跡4区や15区（青梨子上屋敷遺跡I区に続く堀）でも堀や道路跡が見つかっている。

- 参考文献（周辺遺跡表で掲載した文献は除いてある）
- 群馬県史編さん委員会「群馬県史 通史編・2」群馬県 1991
- 群馬町誌「群馬町誌 資料編 原始古代・中世」群馬町誌刊行委員会 1999
- 群馬町誌「群馬町誌 通史編 原始古代中世・近世」群馬町誌刊行委員会 2001
- 「群馬県の中世城跡跡」群馬県教育委員会 1988
- 「群馬町の遺跡」群馬町教育委員会 1986
- 「冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」（1）～（8）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1992
- 「鳥羽遺跡」（1）～（6）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1992
- 「舟出村東遺跡」群馬町教育委員会 1983
- 「三ツ寺I遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 「三ツ寺II遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 「熊野谷遺跡」（1）～（2）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984・1990
- 「小八木志貞戸遺跡」1～4（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999～2002
- 「正観寺遺跡群」（I）～（IV）高崎市教育委員会 1979～1982
- 「西三免社遺跡」群馬町教育委員会 1990
- 「龍口遺跡」I・II群馬町教育委員会 1984・1985
- 「山王廟寺跡発掘調査概報」前橋市教育委員会 1976～1982
- 「清里長久保遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 「長久保大塚遺跡・新田入口遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000



青梨子上屋敷遺跡

金古北十三町遺跡

0 1:75,000 200m

7図 周辺の遺跡図

Ⅳ 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

1. 概要

青梨子上屋敷遺跡は牛池川と蟹沢川に挟まれた微高地に立地している。この両河川の間には現在では僅かに痕跡を留めるだけになってしまっているが古代には小規模な谷地が存在していた。また、遺跡地の北側には現在用水路化している小河川が存在している。青梨子上屋敷遺跡はこの埋没谷地の北側、小河川の南側に位置している。

今回の青梨子上屋敷遺跡の発掘調査はⅠ区からⅣ区にわたる4調査区で竈穴住居2軒、堀、溝、道路、列石、井戸、土坑などの遺構を検出し、縄文時代から近代にいたる遺物の出土が見られた。こうした遺構・遺物は主にⅠ区からの出土で他の調査区であるⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区とも土坑・溝などが若干出土する程度であった。

遺構の時代・時期は竈穴住居が奈良時代後半、堀・溝が中世、道路・井戸は近世から近代、土坑は古代から近代にいたるものまで幅広く見られたが全体的には中世以降のものが主体であった。

以前に同事業で調査した金古北十三町遺跡は調査の都合上南から順次調査区を設定したが今回調査した青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区と金古北十三町遺跡15区とは隣接しており、さらに同一の堀が両調査区で検出されていることから同一の遺跡であると言える。

金古北十三町遺跡15区の調査では13区のように竈穴住居1軒、堀、溝、道路などの遺構が検出されている。これらの遺構は竈穴住居が9世紀第1四半期、堀は中世、道路は近世に比定されている。このうち堀や道路は青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区にかけて延びている。また、南に位置する金古北十三町遺跡13区では近世の遺構が検出されただけであった。東に位置する11区・12区で検出された遺構は溝と土坑が僅に検出されただけであったことから畠などの耕作地としてしか土地利用が行われない地域であったようである。こうした様相から青梨子上屋敷遺跡と金古北十三町遺跡との境は本来なら金古北十三町遺跡11区・

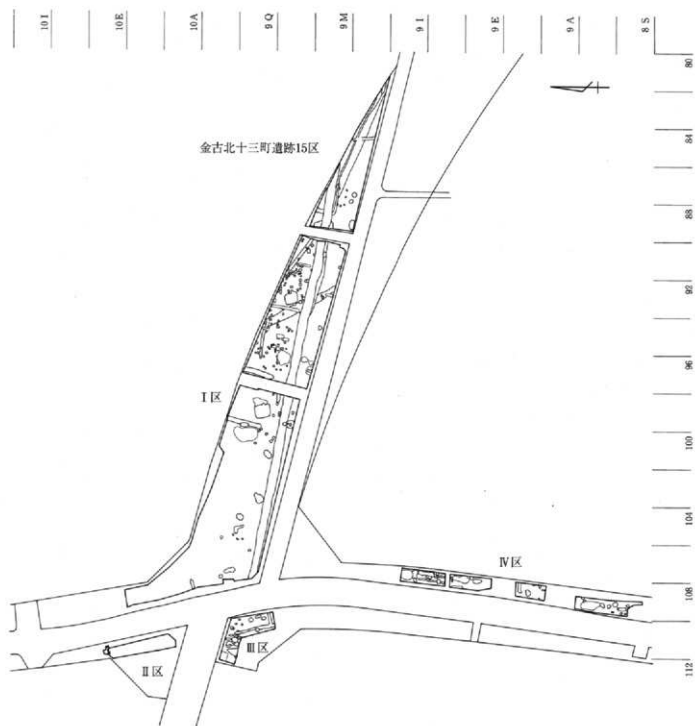
12区あたりに設定した方が適切であった。なお、現在の行政区分も金古北十三町遺跡15区と青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区の南側を通る道路が境界となっている。

遺物は縄文時代の土器、石器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、近世・近代の土器、陶器、石器、石製品、金属器、金属製品などが出土している。出土遺物の割合は近世・近代のものが大部分を占めている。

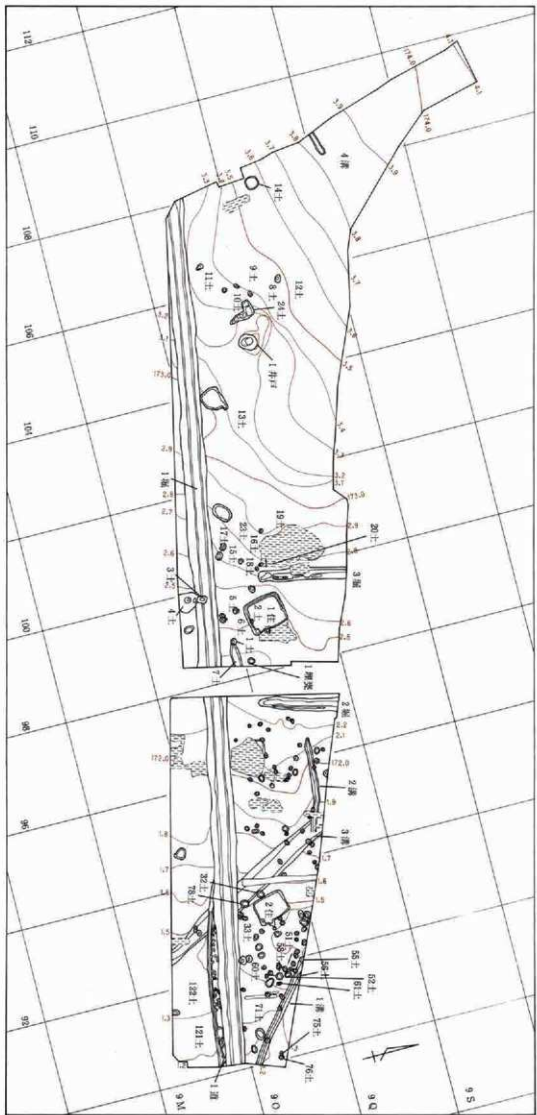
遺物の中でもっとも特徴的なものはⅠ区2号住居から出土した墨書された土師器杯である。この土師器杯は8世紀第4四半期に比定される一般的な土器である。しかし、墨書は今までの県内の出土例から見ると特異なものである。県内の墨書土器の多くが1字ないしは2字墨書されているだけであるのに対してⅠ区2号住居の墨書は細かな文字で多くの人名などが墨書されていた。内容についてはⅣ章の高島英之氏の考察で検討されているので参照していただきたい。

近世・近代の遺物はこの地域が三国街道の宿場街「金古宿」として繁栄していたときのものと見られる。金古宿については南雲栄治氏や飯森康広氏によって検討が行われているが資料が少なくまだ不明な点が多いようである。今回の出土遺物は今後のこの地域史研究の素材となりえると思われる。

1. 概要



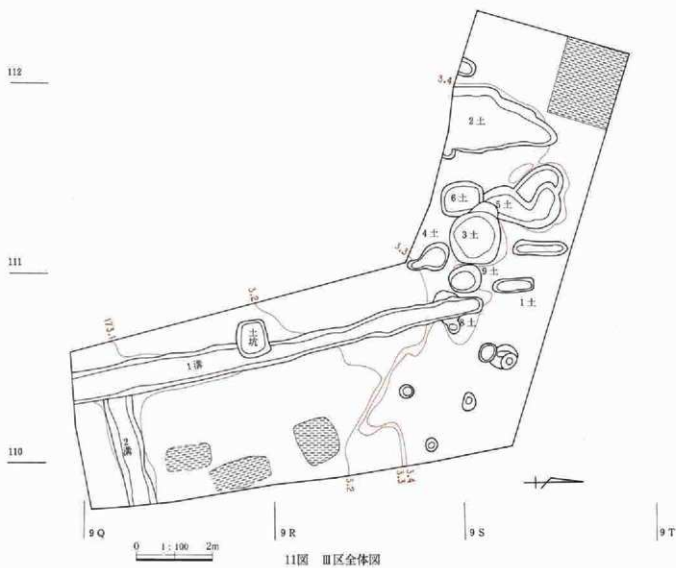
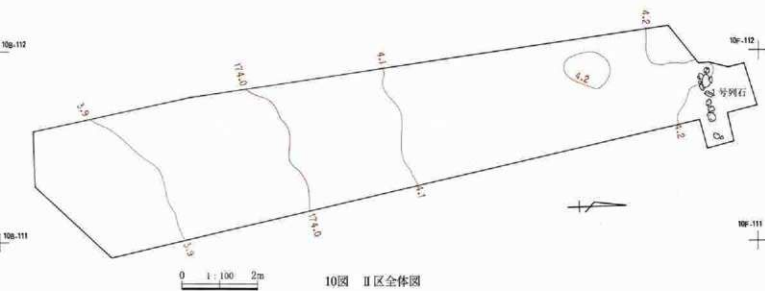
8 図 青梨子上屋敷遺跡 全体図 (1/500)

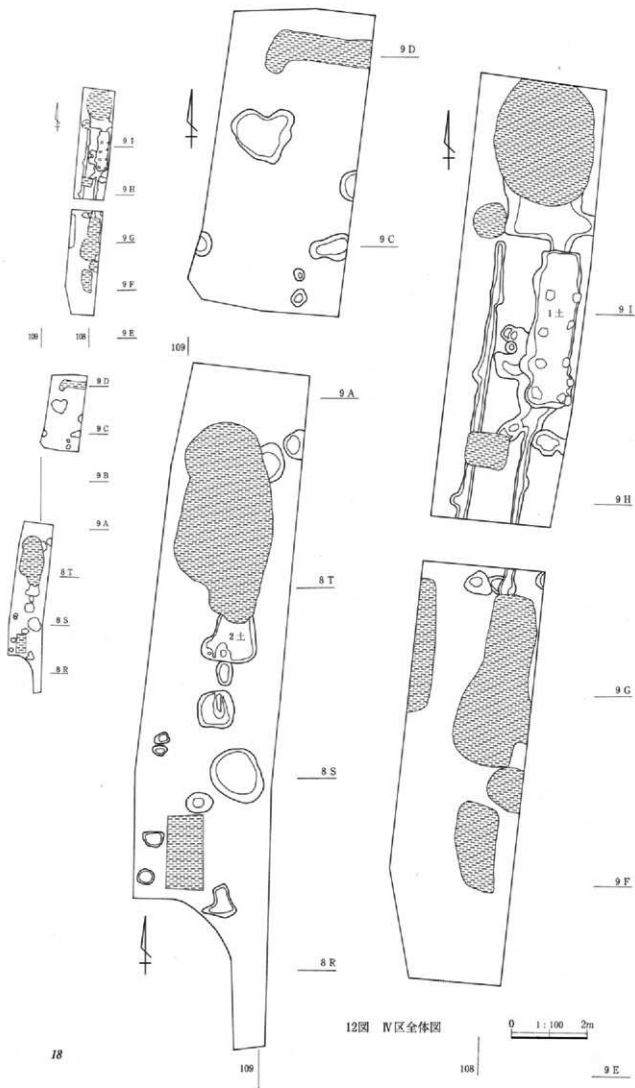


9图 1区总体图

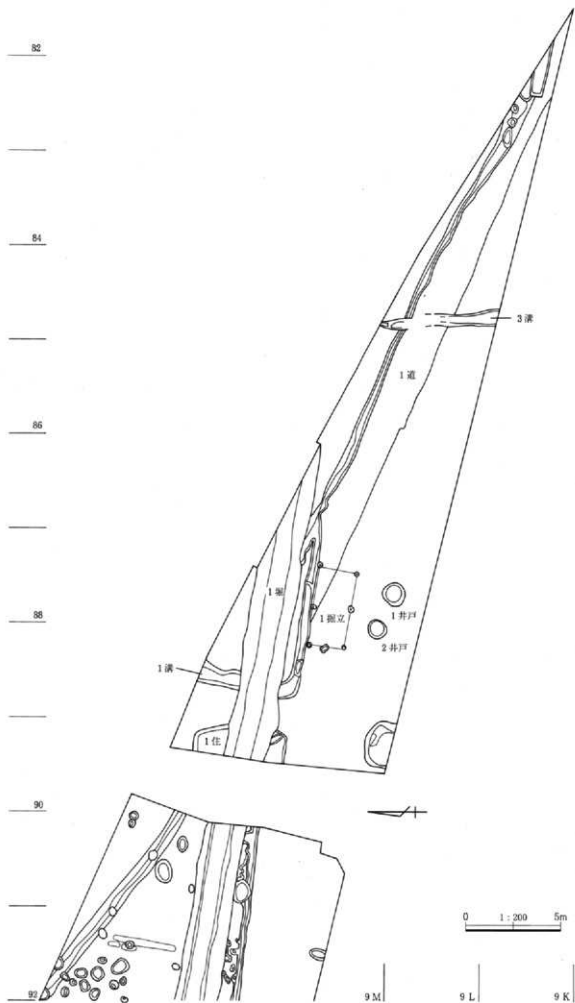
0 1:400 10m

1. 概要





12图 IV区全体图



13图 金古北十三町遺跡15区全体图

2. 竪穴住居

I区1号住居

本住居はI区調査区中程の9Q~R-98・99グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は東辺の壁上半とカマド前部を掘乱で欠く以外は比較的良好である。形態は南北に長い長方形を呈す。規模は長軸3.96m、短軸3.42m、北辺3.20m、東辺3.86m、南辺3.30m、西辺3.81m、床面積10.1㎡を測る。主軸方位はN-83°-Eを指す。

壁高は北辺61~64cm、東辺37cm、南辺61~63cm、西辺56~63cmで平均55cmを残す。

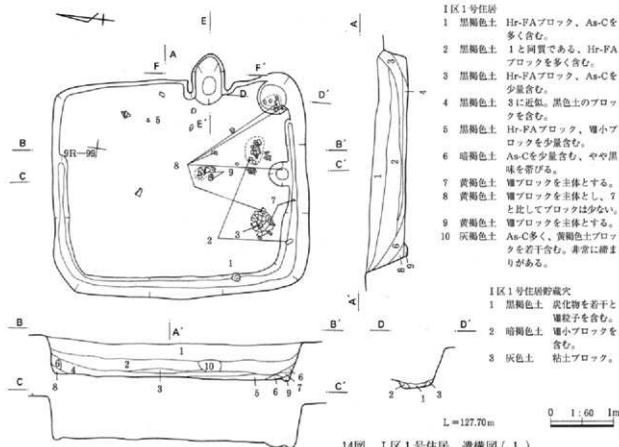
内部施設は貯蔵穴と周溝が見つかった。貯蔵穴は東南角隅に位置し、形態は円形で規模が径53×52cm、深度が11cmである。周溝は北辺中程から西側、西辺、南辺の貯蔵穴手前の西側で検出した。規模は北辺が幅16cm前後、深度3~5cm、西辺が幅14~26cm、深度6~10cm、南辺が幅20cm、深度3cmである。床面は地山をそのまま踏み固めて使用している。

カマドは東辺中程よりやや南よりに位置する。残存状態はカマド上部や煙道部を掘乱で欠き、天井部は崩落、両袖とも手前側を欠く。規模は全長79cm、幅85cm、燃焼部長75cm、右袖幅25cm、左袖長20cmでカマド自体は壁外に28cm延びる。カマド掘方は燃焼部前部と両袖下に円形で小規模な落ち込みが確認された。これらの落ち込みは燃焼部のものが壁を支えた支柱用の礎や袖の補強用に用いられた礎を据え付けたさいのものと見られる。

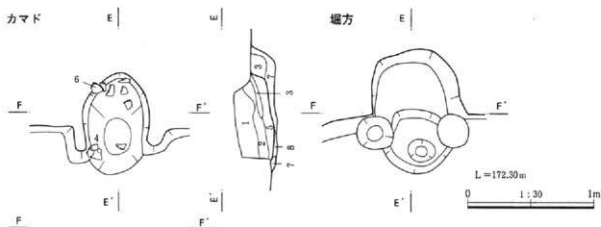
埋没状態は周囲から土砂が流れ込んだレンズ状の堆積が観察できることから廃棄後自然に埋没したと推察される。

遺物はカマド前部と住居南半に集中した出土が見られた。2と3の土師器杯は床面、4の土師器杯、6の須恵器杯蓋はカマド、8の土師器甕はカマドと貯蔵穴から出土している。

本住居の年代は出土遺物から8世紀第4~5中期に比定される。

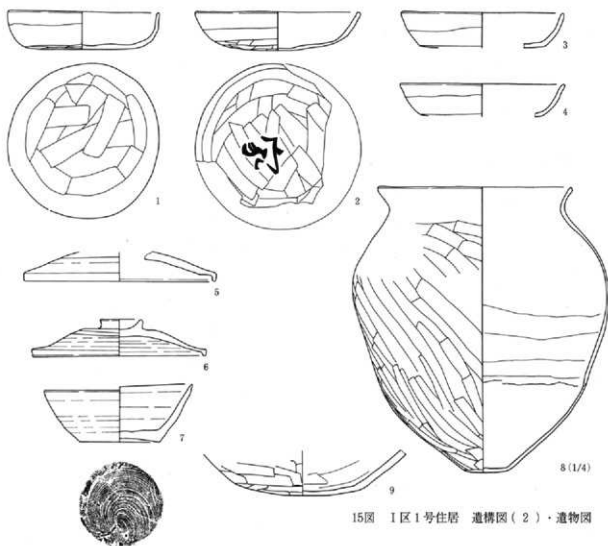


14図 I区1号住居 遺構図(1)



I区1号住居カマド

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 | Aa-Cを少量含む。焼土粒、炭化物混入。 |
| 2 暗褐色土 | 1に近似。 |
| 3 赤褐色土 | 焼土。 |
| 4 黒褐色土 | 焼土ブロック、炭、灰の混合土。 |
| 5 暗黄褐色土 | 炭、灰の混合土。焼土を若干含む。 |
| 6 黄褐色土 | 粘土ブロックと焼土、ごく少量の炭を含む。(軸部の崩落土)。 |
| 7 灰黒色土 | 炭を多量とごく少量の焼土粒を含む。 |
| 8 灰黒色土 | 炭、炭化物および燻ブロックを含む。 |
| 9 灰褐色土 | 粘土。 |



15図 I区1号住居 遺構図(2)・遺物図

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

I区1号住居 P L 16

遺物 No	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	或整形の特徴	備考
1	土師器 杯	+10 ほぼ完全	口径12.0 底径9.6 器高2.9	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部手持ちへう削り。	
2	土師器 杯	床高、+13 2/3	口径13.0 底径10.6 器高3.0	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部手持ちへう削り。	外面底部に「家」の墨書。
3	土師器 杯	床高 1/8	口径12.8 底径9.8 器高(2.7)	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部手持ちへう削り。	
4	土師器 杯	カマド 1/8	口径12.8 底径9.8 器高(2.5)	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部手持ちへう削り。	
5	黒色土器 杯蓋	+5 口縁部欠	口径15.0	陶砂粒/酸化塩/ にぶい褐色	内面黒色処理。ロクロ整形、回転石回り。天井部中程回転へう削り。内面へう磨き。	
6	須恵器 杯蓋	カマド 2/3	口径13.2 横径3.2 器高2.9	粗砂粒/還元塩/ 灰白色	ロクロ整形、回転石回り。横筋付。天井部中程回転へう削り。	
7	須恵器 杯身	+25、30 完全	口径11.6 底径6.2 器高4.5	粗砂粒/還元塩/ 灰白色	ロクロ整形、回転石回り。底部回転糸切り。	
8	土師器 壺	カマド、貯蔵 穴 3/4	口径20.5 底径4.5 器高30.0 胴径27.2	細砂粒/良好/ 赤褐色	胴部内面に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、胴部斜め方向へう削り。底部へう削り。内面胴部へうナデ。	
9	土師器 壺	+5、6 底部	底径10.2	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	胴部下位横方向へう削り、底部不定方向へう削り。内面へうナデ。	

I区2号住居

本住居はI区調査区東よりの90°P-92・93グリッドに位置している。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は掘り込み面などを確認することはできないが平面上では欠損部分もなく比較的良好であった。形態は南北に長い長方形を呈す。規模は長軸3.48m、短軸2.60m、北辺2.20m、東辺3.46m、南辺2.22m、西辺3.10m、床面積7.29㎡を測る。主軸方位はN-78°Eを指す。

壁高は北壁44~49cm、東壁45~49cm、南壁45~48cm、西壁42~47cmで平均46cmを残す。

内部施設は貯蔵穴が見ついている。貯蔵穴は東南角に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径48×42cm、深度21cmである。床面はIV層土、VI層土を入れて踏み固めている。

カマドは東辺南寄りに位置する。残存状態は天井部が崩落し、両袖とも手前側を欠くが燃焼部に壺を支えた支柱用の礎がそのまま残っているなど比較的良好である。規模は全長85cm、幅78cm、燃焼部長60cm、右袖幅20cm、左袖幅21cm、煙道残存長10cmでカマド自体はほとんど壁外に存在している。カマドは両袖に幅・厚さ15cm、長さ35cmほどに細長く切り出された凝灰岩を補強で使用している。また、天井部にも袖を渡すように細長く切り出された凝灰岩を補強に使用しているが、住居廃棄の際カマドは破壊されたためか天井部補強の礎は大きく割れた状態であった。

掘方は中央部に楕円形と不整形の浅い落ち込みが見られた。楕円形の落ち込みは規模が径82×64cm、深度22cm、不整形の落ち込みは長軸80cm、短軸60cm、深度15cmで遺物の出土は見られなかった。

埋没状態は周囲から土砂が流れ込んだレンズ状の堆積が観察できることから住居廃棄後自然に埋没したと推察される。

遺物は1の墨書された土師器杯がカマド前部の床面に細かく打ち欠かれた状態、2の土師器杯、9の須恵器壺は床面、3~5の土師器杯、6・7の須恵器杯蓋はカマドから出土している。

本住居の年代は出土遺物から8世紀第4四半期に比定される。

I区2号住居

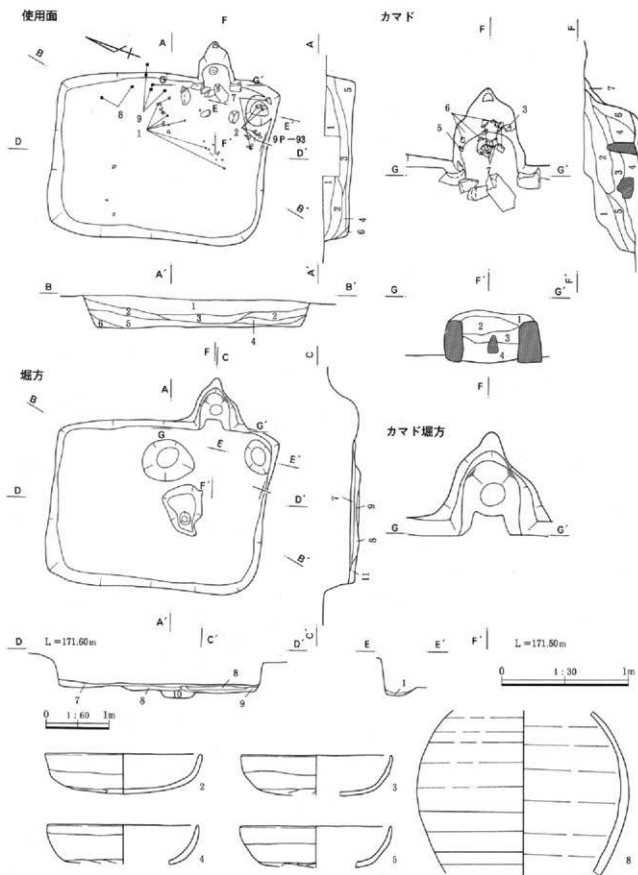
- 1 暗褐色土 Aa-C、Hr-FAブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 1に近似。VIブロックを含む。
- 3 灰褐色土 粘土、灰、焼土の混入で磨りがある。
- 4 黒褐色土 Aa-C、Hr-FAブロックを含む。
- 5 灰黒色土 VIブロック、粘土小ブロックを混入し、磨りがある。
- 6 黒褐色土 粘質土、Ⅱを多く含む。
- 7 暗褐色土 Ⅱブロック、VIブロックの混合土。(粘土)
- 8 暗褐色土 7に似るが磨り弱い。
- 9 灰褐色土 灰褐色粘土を多くと褐色礫(軟質)を含む。
- 10 暗褐色土 Ⅱを主体とし、黒色土が混入。
- 11 暗黒褐色土 黒色土ブロックを含む。

I区2号住居貯蔵穴

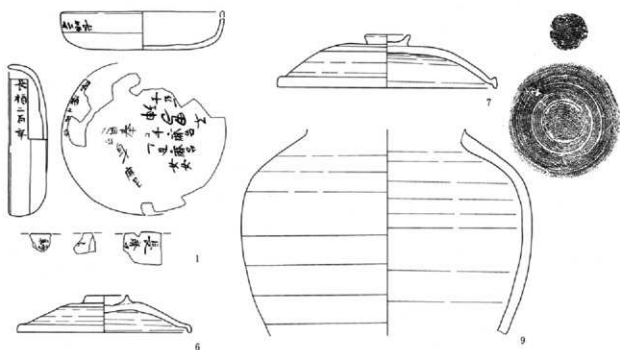
- 1 暗褐色土 黒色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む。

I区2号住居カマド

- 1 灰褐色土 粘土を主体としHr-FAブロックを含む。
- 2 灰褐色土 粘土、Hr-FAブロック、焼土を若干含む。
- 3 暗褐色土 2に近似。焼土ブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 焼土を若干含む灰層。
- 5 灰褐色土 1に近似、焼土を若干含む。
- 6 暗褐色土 焼土塊を多く含む。
- 7 赤褐色土 焼土、黒色土ブロック、粘土小塊を若干含む。



16図 I区2号住居 遺構図・遺物図(1)



17図 I区2号住居 遺物図(2)

I区2号住居 PL16

遺物 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	断土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徴	概要
1	土師器 杯	床直 3/4	口径12.8 底径 8.0 器高 3.0	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘラ削り。	外面口縁部、底部 に磨面。ほぼ整形。
2	土師器 杯	床直、貯蔵穴 完形	口径12.2 底径 8.8 器高 3.1	細砂粒/良好/ にぶい褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘラ削り。	
3	土師器 杯	カマド 1/8	口径11.8 底径 9.0 器高(3.2)	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘラ削り。	
4	土師器 杯	覆土中 1/8	口径11.8 底径 9.0 器高(3.0)	細砂粒/良好/ にぶい褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘラ削り。	
5	土師器 杯	カマド 1/6	口径11.8 底径 9.0 器高(3.1)	細砂粒/良好/ 褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘラ削り。	
6	須恵器 杯蓋	カマド 3/4	口径14.8 摘径 3.2 器高 3.9	細砂粒/還元焰 /灰色	ロクロ整形、回転右回り。換胎付。天井部中程は 回転ヘラ削り。	
7	須恵器 杯蓋	カマド 完形	口径17.2 摘径 3.3 器高 4.1	粗砂粒/還元焰 /にぶい褐色	ロクロ整形、回転右回り。天井部切り差し技法は 回転未切り。換胎付。天井部中程は回転ヘラ削り。	
8	須恵陶器 長頸壺	床直 割断片		粗砂粒・黒色粒/ 還元焰/灰白色	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下半は回転ヘラ 削り。輪縁は胴部上半のみ。	
9	須恵器 壺	床直 割断片	頸部径(12.2)	粗砂粒/還元焰 /灰色	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下半は回転ヘラ 削り。	

3. 堀・溝

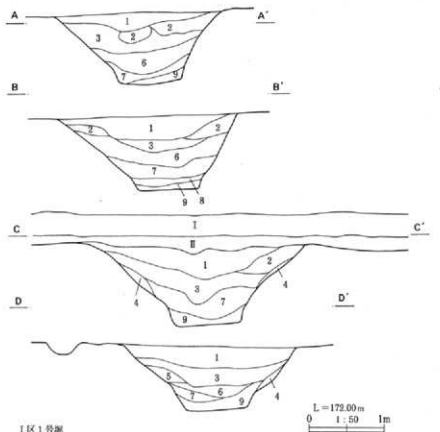
I区1号堀

本堀は調査区の南側、90~9R-90~107グリッドに位置する。なお、本堀は1995年度に調査を実施した金古北十三町遺跡15区1号堀と同一の遺構である。他遺構との重複関係は3号溝と1号道と重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。残存状態は調査した範囲では良好である。平面形態はほぼ同一の

幅で直線状を呈し、断面形態は調査区東側は比較的良好な箱薬研であるが西側は崩落のためか崩れた形態を呈する。なお、1995年度の調査区では大きく崩れて半円状を呈している。規模は調査区内の全長91m、遺構確認面での幅2.20~2.50m、底面幅0.8m前後、深度0.95~1.10mを測る。なお、全長は1995年度の金古北十三町遺跡14区で検出されている部分を加えると112mを測る。堀の走行は東西方向で方位

はN-80°-Wを指す。底面はほぼ平坦で西から東へ地形と同様の緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた痕跡は観察されないことから空堀状の状態であったと推定される。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であるが堀掘削時の排出土を片側へ土累状に積み込んだものが流入した様子は観察できなかった。また、埋没土は下部にI層に近い黒色土、上部にHr-FAが混入した灰褐色土が堆積している。遺物は陶器皿、軟質陶器焙烙・鍋、石製品石臼・環状品・砥石などが出土している。

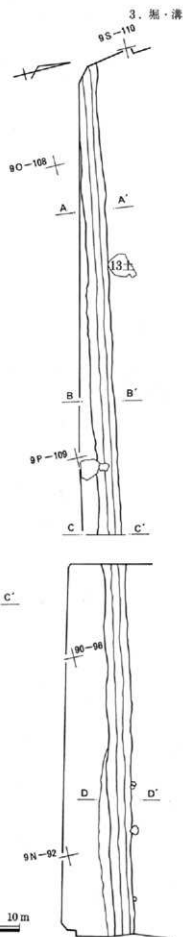
この堀の西側延長線上に位置するⅢ区や1995年度の調査区では同一の堀が存在していないことなどから、西は現高崎渋川線路線内で走行を北方向に変えると予想され北側に展開する館等の施設を区画する堀と推定される。そして2号堀、3号堀は1号堀と直角の位置関係に位置することから同時期の可能性が想定される。



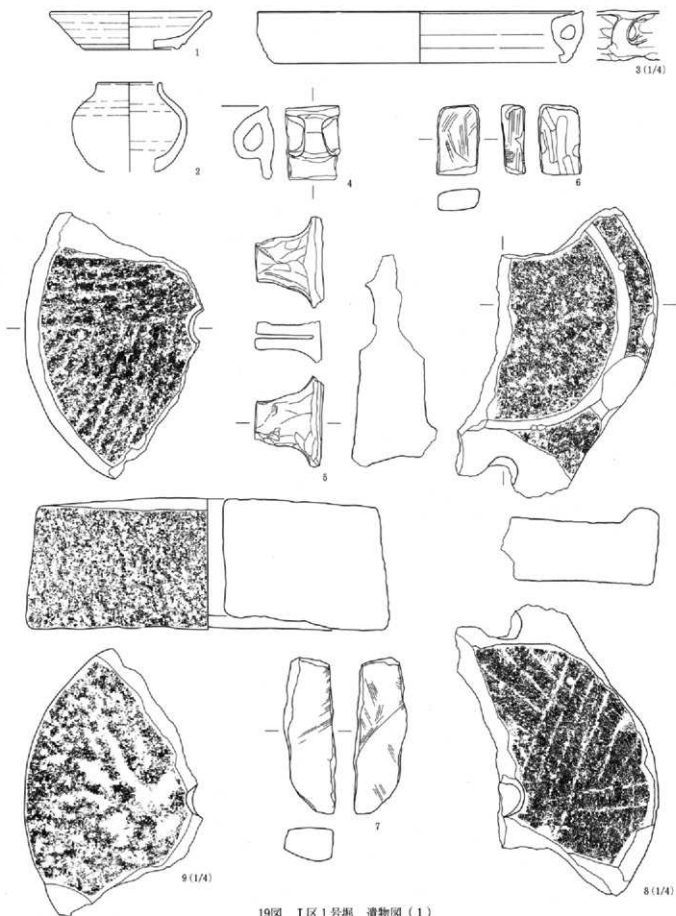
I区1号堀

- | | |
|---------|----------------------|
| 1 黒色土 | As-B多く混入。やや灰色を呈す。 |
| 2 黒色土 | 1に類似。締まりあり。 |
| 3 黒色土 | As-B、Hr-FAブロックを若干混入。 |
| 4 黒色土 | 堀の崩落土。 |
| 5 暗黄褐色土 | Hr-FAブロックを多く混入。 |
| 6 暗黄褐色土 | 若干のHr-FA、As-Bを含む。 |
| 7 暗黄褐色土 | 6と同質であるが、やや照味を帯びる。 |
| 8 暗黄褐色土 | 礫ブロックを含む。 |
| 9 暗黄褐色土 | 礫ブロック、砂粒土が混入。 |

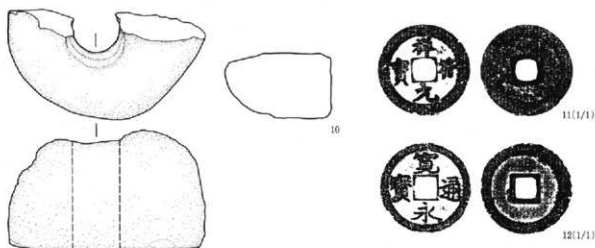
18図 I区1号堀 遺構図



IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物



19図 I区1号堀 遺物図(1)



20図 I区1号堀 遺物(2)

I区1号堀 PL17

遺物No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調 (石材)	成整形の特徴	摘要
1	灰輪陶器 皿	埋没土中 1/4	口径12.6 底径 8.4 器高 3.9 台径 7.2	水濁/還元焰/ 灰色	ロクロ整形、回転方向不明。高台は削り出し。内面 底部にトチン痕。内外面に施釉、高台部分は無釉。	美濃焼17C。 代か
2	軟質陶器 短脚壺	埋没土中 1/2	口径 4.8 底径(4.0) 器高(7.0)	微砂粒/酸化焰/ 褐色	ロクロ整形、回転右回り。	
3	軟質陶器 短脚壺	埋没土中 線部片	口径34.2 底径30.6 器高 5.4	微砂粒/酸化焰/ 黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。内耳部分は接合時の 指押さえ痕が残る。	
4	軟質陶器 内耳鉢	口縁部片		微砂粒/酸化焰/ 黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。内耳は接合。	
5	軟質陶器 火鉢	埋没土中 脚部		微砂粒/酸化焰/ 灰黄色	脚部部分はナデ。底部中央に径0.4cm、深4.5cmの 小孔有り。	
6	石製品 砥石	埋没土中 1/2	長(6.5) 幅 3.3 厚 1.9 重54.7	風沢石	上部側面は未使用。	
7	石製品 砥石	埋没土中 完形	長12.3 幅 3.9 厚 2.3 重161	流紋岩	上下面とも非常に使い込んでいる。側面は左が若干 使用、右は未使用。	
8	石製品 石臼	埋没土中 上臼1/4	厚 8.0 重5.5kg	粗粒輝石安山岩	磨り面は摩耗が激しく磨り跡も僅かに残る程度で ある。	
9	石製品 石臼	埋没土中 下臼1/4	厚13.3 重9.7kg	粗粒輝石安山岩	磨り面は摩耗が激しく磨り跡も明確ではない。下面 の調整は凹凸の状態である。	
10	石製品 環状	埋没土中 1/2	幅 16.4 厚 9.4 重1.42kg	粗粒輝石安山岩	全体的に磨り込んでいる。	
11	銭貨 渡半銭	埋没土中 完形	径2.5 孔0.6 厚0.1 重2.9		銭種「祥符元宝」	
12	銭貨 日本銭	埋没土中 完形	径2.5 孔0.6 厚0.1 重3.4		銭種「寛永通宝」一文銭。	

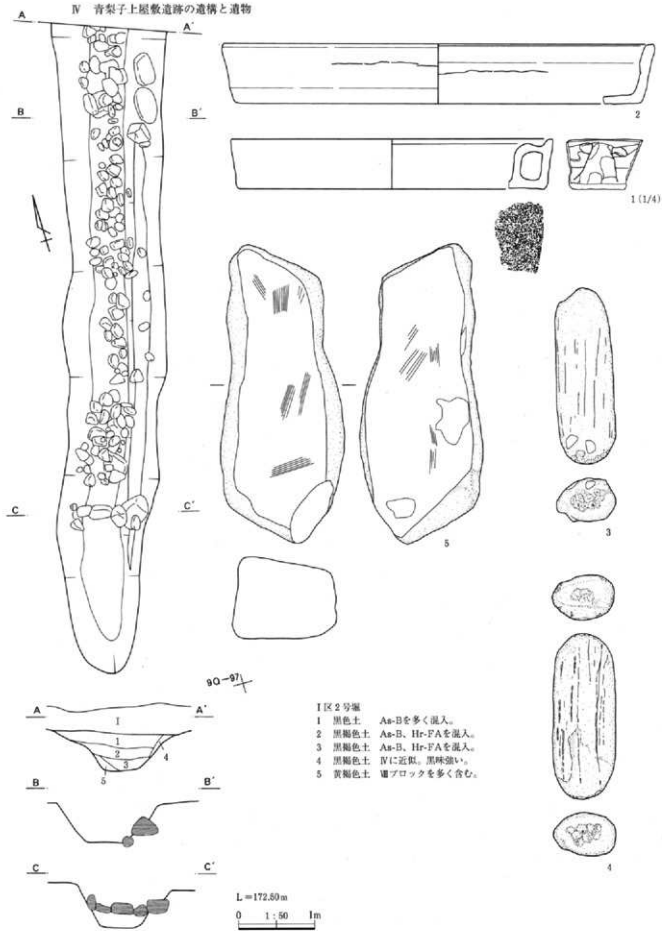
I区2号堀

本堀は調査区の中程9P～9R-96・97グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好であるが調査区北側に延びるため全貌は不明である。平面形態は若干の振幅は見られるがほぼ直線状である。断面形態は北端部は箱型研状を呈するが中程は東側に幅20cmほどの段を有している。規模は全長8.40m、確認面での幅1.14～1.50m、底面幅0.47～0.50m、深度0.50～0.60

mを測る。堀の走行は南北方向で方位はN-18°-Eを指す。底面はほぼ平坦で北から南へかけて緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた様子は観察されないことから空堀状の状態であったと推定される。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。埋没過程なかほどにおいて多量の15～50cm大の礫が投げ込まれている。

遺物は軟質陶器、石製品などの小破片が出土しているが図化可能なものはなかった。

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物



21図 I区2号堀 遺構図・遺物図

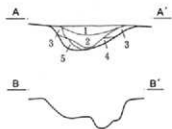
I区2号堀 PL17

遺物 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調 (石材)	成整形の特徴	概要
1	軟質陶器 埴輪	+10 小片	口径33.8 底径32.0 器高 5.3	微砂粒/酸化塩 /灰褐色	ロクロ整形、回転方向不明。内耳は接合。底部は無調整。	
2	軟質陶器 埴輪	+11 小片	口径34.0 底径32.0 器高 4.7	微砂粒/酸化塩 /灰褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部は無調整。	
3	石器 敲石	+7 完形	長13.8 幅 4.7 厚 3.4 重335	黒色片岩	下部のみ敲打痕が見られる。	
4	石器 敲石	+7 完形	長13.0 幅 5.0 厚 3.4 重395	緑色片岩	上・下部に敲打痕が見られる。	
5	石製品 砥石	+30 完形	長23.6 幅 9.8 厚 6.4 重2.35kg	粗粒輝石安山岩	上下面に擦痕が見られる。	

I区3号堀

本堀は9Q~9S-99グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は中程西側を擾乱で欠くが比較的良好である。なお、北側は調査区北側に延びるため全貌は不明である。平面形態は若干の振幅は見られるがほぼ直線状である。断面形態はV字状に近い形態を呈しており掘削当時は薬研状であったと想定される。規模は全長9.30m、確認面での幅1.10~1.23m、底面幅0.20~0.68m、深度0.32~0.36mを測る。堀の走行は南北方向で方位はN-13°-Eを指す。底面は東側に細長い土坑状の落ち込みが見られ、北から南へかけて緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた痕跡は観察されないことから空堀状の状態であったと推定される。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

遺物は陶器、軟質陶器、石製品などが出土しているが腐化可能な遺物は僅かであった。



I区3号堀

- 1 黒色土 As-Bを含む。
- 2 黒色土 1に近似。As-Cを含む。
- 3 黒色土 As-C、As-Bを若干含む。
- 4 黒色土 2に近似。やや黒味が強い。
- 5 黒色土 4に近似。礫を含む。

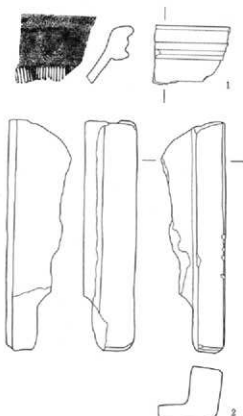
L=172.80m
0 1:50 1m

9R-100+

22図 I区3号堀 遺構図

I区3号堀 PL17

遺物 No	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徴
1	陶器 細鉢	埋没土中 口縁部片		緻密/還元焰/ にぶい橙色	口縁部凸帯は折り返しによるものか。褐色釉を全 体に施軸、口唇部端部には黒色釉を施軸。
2	軟質陶器 火鉢	埋没土中 脚部		粗砂粒/酸化焰 にぶい黄褐色	表面はヘラ削り後丁寧なナデ整形。



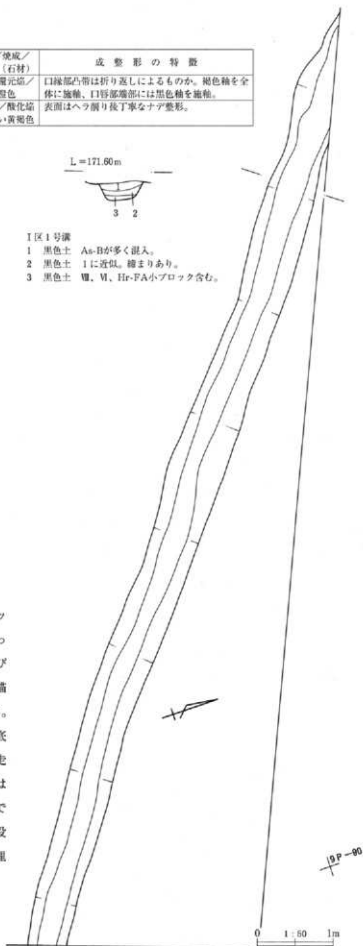
23図 I区3号堀 遺物図

I区1号溝

本溝は調査区北端部、90～9P-90・91グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好であるが調査区外に延びるため全貌は不明である。平面形態は僅かに弧を描くがほぼ直線に近い。断面は逆台形状を呈している。規模は全長12.40m、確認面での幅0.52～0.60m、底面幅0.25m前後、深度0.20～0.25mを測る。溝の走行は東西方向で方位はN-53°-Wを指す。底面はほぼ平坦で西から東へ地形と同様の緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた痕跡は観察されない。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

遺物は出土していない。

24図 I区1号溝 遺構図



I区1号溝

- 1 黒色土 As-Bが多く混入。
- 2 黒色土 1に近似。糖まりあり。
- 3 黒色土 III、VI、Hr-FA小ブロック含む。

I区2号溝

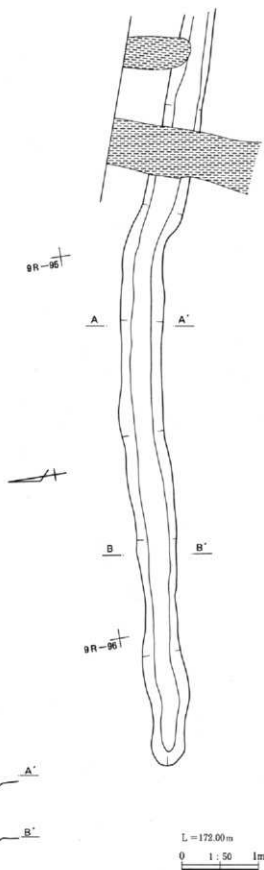
本溝は調査区東北端部、90～91グリッドに位置する。他遺構との重複関係は3号溝と重複する。新旧関係は本溝の方が新しいが、3号溝内の平面形態は明確でないことからそれほどの時間差は無いと考えられる。残存状態は比較的良好であるが一部不明な箇所が存在する。平面形態は僅かに弧を描くがほぼ直線に近い。断面は逆台形状を呈している。規模は全長9.80m、確認面での幅0.52～0.60m、底面幅0.25m前後、深度0.10～0.15mを測る。溝の走行は東西方向で方位は $N-85^{\circ}-W$ を指す。底面はほぼ平坦で西から東へ地形と同様の緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた痕跡は観察されない。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

遺物は出土していない。

I区3号溝

本溝は調査区東北端部、9Q-94～96グリッドに位置する。他遺構との重複関係は1号堀と2号溝、1号道と重複する。新旧関係は本溝の方が古い。残存状態は比較的良好であるが両端が調査区外に延びるため全貌は不明である。平面形態はほぼ直線に近い。断面は深度が浅いため明確ではない。規模は全長21.30m、確認面での幅1.15～2.35m、底面幅0.58～1.22m、深度0.10～0.15mを測る。溝の走行は南北方向で方位は $N-28^{\circ}-W$ を指す。底面はほぼ平坦で北西から南東へ地形と同様の緩やかな傾斜であるが内部に水が流れた痕跡は観察されない。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

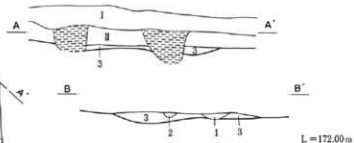
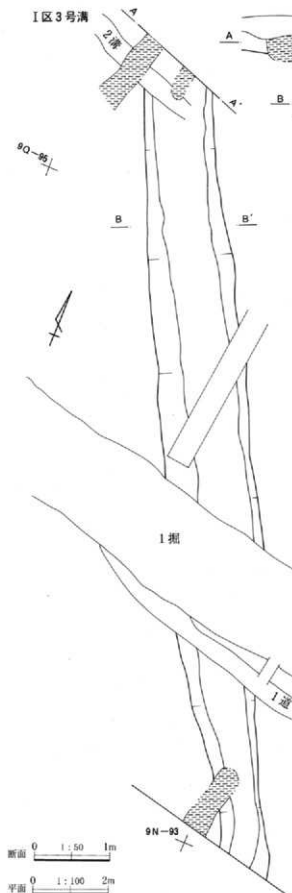
遺物は出土していない。



25図 I区2号溝 遺構図

IV 青梨子上層敷道跡の遺構と遺物

I区3号溝



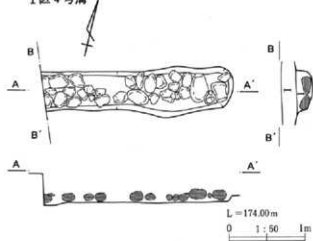
- I区3号溝
 1 暗褐色土 Hr-FAブロックとAs-Bの混合土。
 2 によい褐色土 1に類似。
 3 明褐色土 Hr-FAを多く含む。

I区4号溝

本溝は調査区の北西部端、10A-107・108グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好であるが調査区外に延びるため全貌は不明である。平面形態はほぼ直線状を呈する。断面形態は底面に丸みをもつU字状を呈する。規模は全長25m、確認面での幅0.50~0.65m、底面幅0.40~0.50m、深度0.65mを測る。溝の走行は東西方向で方位はN-75°-Eを指す。溝内部の底面に近い部分には径10~45cm大の礫が敷かれたような状態で検出されたが用途・目的は不明である。埋没状態はVI層を中心にHr-FAブロックを含んだ土で短時間に埋没している。

遺物は出土していない。本溝の時期は古墳時代後期から奈良時代に比定される。

I区4号溝



- I区4号溝
 1 暗褐色土 As-Cを多くとHr-FA小ブロックを含む。

26図 I区3号溝・4号溝 遺構図

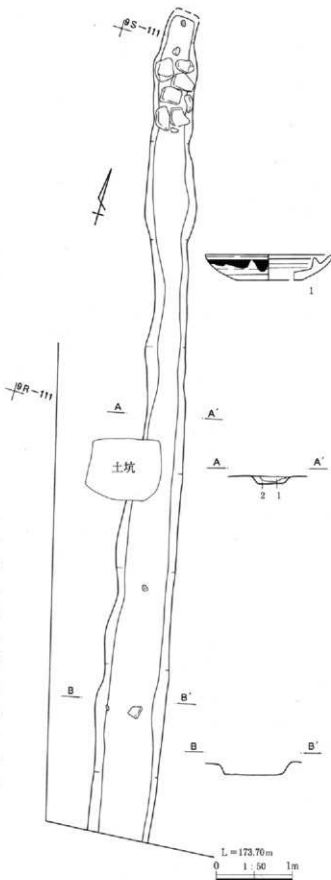
Ⅲ区1号溝

本溝は調査区の西より、9P～9S・110グリッドに位置する。他遺構との重複関係は南よりで2号溝と重複する。新旧関係は本溝の方が新しい。残存状態は中程を擾乱で欠くが比較的良好である。なお、溝南側は調査区外に延びるため全貌は不明である。平面形態は北側が南側に比べて狭いがほぼ直線状を呈する。断面形態は逆台形を呈する。規模は全長10.9m、確認面での幅0.50～0.94m、底面幅0.36～0.67m、深度0.10～0.20mを測る。溝の走行は南北方向で方位はN-12°-Wを指す。底面はほぼ平坦で北から南へ緩やかな傾斜であるが水が流れた痕跡は確認できなかった。溝北側では長さ1.0mの間に径20～30cm大の礫が置かれていた。この性格については不明である。埋没状態は土層断面の観察から自然埋没である。

遺物は上位から近代の陶器灯明皿が出土している。本溝の時期は埋没土や出土遺物から近世後期遺構に比定される。

Ⅲ区2号溝

本溝は調査区の南端部、9Q-109・110グリッドに位置する。他遺構との重複関係は西側端部で1号溝と重複する。新旧関係は本溝の方が古い。残存状態は調査区内では比較的良好であるが東側が調査区外に延びるため全貌は不明である。平面形態は直線状を呈する。断面形態は逆台形状である。規模は全長2.9m、確認面での幅0.7m前後、底面幅0.36～0.42m、深度0.25mを測る。溝の走行は東西方向で方位はN-77°-Eを指す。底面はほぼ平坦で傾斜は見られない。埋没状態はほぼⅡ層で短期間に埋没しているようである。溝内には径10～30cm大の礫が多量に出土している。これらの礫は廃棄によるものではなく当初から据えられたものとみられる。



Ⅲ区1号溝

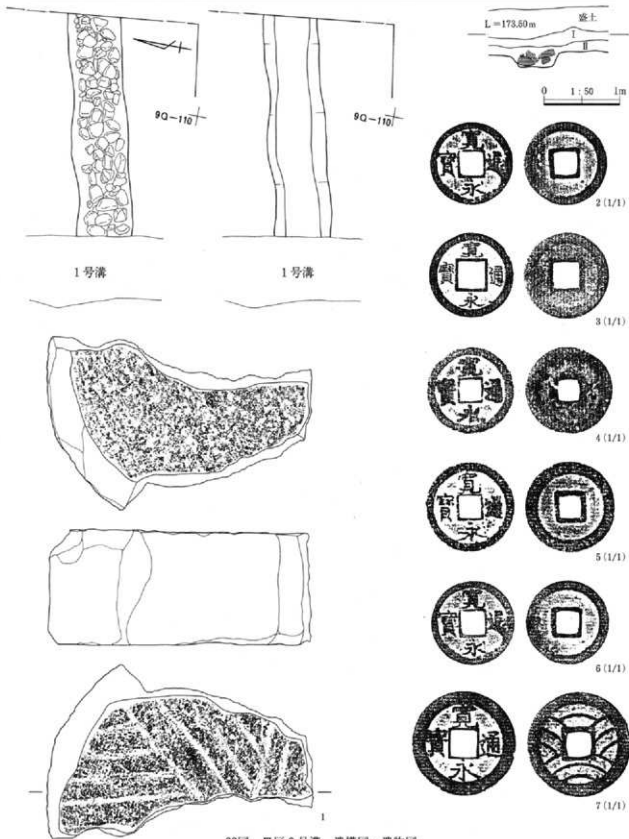
- 1 黒褐色土 粘質土。
- 2 暗褐色土 粘質土。礫を含む。

27図 Ⅲ区1号溝 遺構図・遺物図

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

Ⅲ区1号溝 P L18

遺物 No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/構成/ 色調 (石材)	成型形の特徴	摘要
1	陶器 灯火皿	埋没土中 口縁部片	口径10.0 底径 5.0 器高 2.0	微砂粒/還元焰 /灰色	ロウロ整形、回転石回り水、内面塗受け凸帯は削付、底部は回転へう張り、内面と外面口縁部に黒色釉が塗布。	



28図 Ⅲ区2号溝 遺構図・遺物図

Ⅲ区2号溝 PL18

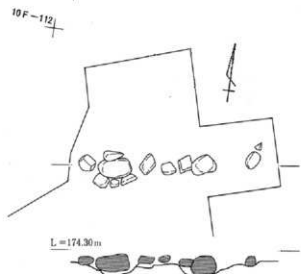
遺物 No.	種類 器 名	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/ 色調 (石材)	成 型 形 特 徴	摘 要
1	石製品 石臼	+10 上臼片	厚9.1 重 3.5kg	粗粒輝石安山岩	両部は打ら欠かかれている。すり面は摩耗が激しくすり溝も明確ではない。	
2	鉄貨 日本銭	+3 完全形	径2.3 孔0.6 厚0.1 重1.8		銭様「寛永通宝」一文銭。	
3	鉄貨 日本銭	埋没土中 完全形	径2.3 孔0.7 厚0.1 重2.2		銭様「寛永通宝」一文銭。	
4	鉄貨 日本銭	埋没土中 完全形	径2.4 孔0.6 厚0.1 重2.0		銭様「寛永通宝」一文銭。	
5	鉄貨 日本銭	埋没土中 完全形	径2.4 孔0.6 厚0.1 重2.9		銭様「寛永通宝」一文銭。	
6	鉄貨 日本銭	埋没土中 完全形	径2.4 孔0.6 厚0.1 重2.1		銭様「寛永通宝」一文銭。	
7	鉄貨 日本銭	埋没土中 完全形	径2.8 孔0.7 厚0.1 重3.7		銭様「寛永通宝」四文銭。裏面に縁紋(11段)。	

4. 列石

Ⅱ区1号列石

本遺構は調査区北側、10E-111グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好であるが調査区内で検出された範囲は遺構の一部しかないため全貌は不明である。平面形態は礫を直線状に配置したものである。配置された礫は径10~35cm大と規格性は見られないが比較的大きな礫を直線状に配置し小礫を大きな礫の周りに置いているようである。また比較的大きな礫は地表面を土坑状に掘り込み礫上面の高さを揃えている。なお、検出した礫には加工痕は見られなかった。

列石状態



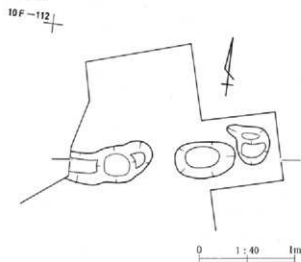
5. 道

Ⅰ区1号道

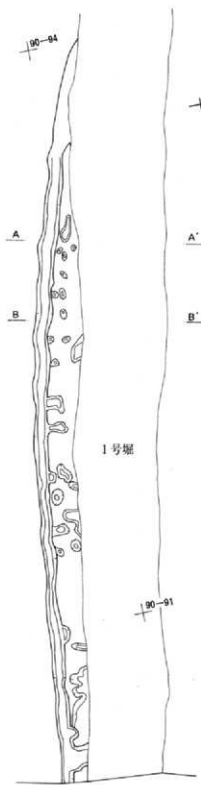
本道は調査区の南東部、9N・9O-90-93グリッドに位置する。他遺構との重複関係は1号堀、3号溝と重複する。新旧関係は1号堀より古く、3号溝より新しい。残存状態は1号堀によって大部分を欠くため全貌や詳細は不明である。道の形状は道路部分は非常に硬く踏みしめられており多少の凹凸が見られる。端には側溝が設けられている。側溝は幅35cm~40cm、深度15cm前後を測り断面は逆台形状を呈する。規模は全長20m、側溝芯々間幅1.3m以上を測る。道の走行は東西方向で方位はN-78°-Eを指す。

道の遺構は金古北十三町遺跡14区でも1号堀の北側で検出されておりⅠ区1号道と同様に1号堀より

掘方

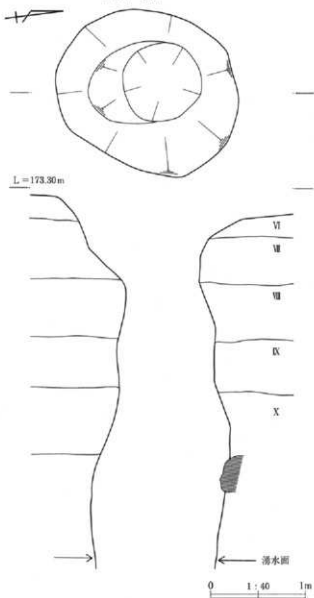


29図 Ⅱ区1号列石 遺構図

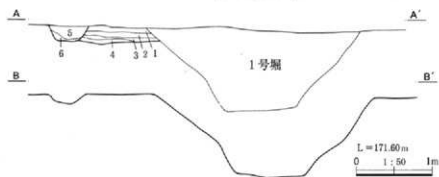


古いものである。その走行もほぼ同様で付け替えによるものと考えられる。なお、新旧については不明である。

I区1号井戸



31図 I区1号井戸 遺構図



30図 I区1号道 遺構図

- I区1号道
- 1 黒色土 As-Bが混入して非常に硬く締まっている。
 - 2 黒色土 1に類似。
 - 3 暗褐色土 As-Bを20%含む。
 - 4 褐色土 Wに類似。
 - 5 黒色土 Wに近似、As-Bを30%含む。
 - 6 黒褐色土 Wに近似、As-Bを10%含む。

6. 井戸

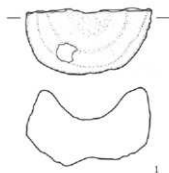
I区1号井戸

本井戸は調査区の西部、9R-104・105グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好である。平面形態は楕円形を呈し、断面は水の浸食の影響か湧水点付近が膨らむ。規模は長径1.96m、短径1.65m、深度4.0m以上である。なお、5月に調査した時の湧水点は深度3.9m程であった。

遺物は図示した用途不明の石製品凹石が1点出土しただけである。

I区1号井戸 PL18

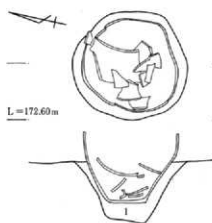
遺物No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徴	摘要
1	石製品 凹石	埋設土中 1/2	径10.0 厚 6.3 凹径 6.0 凹深 2.3 重 210.0	二ヶ岳軽石	外面は粗く打ち欠いて形を作りだしている。凹部分はよく揃っている。	



32図 I区1号井戸 遺物図

7. 埋壺

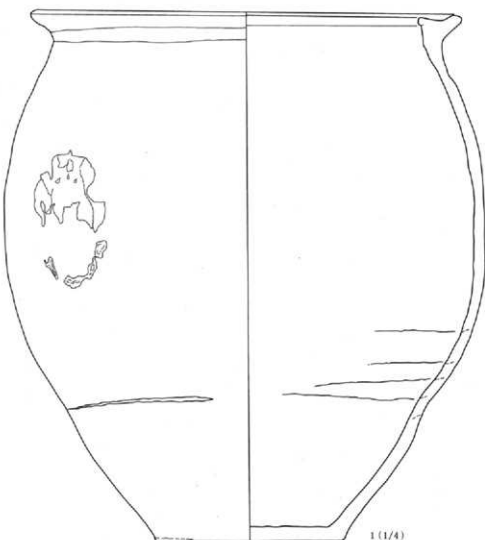
I区1号埋壺



I区1号埋壺

1 灰褐色土 Hr-FA小ブロック、
黒色土ブロック含む。

0 1:20 50cm



33図 I区1号埋壺 遺構図・遺物図

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

本遺構は調査区中程、9Q-98グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は甕口縁部付近は一部欠落している。

甕は土坑状の掘り込みに据えられてあったがこの

土坑状の掘り込みは平面形態が円形に近い。規模は径1.24×1.16m、深度0.66mを測る。

据えられている甕は近世の東海常滑産の製品である。

I区1号埋甕 P.L.18

遺物 No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調 (石材)	成型の特徴	摘要
1	陶器 甕	口縁一部欠	口径45.0 底径20.0 器高55.5	細砂粒/還元焰 /赤褐色	胴部下部に輪積面が残る。胴部に焼成時の歪みが見られる。全体に褐色輪線を施す。	常滑産

8. 土坑

土坑は3表に示したようにI区で124基、III区で9基、IV区で3基の合計136基を調査した。

形態・規模は個々の土坑により異なり一応ではない。埋没状態も1ないしは2層の土で埋没しており自然埋没か人為的埋没かを判断する材料は少ない。遺物はいくつかの土坑からは出土しているが因化可能なものは僅かしかなかった。

こうした状況から性格・時期を判定することの可能なものはごく僅かでしかなかった。

I区125号土坑

本土坑は調査区の中程、9P-96グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は大半を擾乱によって欠くため全貌・詳細については不明である。平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。規模は残存部分で南北辺0.80m、東西辺1.70m、深度0.22mを測る。内部底面上には径15~35cm大の歪角礫が7点ほど出土している。これらの礫についての性格などは不明である。

III区3号土坑

本土坑は調査区の北より9R・9S-111グリッドに位置する。他遺構との重複は5号土坑、6号土坑と重複する。新旧関係は本土坑の方が新しい。残存状態は比較的良好である。平面形態はやや丸みをもった方形を呈する。規模は径1.37×1.32m、深度0.65mを測る。内部は上半の中程に青灰色砂礫土を3~8cmの厚さに固めて立方体の箱状施設を設けている。この施設は長さ0.76m、幅0.40m、深度0.34mを測る。内部は炭化物を含んだ黒色土で覆われている。土坑下半は箱状施設の下部に径10~25cmの礫を入れているが、礫はあまり密ではなく比較の間隔があり上半の箱状施設を支えるような施設とは考えにくい。

遺物は下半の礫中より軟質陶器火鉢片、石製品砥石、石臼などが出土している。

I区24号土坑

本土坑は調査区の中程、9R・9S-105グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は室部分の天井部は崩落しているが比較的良好である。底面形態は階段部分に対して室部分が直交するようなL字状に掘り込まれている。規模は全長2.60m、幅1.75m、深度0.90mで階段部分は長さ1.98m、幅0.82m、室部分は長さ0.92m、幅1.75mを測る。階段は雑な作りであるが最上段と最下段には礫が据えられていた。階段も高低差は5~10cmほどとあまり高低差のない掘り方である。室部分は天井部が崩落していたが室内高は0.7~0.8mほどであったと推定される。遺物は出土しなかった。発掘調査時の所見では近世に比定される。

8. 土坑

III区 9号土坑

本土坑は調査区の北より1号溝と3号土坑の間、9R・9S-100グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好である。平面形態は楕円形を呈する。規模は長径1.36m、短径0.72m、深度0.26mを測る。内部には径10cm大前後の円礫が底面より5cmほど上位に密に入っている。

遺物は礫中より軟質陶器焙烙などが出土している。

IV区 1号土坑

本土坑はIV区の一帯北側に位置する調査区の9H・9I-107グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は一部攪乱によって欠くが比較的良好である。平面形態は一部崩落などにより崩れているがほぼ長方形を呈する。規模は長さ4.08m、幅1.18m、深度0.30m前後を測る。底面はほぼ平坦である。内部は東辺際と西辺際にほぼ1m間隔に径25cm前後の扁平な礫を配置している。埋没状態はレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

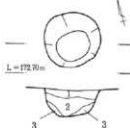
遺物は陶器鉢、壺、軟質陶器焙烙、石製品砥石などが出土している。本土坑の性格は建物の基礎と考えられるが上部の構造については不明である。

IV区 2号土坑

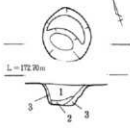
本土坑はIV区の一帯南側に位置する調査区の8S・8T-109・110グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は一部を攪乱によって欠くが比較的良好である。平面形態は各辺が直線的であることから五角形に近い形態を呈する。規模は長径2.03m、短径1.93m、深度0.71mを測る。内部には径10~65cm大の礫が多量に出土した。これらの礫には規則性が認められないため廃棄された可能性がある。埋没状態は北側から土砂が流入した痕跡が観察できるが自然堆積と見られる。

遺物は出土していない。

I区 1号土坑



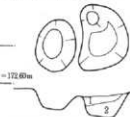
I区 2号土坑



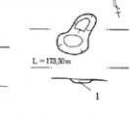
I区 3・4号土坑



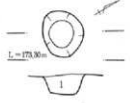
I区 5・6号土坑



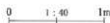
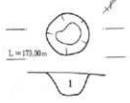
I区 9号土坑



I区 8号土坑



I区 10号土坑



I区 1号土坑

- 1 淡褐色土 As-Cを若干含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを僅かに含む。
- 3 褐色砂質土 2に類似、黄色土粒を若干含む。

I区 2号土坑

- 1 暗褐色土 As-Cを僅かに含む。
- 2 暗褐色土 黄色土粒を若干含む。
- 3 淡茶褐色土 礫ブロックを含む。

I区 3号土坑

- 1 褐色土 As-Bを含む。

I区 4号土坑

- 1 褐色土 As-Cを僅かに含む。

I区 6号土坑

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土 礫ブロックを少量含む。

I区 8号土坑

- 1 黒褐色土 混入物特になし。粘性あり。

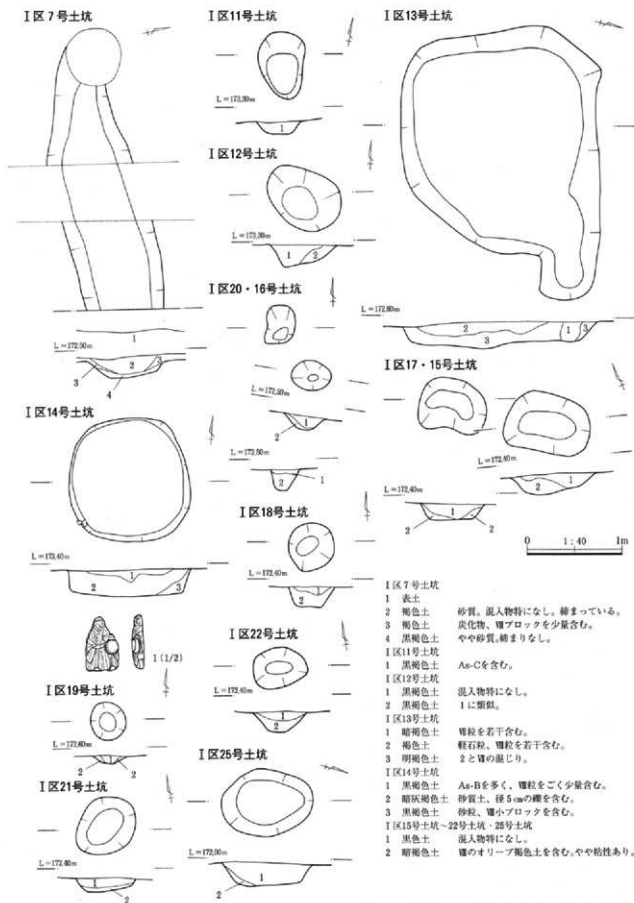
I区 9号土坑

- 1 黒褐色土 軽石を僅かに含む。粘性あり。

I区 10号土坑

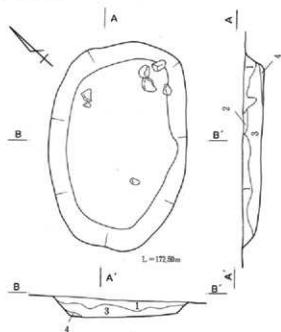
- 1 黒褐色土 混入物特になし。粘性あり。

34図 I区 1~6・8~10号土坑 遺構図



35図 I区 7・11～22・25号土坑 遺構図・遺物図

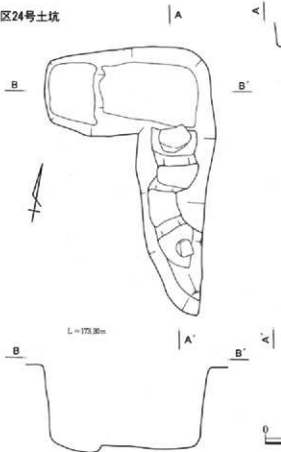
I区23号土坑



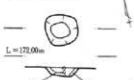
I区23号土坑

- 1 黒色土 軽石粒、礫粒を少量含む。
 2 暗赤褐色土 焼土粒が若干混じる。
 3 暗褐色土 1と2の混合土。
 4 オリーブ褐色土 礫のブロック。

I区24号土坑



I区27号土坑



I区29号土坑



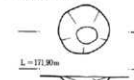
I区31号土坑



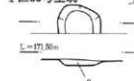
I区33号土坑



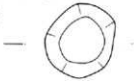
I区28号土坑



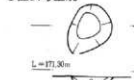
I区30号土坑



I区32号土坑



I区34号土坑



I区38号土坑



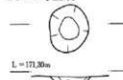
I区35号土坑



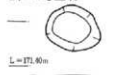
I区36号土坑



I区37号土坑



I区39号土坑

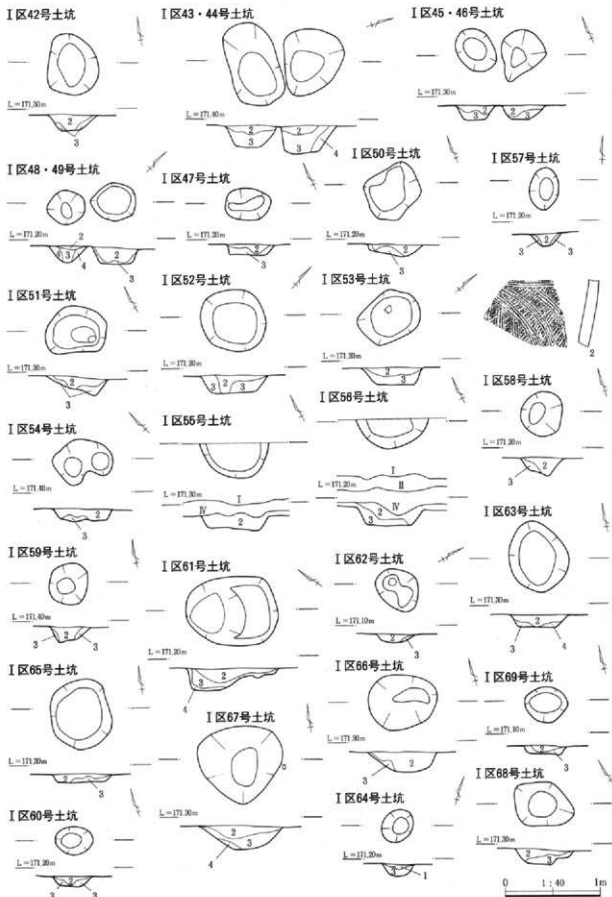


I区40・41号土坑

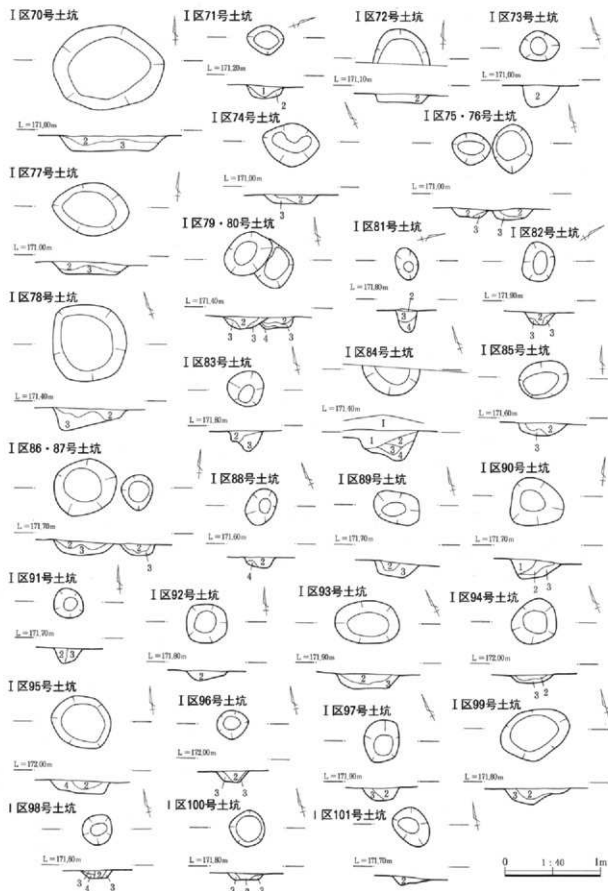


0 1 : 40 1m

36図 I区23・24・27~41号土坑 遺構図

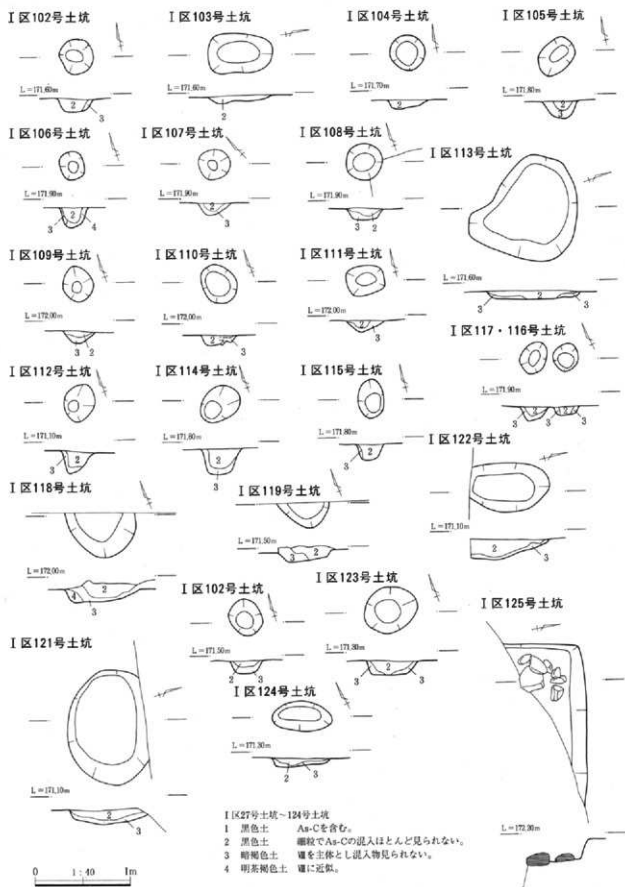


37图 I区42~69号土坑 遺構図・遺物図



38图 I区70~101号土坑 造構圖

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物



39図 I区102~125号土坑 遺構図

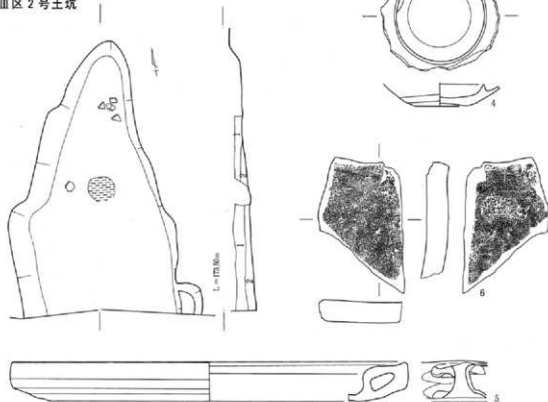
Ⅲ区1号土坑



Ⅲ区2号土坑

- 1 黒褐色土 燻ブロック、炭を少量含む。
2 暗褐色土 軽石粒を少量含む。

Ⅲ区2号土坑

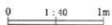


Ⅲ区4号土坑



Ⅲ区4号土坑

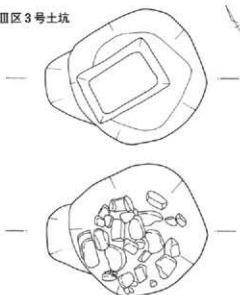
- 1 暗褐色土 燻ブロック、焼土粒、炭粒を少量含む。



40圖 Ⅲ区1・2・4号土坑 遺構図・遺物図

IV 青梨子上層敷遺跡の遺構と遺物

Ⅲ区 3号土坑



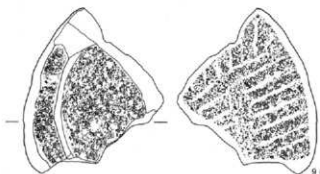
L=173.50m

Ⅲ区 3号土坑

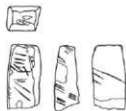
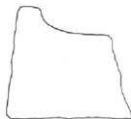
- 1 黒褐色土 炭化物を少量含む。
- 2 緑灰色土 青灰色砂礫。
- 3 暗褐色土 混入物なし。
- 4 暗褐色土 燧ブロックを含む。
- 5 黒褐色土 燧ブロックを少量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物、焼土粒、燧粒を僅かに含む。
- 7 褐色土 燧ブロック層を含む。



7



9 (1/4)



8

Ⅲ区 5号・6号土坑



5号土坑

3号土坑

6号土坑

L=173.50m

0 1:40 1m

Ⅲ区 8号土坑



L=173.50m

Ⅲ区 8号土坑

- 1 暗褐色土 Aa-Bを多くと燧ブロック、焼土を若干含む。
- 2 暗褐色土 Aa-B、炭化物、焼土粒子を若干含む。
- 3 黒褐色土 灰、焼土を含む。
- 4 灰黒色土 焼土ブロック、木炭を炭に含む。
- 5 黄褐色土 焼土含み、軟質。燧主体とする。
- 6 黄褐色土 燧、炭炭化物、焼土を若干含む。

Ⅲ区 5号土坑

1 暗褐色土 Aa-Bを少量含む。

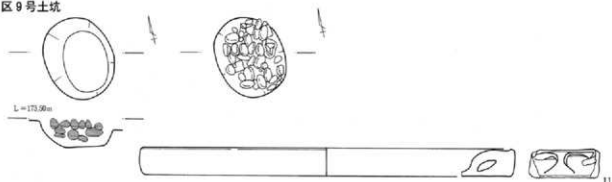
2 暗褐色土 燧ブロック粒を含む。

Ⅲ区 6号坑

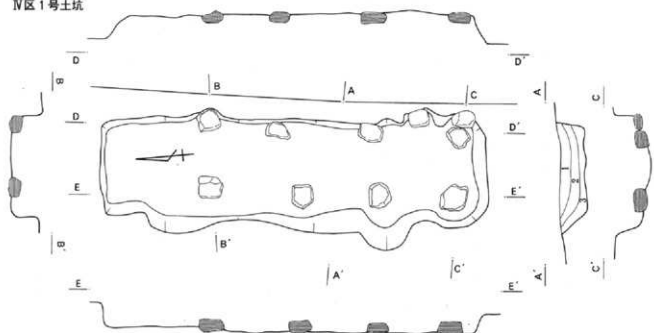
1 黒褐色土 燧ブロックを少量含む。

41図 Ⅲ区 3・5・6・8号土坑 遺構図・遺物図

Ⅲ区9号土坑



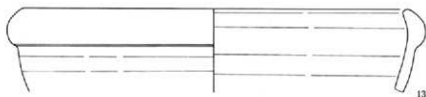
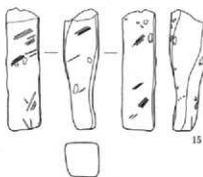
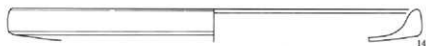
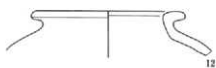
Ⅳ区1号土坑



Ⅳ区1号土坑

- 1 黒色土 灰黒色土ブロックを含む。
- 2 黒色土 織紋を少量含む。
- 3 暗黒褐色土 粘質土、織ブロックを含む。

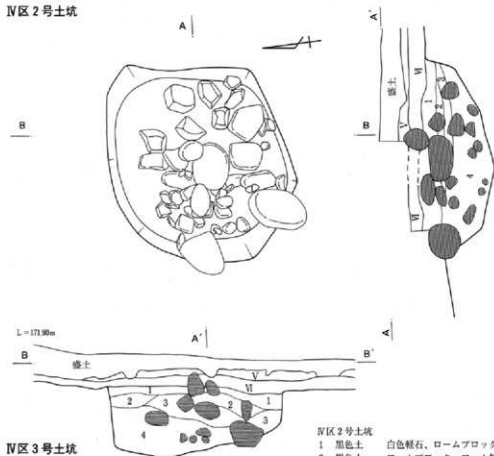
L=172.40m
0 1:40 1m



42図 Ⅲ区9号土坑・Ⅳ区1号土坑 遺構図・遺物図

Ⅳ 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

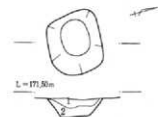
Ⅳ区2号土坑



Ⅳ区2号土坑

- 1 黒色土 白色軽石、ロームブロックを若干含む。
 2 黒色土 ロームブロック、ローム粒を少量含む。
 3 黄褐色土 ロームブロックを若干と10~20mm大の礫を含む。
 4 暗黄褐色土 礫ブロックを多量に含む。

Ⅳ区3号土坑



Ⅳ区3号土坑

- 1 黒色土 Aa-C、磁塊を含む。
 2 黒色土 白色細粒を僅かに含む。

0 1:40 1m

43図 Ⅳ区2・3号土坑 遺構図

土坑 P L 18

遺物 No.	種 類	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/焼成/ 色調 (石材)	成 型 形 の 特 徴	摘 要
1	土製品 玩具人形	I区14土坑	高 2.8 幅 1.7 厚 0.6	微砂粒/酸化焙 黄褐色	女性の袂姿をあらわしている。	
2	縄文土器 漆鉢	I区58土坑 胴部片		粗砂粒/良好/ にぶい黄褐色	縄文施文後へラ掻き文、内面へラナデ。	
3	陶器 漆鉢	Ⅲ区1土坑 体部片		細砂粒/酸化焙 黄褐色	張り面溝は14~16条を1単位とする。内外面に褐色釉を施す。	
4	陶器 灯火皿	Ⅲ区2土坑 口唇部欠	口径 4.0	微砂粒/還元焙 灰白色	ロクロ整形、回転右回り。底部と口縁部下半は回転へラ削り。油受け凸部は貼付。内面には白色釉を施す。	口唇部は打ち欠かれている。
5	軟質陶器 焙烙	Ⅲ区2土坑 少片	口径31.0 底径31.0	微砂粒/酸化焙 にぶい褐色	口縁部横ナデ、内面もナデ、内耳部分は貼付。	
6	土製品 平瓦	Ⅲ区2土坑 少片	器高 3.0	粗砂粒/還元焙 灰色	表裏側面ともへラナデ。	
7	軟質陶器 火鉢	Ⅲ区3土坑 口縁部片		細砂粒・赤色粒/ 還元焙/明赤褐色	内外面ナデ整形、口唇部下に輪描による平行線。	
8	石製品 砥石	Ⅲ区3土坑 1/2	長(5.1) 幅 2.5 厚 1.8 重42.5	砥石石	表裏面、左右と上面とも使用されている。	

遺物 No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計 測 値	胎土/装成/ 色調 (石材)	成 形 形 状 の 特 徴	摘 要
9	石製品 石臼	Ⅱ区3土坑 上臼/6	厚11.8 重3.0kg	粗粒輝石安山岩		摺り面は摩耗が激しく摺り溝の残りが悪い。
10	銭貨 銅銭	Ⅱ区4号土坑 完形	径2.7 孔0.6 厚0.1 重2.5		銭銭「文久永宝」	
11	軟質陶器 埴輪 小片	Ⅱ区9号土坑	口径29.4 底径29.0 器高2.2	細砂粒/酸化塩 /にふい褐色	外面口縁部と内面は横ナデ、内耳は貼付。	
12	陶器 甕	Ⅱ区1土坑 口縁部片	口径10.0	細砂粒/還元塩 /灰色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面に褐色釉が施 輪。	
13	陶器 甕	Ⅱ区1土坑 口縁部片	口径29.4	細砂粒/還元塩 /灰色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面に灰色釉が施 輪。	
14	軟質陶器 埴輪 小片	Ⅱ区1土坑 口縁部片	口径32.0	細砂粒/酸化塩 /にふい褐色	外面口縁部・内面横ナデ。	
15	石製品 砥石	Ⅱ区1土坑 上部欠損	長(9.5) 幅2.8 厚2.8 重97.0	砥沢石	表裏面、左右側面、下面ともよく使用されている。	

3表 青梨子上屋敷遺跡土坑表

No. 1

区	No.	位 置	重 複		形 態	規 模			時 期	性 格
			新	旧		長径	短径	深 度		
I	1	9 P-96			円形	60	58	30	古墳～平安	
I	2	9 Q-99			楕円形	55	50	29	古墳～平安	
I	3	9 P-99			不整形	116	80	24	中世	
I	4	9 P-99			矩形	68	56	20	古墳～平安	
I	5	9 P-99			楕円形	54	42	23		
I	6	9 P-99			半円形	70	49	41	縄文～弥生	
I	7	9 P-98			溝状	(290)	88	30	縄文～弥生	
I	8	9 S-105			円形	50	45	25	縄文～弥生	
I	9	9 R-105			不整形	50	32	11	古墳～平安	
I	10	9 R-105			円形	44	44	24	縄文～弥生	
I	11	9 R-106			不整形	72	50	15	中世	
I	12	9 S-105			楕円形	53	59	29		
I	13	9 Q-103			不整形	282	206	35	縄文～弥生	
I	14	9 S-107			丸みをもった方形	130	128	32		
I	15	9 Q-100			台形	90	62	19	中世	
I	16	9 Q-99			楕円形	46	32	17	中世	
I	17	9 Q-100			不整形	72	38	20	中世	
I	18	9 Q-100			円形	52	50	23	中世	
I	19	9 R-100			円形	40	38	25	中世	
I	20	9 Q-100			矩形	40	30	22	中世	
I	21	9 Q-99			楕円形	70	60	14	近世	
I	22	9 Q-99			楕円形	58	42	17	中世	
I	23	9 Q-101			楕円形	222	158	18	縄文～弥生	
I	24	9 R-105			L字形	284	175	92		地下式坑(貯蔵)
I	25	9 O-99			楕円形	96	70	27		
I	26	9 P-99								風割木炭
I	27	9 Q-95			円形	38	35	10	古墳時代以前	
I	28	9 Q-95			円形	54	51	19	古墳時代以前	
I	29	9 P-96			楕円形	49	40	19	古墳時代以前	
I	30	9 P-93			半円形	46	30	6	古墳時代以前	
I	31	9 Q-94			楕円形	51	40	22	古墳時代以前	
I	32	9 P-93			楕円形	76	70	20	古墳時代以前	
I	33	9 O-93			円形	57	50	20	古墳時代以前	
I	34	9 O-92			楕円形	57	41	16	古墳時代以前	
I	35	9 P-92			楕円形	30	24	9	古墳時代以前	
I	36	9 P-92			楕円形	49	37	12	古墳時代以前	
I	37	9 P-92			楕円形	50	41	15	古墳時代以前	
I	38	9 P-92			楕円形	91	62	24	古墳時代以前	

区	No.	位置	重 複		形 態	規 模			時 期	性 格
			新	旧		長径	短径	深度		
I	39	9P-92			楕円形	62	56	12	古墳時代以前	
I	40	9P-92			円形	42	40	10	古墳時代以前	
I	41	9P-92			楕円形	35	31	8	古墳時代以前	
I	42	9P-92			楕円形	64	55	18	古墳時代以前	
I	43	9P-92			円形	70	63	30	古墳時代以前	
I	44	9P-92			丸みを持った方形	90	51	24	古墳時代以前	
I	45	9P-92			楕円形	50	39	16	古墳時代以前	
I	46	9P-92			不整形	57	48	15	古墳時代以前	
I	47	9P-91			楕円形	48	32	11	古墳時代以前	
I	48	9P-91			円形	41	36	18	古墳時代以前	
I	49	9P-91			楕円形	48	40	18	古墳時代以前	
I	50	9P-91			不整形	56	52	12	古墳時代以前	
I	51	9P-91			楕円形	61	49	17	古墳時代以前	
I	52	9P-91			円形	59	64	19	古墳時代以前	
I	53	9P-91			楕円形	52	51	18	縄文	
I	54	9P-92			不整形	73	47	14	古墳時代以前	
I	55	9P-91			半円形	73	37	15	奈良・平安	
I	56	9P-91			半円形	77	31	19	奈良・平安	
I	57	9P-91			楕円形	46	30	14	古墳時代以前	
I	58	9Q-91			円形	46	43	20	古墳時代以前	
I	59	9Q-91			円形	44	40	16	古墳時代以前	
I	60	9Q-91			楕円形	41	29	11	古墳時代以前	
I	61	9Q-91			楕円形	96	70	26	古墳時代以前	
I	62	9P-91			楕円形	48	40	9	古墳時代以前	
I	63	9O-92			楕円形	77	62	14	古墳時代以前	
I	64	9O-91			楕円形	36	30	13	古墳時代以前	
I	65	9O-92			楕円形	72	64	9	古墳時代以前	
I	66	9O-92			楕円形	72	88	21	古墳時代以前	
I	67	9O-92				90	83	26	古墳時代以前	
I	68	9O-92			矩形	62	47	17	古墳時代以前	
I	69	9Q-91			楕円形	45	28	9	古墳時代以前	
I	70	9O-90			楕円形	117	87	15	古墳時代以前	
I	71	9Q-91			矩形	32	29	12	古墳時代以前	
I	72	9Q-91			半円形	60	(36)	9	古墳時代以前	
I	73	9O-90			楕円形	41	33	24	古墳時代以前	
I	74	9O-90			矩形	49	46	10	古墳時代以前	
I	75	9O-90			楕円形	40	35	9	古墳時代以前	
I	76	9O-90			楕円形	51	43	12	古墳時代以前	
I	77	9O-90			楕円形	80	54	13	古墳時代以前	
I	78	9O-93			矩形	80	77	24	古墳時代以前	
I	79	9O-93			楕円形	50	40	13	古墳時代以前	
I	80	9O-93	79土坑	80土坑	楕円形	43	(30)	12	古墳時代以前	
I	81	9Q-94			楕円形	32	24	24	古墳時代以前	
I	82	9Q-95			楕円形	40	34	13	古墳時代以前	
I	83	9Q-95			円形	38	37	21	古墳時代以前	
I	84	9P-92			半円形	61	(30)	23	古墳時代以前	
I	85	9P-94			楕円形	51	29	15	古墳時代以前	
I	86	9P-94			楕円形	66	57	15	古墳時代以前	
I	87	9P-94			楕円形	38	32	12	古墳時代以前	
I	88	9Q-94			楕円形	39	30	11	古墳時代以前	
I	89	9Q-94			矩形	50	33	14	古墳時代以前	
I	90	9Q-94			矩形	54	49	16	古墳時代以前	
I	91	9Q-94			円形	31	30	10	古墳時代以前	

区	No.	位置	重 複		形 態	規 模			時 期	性 格
			新	旧		長徑	短徑	深度		
I	92	9 Q-94			円形	41	42	9	古墳時代以前	
I	93	9 Q-95			楕円形	69	46	15	古墳時代以前	
I	94	9 Q-96			円形	47	46	8	古墳時代以前	
I	95	9 R-96			楕円形	62	52	12	古墳時代以前	
I	96	9 R-96			円形	33	31	14	古墳時代以前	
I	97	9 Q-96			円形	43	37	13	古墳時代以前	
I	98	9 Q-95			円形	32	31	8	古墳時代以前	
I	99	9 P-95			楕円形	74	53	18	古墳時代以前	
I	100	9 P-95			円形	39	37	8	古墳時代以前	
I	101	9 P-94			楕円形	44	33	9	古墳時代以前	
I	102	9 P-94			円形	38	35	14	古墳時代以前	
I	103	9 P-94			矩形	58	40	7	古墳時代以前	
I	104	9 P-94			円形	37	37	9	古墳時代以前	
I	105	9 P-95			矩形	43	31	19	古墳時代以前	
I	106	9 P-96			丸みを帯びた方形	29	25	20	古墳時代以前	
I	107	9 P-96			楕円形	39	31	12	古墳時代以前	
I	108	9 P+Q-96	125号土坑		円形	38	38	11	古墳時代以前	
I	109	9 Q-96			楕円形	37	31	13	古墳時代以前	
I	110	9 Q-96			楕円形	43	35	11	古墳時代以前	
I	111	9 Q-96			矩形	39	30	12	古墳時代以前	
I	112	9 Q-96			楕円形	40	33	23	古墳時代以前	
I	113	9 P-94			不整形	108	106	10	古墳時代以前	
I	114	9 P-95			楕円形	45	35	26	古墳時代以前	
I	115	9 Q-95			楕円形	40	26	16	古墳時代以前	
I	116	9 Q-95			円形	30	28	10	古墳時代以前	
I	117	9 Q-95			楕円形	33	29	14	古墳時代以前	
I	118	9 Q-95			半円形	73	(47)	18	古墳時代以前	
I	119	9 Q-93			半円形	55	(26)	13	古墳時代以前	
I	120	9 Q-93			楕円形	40	32	14	古墳時代以前	
I	121	9 N-90	1号堀		楕円形	120	(82)	14	古墳時代以前	
I	122	9 M-91			楕円形	(83)	51	21	古墳時代以前	
I	123	9 P-93			楕円形	57	49	15	古墳時代以前	
I	124	9 P-93			楕円形	63	31	9	古墳時代以前	
I	125	9 P-96	108号土坑		方形か					
Ⅲ	1	9 S-100			隅円長方形	110	96	16	近世	
Ⅲ	2	9 R+S-111			不整形	(285)	192	23	近世	
Ⅲ	3	9 R+S-111		5・6号土坑	隅円長方形	162	132	25	近世	
Ⅲ	4	9 R-111			斬鋭形	112	82	20	近世	
Ⅲ	5	9 S-111	3・6号土坑		不整形	(200)	137	25		
Ⅲ	6	9 R+S-111	3号土坑	5号土坑	長方形	116	90	23		
Ⅲ	7									
Ⅲ	8				双円形	130	72	22		
Ⅲ	9	9 R-100			楕円形	88	72	21	近世	
Ⅳ	1	9 H-107			長方形	410	140	28	近世	蔵基礎坑
Ⅳ	2	8 S-108			円形	207	193	92	近世	
Ⅳ	3	8 S-109			楕円形	65	55	20	近世	

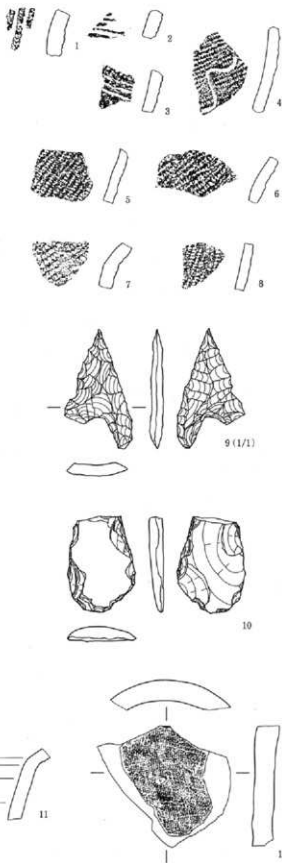
9. 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物は縄文時代、奈良・平安時代、近世・近代のものが出土している。その出土量は掲載した遺物の割合と同様に圧倒的に近世・近代のものである。

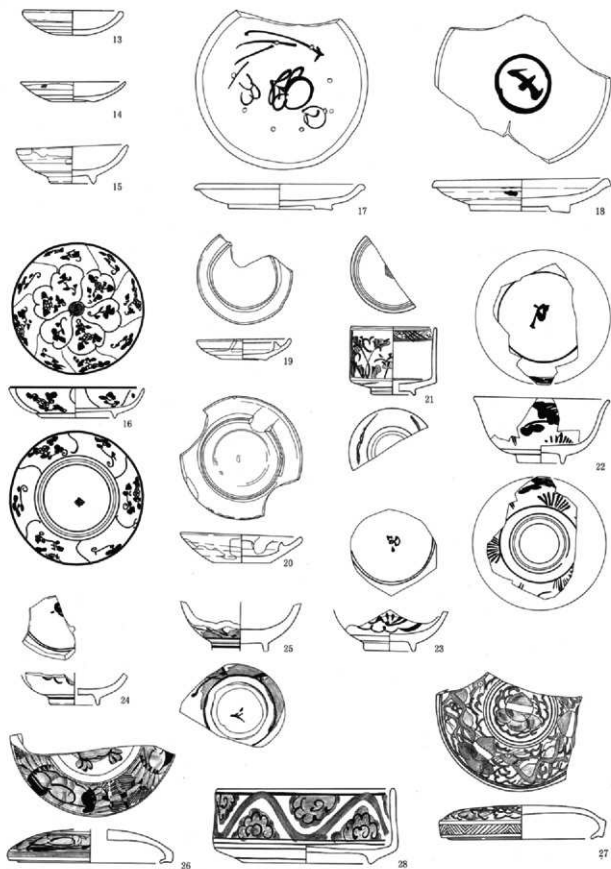
縄文時代は遺構の中の遺物出土状態から縄文時代に比定できるものは確認されていない。こうした中で埋没土の状態から縄文時代に比定される可能性のあるものが土坑で確認されているだけである。遺構外出土遺物には土器、石器など図化可能なものが10点あった。土器は中期後半から後期にかけてのものである。これらの土器は器形復元が可能なものはなく拓影図による図化である。こうした出土状況から周囲に遺構の存在を窺わせる状態ではない。

奈良・平安時代の遺物は図化したものは須恵器甕と瓦片だけであるがその他土師器杯・甕、須恵器杯・碗・甕などの小片が見られた。これらの土器は青梨子上屋敷Ⅰ区、金古北十三町遺跡14区で検出した住居の年代に近い時期のものである。こうした状況から発掘調査では3軒の竪穴住居を検出しただけであるが周囲には散漫な状態ではあるが遺構が存在し小規模な集落が営まれていた様相が窺える。

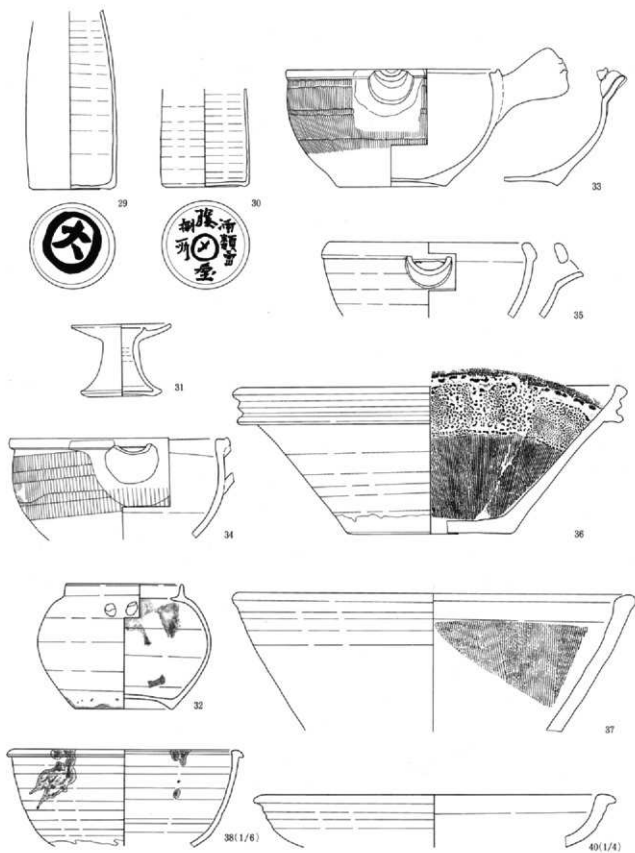
近世・近代の遺物は土器、陶器、土製品、石器、石製品、金属器、金属製品など多種にわたっている。遺跡地は近世には三国街道の宿場街として繁栄した地域であり出土した遺物もここで使用されていた日常品が廃棄されたものである。こうした遺物の中でも陶器製の玩具はその組み合わせから近代に比定されるがこうした遺物の出土は江戸など都市では見られるが地方での出土例は稀少である。



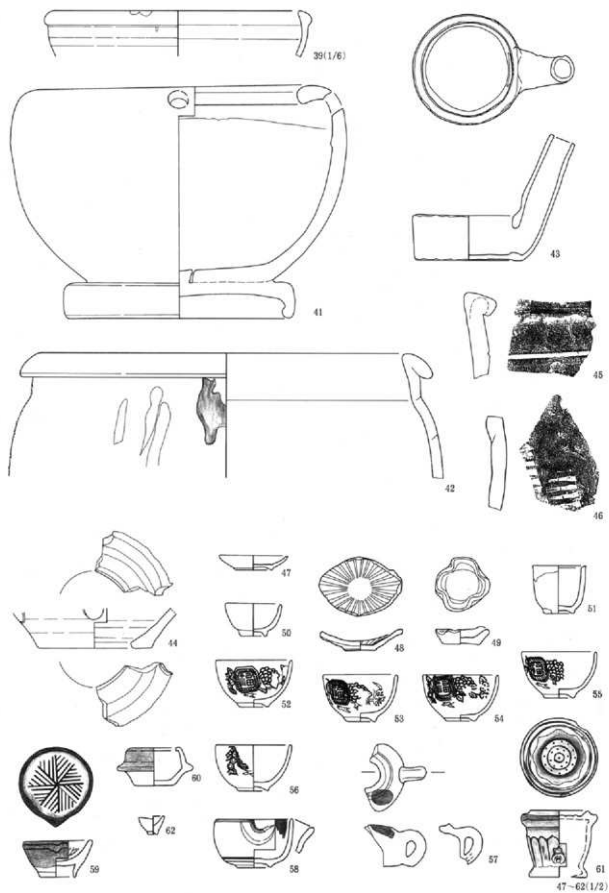
44図 遺構外出土遺物 遺物図(1)



45图 遺構外出土遺物 遺物图(2)

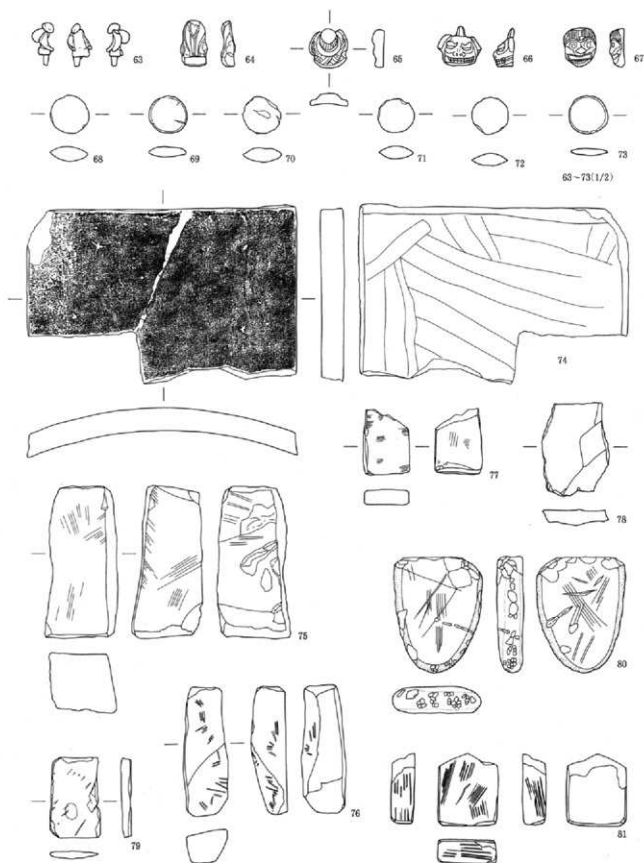


46図 遺構外出土遺物 遺物図(3)

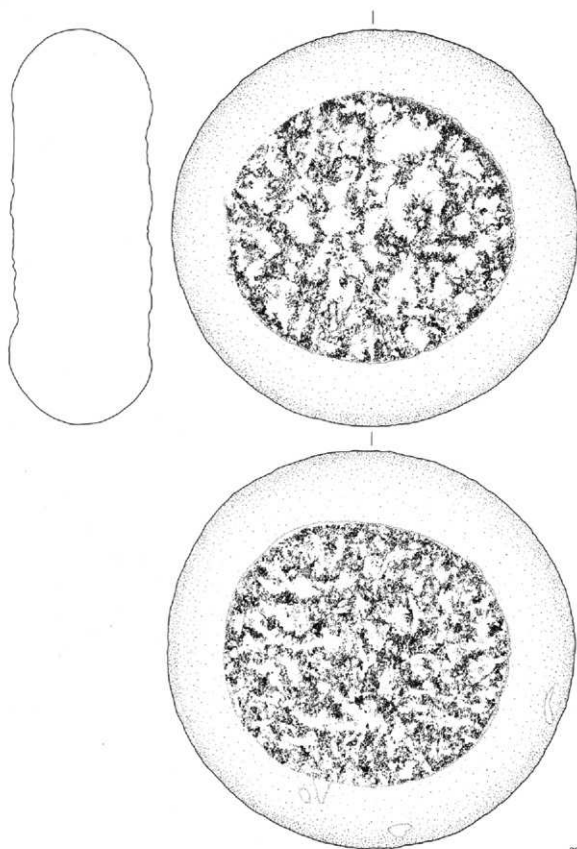


47図 遺構外出土遺物 遺物図(4)

IV 青梨子上屋敷遺跡の遺構と遺物

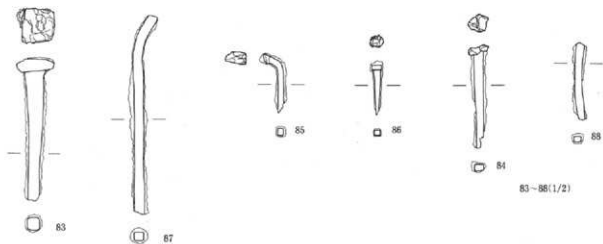


48図 遺構外出土遺物 遺物図(5)

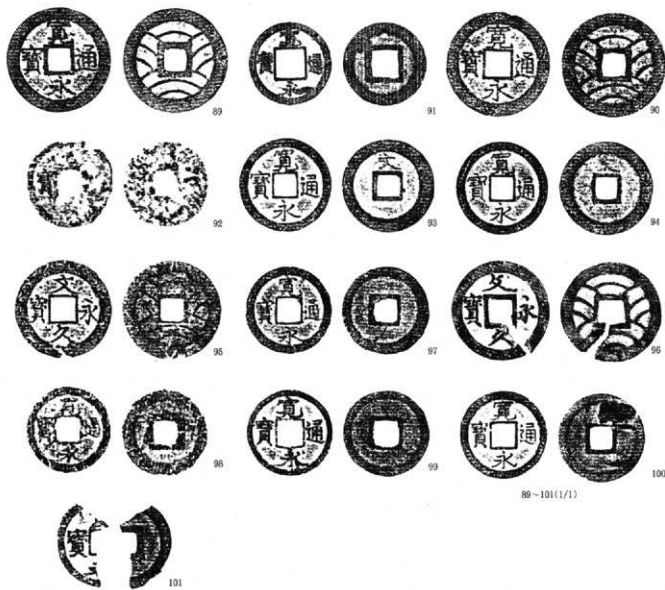


49図 遺構外出土遺物 遺物図(6)

IV 青梨子上屋敷道跡の遺構と遺物



83-88(1/2)



89-101(1/1)

50回 遺構外出土遺物 遺物図(7)

遺構外出土遺物 P.L18~21

遺物 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	粘土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徵	摘要
1	縄文土器 深鉢	I区1層 胴部小片		粗砂粒/良好/ 灰褐色	沈線施文後爪形文を施文。	
2	縄文土器 深鉢	I区9P-91 胴部小片		粗砂粒/良好/ 灰褐色	細かく沈線を施文。	
3	縄文土器 深鉢	I区9P-91 胴部小片		粗砂粒/良好/ 明赤褐色	沈線を施文。	
4	縄文土器 深鉢	I区9S-107 胴部小片		粗砂粒/良好/ 赤褐色	縄文R L施文後波状に沈線を1条施す。	
5	縄文土器 深鉢	I区9S-107 胴部小片		粗砂粒/良好/ 明赤褐色	縄文R Lを施文。	
6	縄文土器 深鉢	I区9R-107 胴部小片		粗砂粒/良好/ 明赤褐色	縄文R Lを施文。	
7	縄文土器 深鉢	I区9P-91 胴部小片		粗砂粒/良好/ 明赤褐色	縄文R Lを施文。	
8	縄文土器 深鉢	I区9R-110 胴部小片		粗砂粒/良好/ 明赤褐色	縄文R Lを施文。	
9	石輪 織	I区9P-91 基部欠損	長3.15 幅(1.76) 厚0.25 重1.30	チャート		
10	石輪 打製石斧	I区9P-92 上平欠損	長(7.4) 幅 6.6 厚 1.1 重52	細粒輝石安山岩		
11	灰土器 甕	I区1層 口縁部片		粗砂粒/酸化焙 /にふい、灰色	口クロ整形、回転方向不明。口縁部にS段の 波状文。	
12	土製品 丸瓦 小片	0区 小片		粗砂粒/還元焰/ 灰色	内面に布目状が残る。外面はヘラナデ。	
13	陶器 小皿	Ⅱ区9C-108 1/5	口径 7.4 底径 2.2 器高 1.9	水磁/還元焰/ 灰色	口クロ整形、回転右回り。口縁部下半から底 部にかけて回転へら削り。口縁部上半から内 面に灰釉を施釉。	
14	陶器 小皿	I区1層 完整	口径 8.2 底径 3.0 器高 1.5	水磁/還元焰/ 灰白色	口クロ整形、回転右回り。口縁部下半から底 部にかけて回転へら削り。口縁部上半から内 面に灰釉を施釉。	
15	陶器 皿	I区9R-106 口縁一部欠	口径 8.8 底径 3.8 器高 3.1	粗砂粒/酸化焙 /にふい、黄褐色	口クロ整形、回転右回り。高台は削り出し か。口縁部下半は回転へら削り。口縁部から内面 に黄色釉を施釉。	
16	陶器 染付皿	I区1層 ほぼ完整	口径10.6 底径 6.0 器高 2.4	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。内外面に後草文を施付け。	瀬戸焼
17	陶器 皿	I区9S-105 口縁一部欠	口径13.6 底径 6.2 器高 2.1	水磁/還元焰/ にふい、黄褐色	口クロ整形、回転右回り。高台は削りだし 。内面にトチン根が残る。外面底部以外は施釉。	益子焼、明治期
18	陶器 皿	I区1層 2/3	口径13.6 底径 7.9 器高 2.5	水磁/還元焰/ にふい、黄褐色	口クロ整形、回転右回り。高台は削りだし 。内面にトチン根が残る。外面底部以外は施釉。	益子焼、内面は 屋号
19	陶器 灯火皿	I区9Q-104 4/6	口径 7.5 底径 3.6 器高 1.7	水磁/還元焰/ 明褐色	口クロ整形、回転右回り。油受け凸帯は貼付 か。内面と外面口縁部には褐色釉を施釉。	
20	陶器 灯火皿	I区9R-108 口縁一部欠	口径 9.8 底径 4.4 器高 3.4	水磁/還元焰/ 赤褐色	口クロ整形、回転右回り。油受け凸帯は貼付 か。内面と外面口縁部には褐色釉を施釉。	
21	陶器 染付焼	I区9Q-104 1/2	口径 6.8 底径 6.8 台径 3.6 器高 6.3	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。内外面に草文文を施付け。	肥前、18C、中〜 後期
22	陶器 染付焼	I区9Q-104 1/2	口径10.4 底径 4.0 器高 5.2	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。内外面に草文文を施付け。	肥前
23	陶器 染付焼	I区1層 底部	口径 4.0	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。内外面に施付け。	肥前
24	陶器 染付焼	I区1層 底部片	口径 3.8	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。内外面に施付け。	肥前
25	陶器 染付焼	I区1層 底部	口径 4.4	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。外面に施付け。	肥前
26	陶器 染付焼	I区1層 1/2	口径11.0 最大幅13.0 器高 2.6	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。外面に施付け。	
27	陶器 染付鉢蓋	I区1層 1/2	口径13.6 最大幅13.2 器高 2.7	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。外面に施付け。	
28	陶器 染付鉢蓋	I区9Q-104 2/3	口径13.6 底径14.4 台径10.4 器高 5.6	水磁/還元焰/ 白色	口クロ整形、回転方向不明。高台は削り出し か。外面に施付け。	
29	陶器 德利	I区9S-105 口縁部欠	口径 6.8	水磁/還元焰/ にふい、灰色	口クロ整形、回転右回りか。底部は回転へら 削り。胴部に灰釉を施釉。	底部に「彦」の墨 書。
30	陶器 德利	I区9S-105 底部	口径 6.2	水磁/還元焰/ 灰色	口クロ整形、回転右回りか。底部は回転へら 削り。胴部に灰釉を施釉。	底部に「彦」屋号 順次願所」の墨書。

IV 青梨子土層敷遺跡の遺構と遺物

遺物 No.	種類 種別	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徴	摘要
31	陶器 甕埴	I区9Q-104 口縁一部欠	口径7.8 底径5.0 器高5.7	水靨/還元焰/ 灰白色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。底部を除いて灰釉を施す。	
32	陶器 急須	I区9R-105 1/2	口径9.2 底径7.8 器高11.6	水靨/還元焰/ 灰色	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラナデ。外面は灰釉、内面は褐色釉を施す。	
33	陶器 片口鉢	I区10A-108 2/3	口径16.8 底径8.6 器高9.2	水靨/還元焰/ にぶい黄褐色	ロクロ整形回転右回り。把手・片口は貼付。底部は回転ヘラナデ。口唇部と底部を除いて褐色釉を施す。	底部に深が付き。
34	陶器 片口鉢	I区9R-106 2/3	口径17.2	水靨/還元焰/ にぶい黄褐色	ロクロ整形回転右回り。把手・片口は貼付。底部は回転ヘラナデ。口唇部と底部を除いて褐色釉を施す。	
35	陶器 片口鉢	I区9S-105 口縁部	口径15.6	細砂粒/還元焰 /灰釉	ロクロ整形、回転方向不明。片口部分は貼付。内外面に灰釉を施す。	鉢子埴、明治期
36	陶器 楕鉢	I区9S-105 器高11.6	口径28.4 底径13.2 器高11.6	細砂粒/酸化焰 /浅黄色	ロクロ整形、回転右回り。底部ナデ。底部を除いて褐色釉を施す。	江戸後期
37	陶器 楕鉢	IV区8R-109 口縁部片	口径31.2	細砂粒/還元焰 /灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面に褐色釉を施す。	江戸後期
38	陶器 鉢	I区9Q-104 1/6	口径35.0	粗砂粒/還元焰 /灰白色	ロクロ整形、回転右回り。底部を除いて灰釉を施す。一部に褐色釉を支柱状に掛けている。	江戸後期
39	陶器 鉢	I区9S-105 口縁部片	口径39.0	粗砂粒/還元焰 /灰白色	ロクロ整形、回転右回り。底部を除いて灰釉を施す。一部に褐色釉を支柱状に掛けている。	江戸後期
40	陶器 鉢	II区I層 口縁部片	口径38.0	粗砂粒/還元焰 /灰白色	ロクロ整形、回転方向不明。内外面に灰釉を施す。	
41	陶器 火鉢	I区I層 3/4	口径20.0 底径14.6 台径17.4 器高18.2	細砂粒/還元焰 /にぶい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は台状に作り中央に突起を設け鉢部と接合している。外面褐色釉。	
42	陶器 甕	II区I層 口縁-胴部	口径29.4	細砂粒/還元焰 /褐色	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部は折り曲げ。内外面に褐色釉を施す。	
43	土器 土盤	I区9S-106 ほぼ定形	口径11.6 底径11.0 器高13.3	細砂粒/酸化焰 /明赤褐色	型作り。椀底部は貼付。	
44	土器 視矧目皿	II区I層 底部片	底部9.0	細砂粒/酸化焰 /灰黄色	ロクロ整形、回転右回り。底部中央に1ヶ所、体部に6ヶ所の小孔有り。	
45	土器 甕	II区I層 口縁部片		細砂粒/酸化焰 /褐色	口唇部は貼付。口縁部に凹線が1条走る。	
46	土器 甕	I区I層 胴部片		細砂粒/還元焰 /灰色	外面に叩き直が見られる。	産灰焼
47	陶器 玩具皿	I区I層 1/2	口径5.4 底径2.9 器高1.1	細砂粒/還元焰 /灰白色	透明釉を施す。	
48	陶器 玩具皿	I区9S-105 定形	長径4.4 短径3.1 底径1.6 器高1.1	細砂粒/還元焰 /灰白色	内面は菊花文状に施文。	
49	陶器 玩具皿	I区I層 定形	口径2.8 底径1.9 器高0.9	細砂粒/酸化焰 /褐色	口縁部に4ヶ所内側に押し込んでいる。内外面とも白色釉を施す。	
50	陶器 玩具鉢	I区9S-105 1/2	口径3.0 底径1.4 器高1.7	細砂粒/還元焰 /灰白色	外面底部を除いて黄色釉を施す。	
51	陶器 玩具鉢	I区9S-105 定形	口径2.8 底径1.6 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	外面底部と体部下位を除いて白色釉を施す。	
52	陶器 玩具鉢	I区9S-105 定形	口径4.0 底径1.5 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す。外面印押による文様付け。	
53	陶器 玩具鉢	I区9S-105 定形	口径4.0 底径1.5 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す。外面印押による文様付け。	52と同一な作り、文様
54	陶器 玩具鉢	I区9S-106 ほぼ定形	口径4.0 底径1.5 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す。外面印押による文様付け。52より文様がやや上位。	52と同一な作り、文様
55	陶器 玩具鉢	I区9S-106 1/3	口径4.0 底径1.5 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す。外面印押による文様付け。	52と同一な作り、文様
56	陶器 玩具鉢	I区9S-106 3/4	口径4.0 底径1.5 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す。外面印押による文様付け。	52と同一な作り、文様
57	陶器 玩具急須	I区I層 1/6		細砂粒/還元焰 /灰白色	全体に白色釉を施す後、一部緑色釉を着けている。	
58	陶器 玩具鉢	I区9S-106 ほぼ定形	口径4.0 底径1.8 器高2.5	細砂粒/還元焰 /灰白色	片口鉢。全面に白色釉を施す。	
59	陶器 玩具鉢	I区9S-105 定形	口径3.7 底径1.8 器高1.9	細砂粒/還元焰 /灰白色	片口楕鉢。外面と内面口唇部・摺り溝に褐色釉を施す。	
60	陶器 玩具鉢	I区9S-105 定形	口径2.7 底径2.0 器高2.0	細砂粒/還元焰 /にぶい褐色	外面の肩上位に淡緑色釉を施す。	

遺物 No.	種類 種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	成型の特徴	摘要
61	陶器 玩具皿が	I区9S-105 ほぼ定形	上径 4.0 下径 3.0 器高(3.5)	微砂粒/還元焰 /灰白色		上面の一部を除いて水色釉を施す。
62	土器 玩具丸瓶	I区I層 定形	口径 1.3 底径 0.5 器高 1.0	微砂粒/酸化焰 /褐色		内面に白色釉を施す。
63	土製品 玩具人形	I区9Q-104 ほぼ定形	高 2.3 幅 1.2 厚 1.3	微砂粒/酸化焰 /にふい黄色		左足欠損。一部赤色塗彩が残る。肩に尚を背負っている姿。
64	土製品 玩具人形	I区10G-108 頭部欠損	高(2.4) 幅 1.4 厚 0.8	微砂粒/酸化焰 /褐色		尻が座っている姿を正面から表現している。
65	土製品 玩具泥獅子	I区9Q-104 定形	高 2.0 幅 2.1 厚 0.6	微砂粒/酸化焰 /灰褐色		乳幼児を表現しているものか。表現は四線であらわれている。
66	土製品 玩具泥獅子	I区9P-93 定形	高 2.3 幅 2.1 厚 1.1	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		獅子の頭部を表現した物。
67	土製品 玩具泥獅子	I区9Q-104 定形	高 2.0 幅 1.7 厚 0.7	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		人面を表現した物。
68	土製品 碁石	I区9P-95 定形	径 2.0 厚 0.8	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		
69	土製品 碁石	I区9Q-95 定形	径 2.0 厚 0.55	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		
70	土製品 碁石	I区9P-95 一部欠損	径 2.0 厚 0.7	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		
71	土製品 碁石	I区9P-95 一部欠損	径 1.9 厚 0.7	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		
72	土製品 碁石	I区I層 定形	径 1.9 厚 0.7	微砂粒/酸化焰 /にふい褐色		
73	石製品 碁石	I区9R-106 定形	径 2.0 厚0.35 重2.37		珪質頁岩	
74	土製品 平瓦	I区I層 L/4	幅21.2 厚 1.8	粗砂粒/還元焰 /にふい褐灰色		表面はヘラナデ、裏面の整形不明。
75	石製品 砥石	I区I層 一部欠損小	長12.0 幅 5.3 厚 4.6 重50.0		砂岩	上面・右側面は非常によく使用されている。
76	石製品 砥石	I区9R-106 定形	長10.0 幅 3.6 厚 2.5 重112.5		砥石	各面ともよく使用されている。
77	石製品 砥石	I区9P-96 L/2?	長(5.0) 幅 3.7 厚 1.2 重31.4		流紋岩質凝灰岩	各面ともよく使用されている。
78	石製品 砥石	I区9Q-104 一部片	長(7.3) 幅(5.4) 厚(1.2) 重66.3		珪質粘板岩	割れた後も使用されている。
79	石製品 砥石	I区9M-91 一部片	長(6.3) 幅(3.9) 厚(0.8) 重32.0		珪質粘板岩	割離面以外の本来の面はよく使用されている。
80	石製品 砥石	I区9R-100 L/2?	長(9.1) 幅 7.0 厚 2.1 重155.0		デイサイト凝灰 岩	表表面とも使用され擦痕が残る。側面には横打痕が見られる。
81	石製品 砥石	N区9D-107 L/2?	長(5.6) 幅 4.8 厚 1.9 重58.0		砥石	各面ともよく使用されている。
82	石製品 礎石	0区 定形	径32.0 厚11.2 重16.5kg		粗粒輝石安山岩	上下面は平坦面を作り出されている。
83	鉄器 釘	I区9N-94 先端部欠損	長(7.9) 幅・厚0.7 ~1.0 重34.4			頭部方形一辺2.3cm、断面も方形。
84	鉄器 釘	I区9T-104 先端部欠損	長(5.3) 幅0.4~0.5 厚 0.3 重4.06			頭部形状は方形であるが打ちつぶされており不鮮明。断面は長方形。
85	鉄器 釘	I区9T-104 頭部L/2	長(3.5) 幅 0.3 厚 0.3 重2.45			頭部形状は方形であるが打ちつぶされており不鮮明。断面は方形。
86	鉄器 釘	I区9T-104 頭部L/2	長(2.6) 幅 0.3 厚 0.3 重1.06			頭部形状は方形であるが打ちつぶされており不鮮明。断面は方形。
87	鉄器 釘	I区9R-106 両端部欠損	長(10.5) 幅 0.5 厚 0.5 重9.89			断面は方形。
88	鉄器 釘	I区9T-104 両端部欠損	長(4.0) 幅 0.4 厚 0.3 重2.14			断面は長方形。
89	銭貨 日本銭	I区I・II 層 定形	径 2.8 孔 0.6 厚 0.1 重 4.7			銭種「寛永通宝」四文銭。表面に波紋(11波)。
90	銭貨 日本銭	I区I・II 層 定形	径 2.8 孔 0.6 厚 0.1 重 4.5			銭種「寛永通宝」四文銭。表面に波紋(11波)。

IV 青架子上屋敷遺跡の遺構と遺物

遺物 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調(石材)	成型形の特徴	概要
91	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 完形	径 2.2 孔 0.6 厚 0.1 重 2.3		鉄種「寛永通宝」一文銭。	
92	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 完形	径 2.3 孔 0.6 厚 0.1 重 1.4		鉄種「寛永通宝」一文銭。	
93	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 完形	径 2.5 孔 0.6 厚 0.1 重 3.2		鉄種「寛永通宝」一文銭。表面に「文」。	
94	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 1/2	径 2.5 孔 0.6 厚 0.1 重 3.1		鉄種「寛永通宝」一文銭。表面に「文」。	
95	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 完形	径 2.6 孔 0.6 厚 0.1 重 3.7		鉄種「文久水宝」	
96	鉄貨 日本銭	I区I・II 層 完形	径 2.7 孔 0.6 厚 0.1 重 4.1		鉄種「文久水宝」	
97	鉄貨 日本銭	II区I・II 層 完形	径 2.3 孔 0.6 厚 0.1 重 3.2		鉄種「寛永通宝」	
98	鉄貨 日本銭	II区I・II 層 完形	径 2.3 孔 0.6 厚 0.1 重 1.8		鉄種「寛永通宝」	
99	鉄貨 日本銭	III区9Q-110 完形	径 2.3 孔 0.6 厚 0.1 重 2.5		鉄種「寛永通宝」	
100	鉄貨 日本銭	III区9Q-111 完形	径 2.4 孔 0.6 厚 0.1 重 2.3		鉄種「寛永通宝」	
101	鉄貨 日本銭	III区9Q-112 1/3	径 2.4 孔 0.5 厚 0.1 重 1.4		鉄種「寛永通宝」か	

V 金古北十三町遺跡16区の遺構と遺物

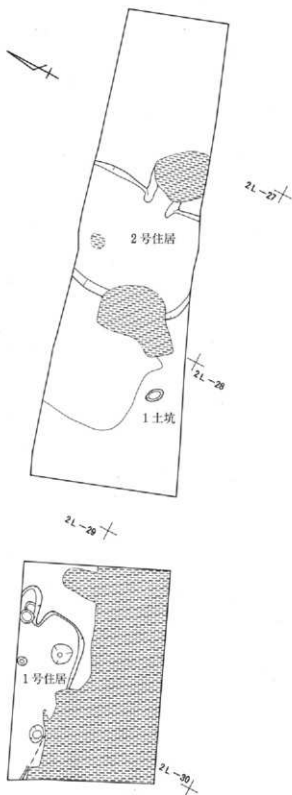
1. 概要

金古北十三町遺跡16区調査区では550㎡と狭い範囲ながら奈良時代の住居2軒と時期は明らかではないが古代の土坑1基を検出した。住居は一般的な竪穴住居で遺物の出土もあまり多くはなかった。調査区は現代家屋が存在した跡地でその撤去による擾乱などが激しく遺構の残存状態はあまり良好な状態ではなかった。

今回の16区調査区は1995年にバイパス本線部分の発掘調査を実施したがその時に未買取地のため調査未了の箇所である。本線部分の成果は1998年に報告書として刊行されている。その報告書によると16区東側の調査区で検出された遺構は古墳時代から中世にかけてである。代表的な遺構としては古墳時代の竪穴、奈良・平安時代の住居・掘立柱建物、中世の館に伴うと見られる堀などが見られる。

16区調査区では竪穴住居を2軒検出しているが、この住居は当然金古北十三町遺跡1区～6区までで検出された住居で構成される集落の一部である。この集落は牛池川と金古北十三町遺跡6区北側で確認された小谷地に挟まれた細長い微高地上に立地している。その範囲は6区西での群馬町教育委員会や東に近接する青梨子金古境遺跡の成果などから東西500～600m、南北200mであると推定される。

2軒の竪穴住居のうち、1号住居は床面を版築状に突き固めた特異な例である。出土遺物は竪穴住居から土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯身と遺構外から石鏃、打製石斧が出土している。遺構からの出土量は一般的な数量であるが遺構外からの出土量は擾乱のためか少ない。



51図 金古北十三町遺跡16区 全体図

2. 住居

16区1号住居

本住居は調査区西端2K-L-29~30グリッドに位置するが、住居北側の3/4はほどは調査区外に存在するため全貌は不明である。他遺構との重複は確認されなかった。残存状態は南辺の一部が攪乱によって欠損しておりあまり良好ではない。

形態は長方形ないしは方形を呈すると見られる。規模は計測できる箇所がないため不明であるが東西4.4m以上、南北2.2m以上である。床面積は調査範囲で5㎡を測ることから全体では15㎡ほどのやや大型の住居であると想定される。主軸方位はN-83°-Eを指すと見られる。

壁高は東辺で15~17cm、南辺で11~16cm、平均14cmを残す。

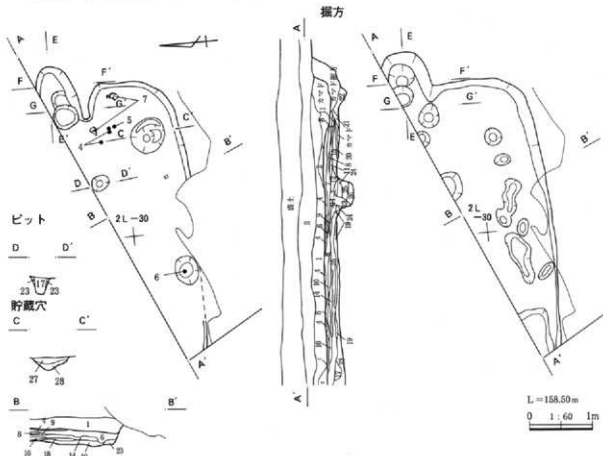
内部施設は貯蔵穴と柱穴かは明らかではないが小ピットを2基検出した。貯蔵穴は東南角に位置している。形態は卵形楕円形で径58×50cm、深度25cm

である。ピットはカマド前部(P1)と南辺際の中程(2P)で見つかった。P1は楕円形で径28×24cm、深度34cm、P2は楕円形で径46×38cm、深度15cmである。

床面は一般的な住居とはやや異なり黒色土と灰褐色土を交互に敷き詰めそれぞれが厚さ3~5cmになるまで突き固めて版築状に固めている。この作業は土層断面観察から6回行われていることが確認できるが周辺部では1回に突き固める厚さを厚くして3回ほどに簡略化している。

カマドは東辺の南寄りに構築されている。残存状態は天井部は崩落しているが右袖は比較的良好な状態であった。また、煙道部は確認されなかった。規模は110cm、燃焼部長70cm、右袖幅48cmで壁外に30cmほど延びる。

掘方は床面より20cmほど下位である。掘方面は若干の凹凸は見られるがほぼ平坦である。床下土坑は中央部で検出された。規模は径50cm、深度26cmであ



52図 16区1号住居 遺構図(1)

る。遺物の出土は見られなかった。

埋没状態は壁際で三角堆積が確認できる他は暗褐色土ではほぼ全体が埋没しているが、人為的に埋め戻した様相は見られない。

遺物は土師器、須恵器などが出土しているが須恵器には図化可能なものは見られなかった。出土した

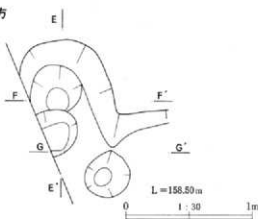
遺物のうち6・7の土師器杯・甕は床面、2・3の土師器杯はP1、P2から、4・5の土師器杯は掘方からの出土である。

本住居は出土した遺物から8世紀第2四半期に比定される。

カマド



掘方



53図 16区1号住居 遺構図(2)

16区1号住居

- 1 暗褐色土 やや赤味を帯び、軽石粒、焼土粒、炭粒、燧粒などを含む。1に近似。焼土ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 1に近似。泥入物が少なく粘性強い。
- 3 暗褐色土 若くは硬く締められている。
- 4 灰色粘土 締まり弱い。
- 5 黒褐色灰質土 オリーブブロックが混じり、よく締まっている。
- 6 褐色土 焼土ブロック、軽石混入、若くは締まっている。
- 7 灰白色粘質土 軽石、オリーブブロック混入。
- 8 黒色土 焼土粒を含む。
- 9 淡褐色土 軽石を多量に含む。
- 10 暗褐色土 下部に焼土粒、軽石粒を含む、特によく締まっている。
- 11 灰褐色粘質土 粘質土、焼土粒含む。
- 12 黒褐色土 床下土状24に似る。
- 13 黒褐色土 焼土ブロックを若干と軽石を僅かに含む、若くは締まる。
- 14 黒褐色土 若くはよく締まっている。焼土粒含む。
- 15 淡褐色粘質土 黒色土とオリーブ土の混。オリーブ塊、軽石若干混入。
- 16 淡褐色粘質土 大きいオリーブ塊を含む。軽石少ない。
- 17 黒色土 若くはよく締まっている。オリーブブロック主体。黒色土混入。
- 18 黒色土 若くはよく締まっている。軽石、オリーブ少量混入。
- 19 黒褐色土 若くはよく締まっている。泥入物なし。
- 20 黒褐色粘質土 焼土粒混入、締まり弱い。
- 21 暗褐色土 焼土ブロック、焼土粒多量混入。白色粘土が僅かに混入。
- 22 淡褐色土 黒褐色土にオリーブ土を混に含む。オリーブブロック少量混入。
- 23 淡褐色土中に暗オリーブブロック多量混入。よく締まる。
- 24 淡褐色土 黒褐色土にオリーブ土を薄く混に含む。焼土粒が少量含む。
- 25 淡褐色土 オリーブ土塊多く、特に淡褐色土を含む。

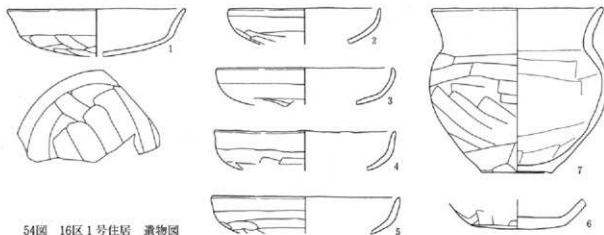
16区1号住居貯蔵穴

- 27 暗褐色土 やや赤味を帯び、軽石粒、焼土粒、炭粒、燧などを含む。
- 28 暗灰褐色土 軽石粒、焼土粒、炭化物を含む、よく締まっている。

16区1号住居カマド

- 1 淡褐色土 焼土粒、燧粒が若干含む。
- 2 淡褐色土 灰白色粘土塊、焼土塊を多量に含む、良く締まっている。
- 3 淡褐色土 焼土ブロックと灰白色粘土ブロックを若干含む。
- 4 淡赤褐色土 焼土塊、焼土ブロック多量混入。
- 5 淡赤褐色土 焼土ブロックを少量含む。
- 6 赤褐色土 焼土塊。
- 7 黒褐色土 灰の間に黒色、淡褐色土、黒灰土が層状に入る。
- 8 黒褐色土 黒色土と褐色土と焼土ブロックを含む。
- 9 暗青灰色土 灰。
- 10 淡灰褐色粘質土
- 11 淡褐色土 白色粘土ブロック・焼土粒を含む。
- 12 淡灰褐色土 焼土ブロック、焼土粒を多量と白色粘土を僅かに含む。
- 13 淡褐色土 焼土ブロックを多量に含む、締まっている。
- 14 淡褐色土 焼土ブロックを若干含む。灰白色粘土ブロックを含む。
- 15 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを含む。
- 16 暗褐色土 焼土粒を僅かに含む。
- 17 黒褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 18 淡灰褐色土 軽石粒を多量に含む。
- 19 白灰色粘質土 軽石粒を含む。
- 20 赤褐色土 焼土塊、焼土ブロックを含む。
- 21 白灰色粘質土 20に類似。
- 22 淡褐色土 粘質土、黒色土を層状と焼土粒、軽石粒を多量に含む。
- 23 淡褐色土 燧ブロックを含む。
- 24 淡褐色土 燧塊主体。褐色土を少量含む。

V 金古北十三町遺跡16区の遺構と遺物



54図 16区1号住居 遺物図

16区1号住居 P.L.25

遺物No.	種類	出土位置	残存率	計測値	胎土/焼成/色調 (石材)	成型の特徴	摘要
1	土師器杯	埋没土	1/3	口径14.0 器高(3.7)	細砂粒/良好/橙色	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘリ削り。	
2	土師器杯	P 1	1/6	口径11.8	細砂粒/良好/橙色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘリ削り。	
3	土師器杯	P 2	1/8	口径14.0	細砂粒/良好/にぶい橙色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘリ削り。	
4	土師器杯	掘方	1/6	口径14.3	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘリ削り。	
5	土師器杯	掘方	1/6	口径14.8	細砂粒/良好/明赤褐色	口縁部上半横ナデ、下半ナデ、底部ヘリ削り。	
6	土師器杯	床直 底部片		底径 7.6	微砂粒/良好/橙色	口縁部下位ヘリ削り。底部ヘリ削り。	
7	土師器甕	床直、+18	1/4	口径13.4 底径 3.6 器高 12.8	細砂粒/良好/赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向・中位以下は斜め方向のヘリ削り、底部剥離のため不明。内面胴部ヘラナデ。	

16区2号住居

本住居は調査区中程2L-27グリッドに位置するが、住居の北辺側と南辺の東2/3が調査区外に位置するため全貌は不明である。残存状態は南西部分を攪乱のため欠くが他の部分は比較的良好である。形態は南北に長い長方形を呈する。規模は長軸3.20m + a、短軸3.06mを測る。床面積は調査範囲で8.68㎡を測ることから全体では10㎡前後と想定される。主軸方位はN-91°-Eを指す。

壁高は東辺が15~20cm、南辺が27~29cm、西辺が29~35cm、平均27cmを残す。

貯蔵穴、柱穴、周溝などの内部施設は調査した範囲では確認されなかった。

カマドは東辺の中程に構築されている。残存状態は熱焼部奥から煙道部にかけては攪乱によって欠き、天井部は住居廃絶期に壊されているようである。な

お、袖は両側とも比較的良好である。規模は全長90cm + a、幅90cm、袖幅は左右とも20cmである。袖と天井部には長方形に切り出された凝灰岩を構築時に使用して強固にしている。床面は黒色土を入れて固められている。

掘方は東側が西側比比べて2~5cmほど深く掘り込まれている。東側は小ビット状の落ち込みが見られるだけであるが西側は中央部に床下土坑が存在する。この土坑の形態は楕円形で径120×100cm、深度20cmと比較的規模が大きいが遺物などの出土は見られなかった。

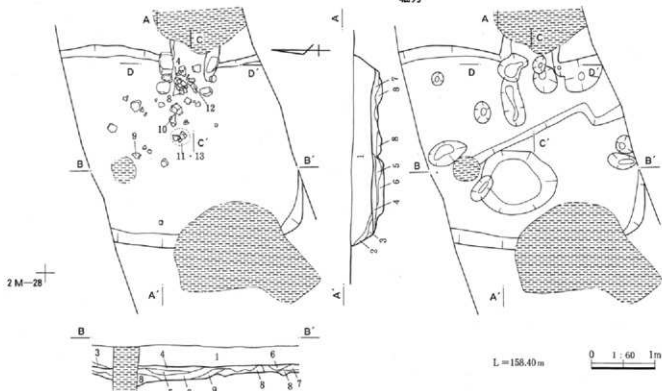
埋没状態はほぼ暗褐色土1層で覆われており短時間に埋没したと考えられるが、土層の状態から人為的な様子は窺えず自然埋没と考えられる。

遺物は土師器杯・甕290点、須恵器杯・瓶頸・甕47点が出土しているが、土師器甕は破片が多く図化

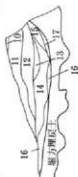
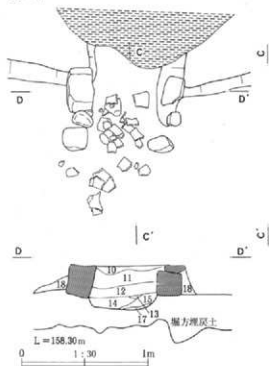
可能なものは少なかった。出土した遺物のうち1と5はカマド、4はカマドと床面、8~13は床面から出土している。

本住居は出土した遺物から8世紀第3四半期に比定される。

堀方



カマド

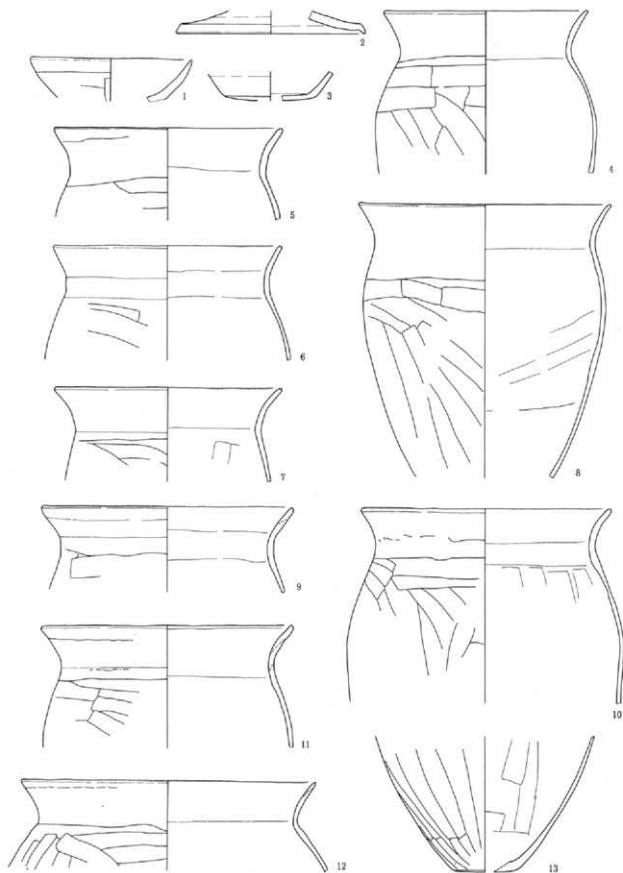


- 16区2号住居
- 1 暗褐色土 粘質土、軽石粒、焼土粒を多く含む。
 - 2 黒褐色土 礫粒を僅かに含む。
 - 3 暗黄褐色土 粘質土、磁粒を若干含む。
 - 4 暗褐色粘質土 焼土粒、炭粒若干と軽石粒も僅かに含む。住居床面（陥球土）
 - 5 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量と軽石粒を少量含む。
 - 6 黒褐色土 軽石粒が多量と焼土粒を少量含む。
 - 7 黒褐色土 礫塊、焼土粒を含む。
 - 8 黒褐色土 礫小ブロックを含む。
 - 9 黒褐色土 礫ブロックを含む。

- 16区2号住居 カマド
- 10 淡褐色土 砂岩の小ブロックを僅かに含む。
 - 11 淡褐色土 焼土ブロックを多量と砂岩の小ブロックを含む。
 - 12 赤褐色土 焼土塊、ブロックを含む。
 - 13 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。長く締まっている。
 - 14 暗赤褐色土 焼土を多量に含み、締まり強い。
 - 15 暗褐色土 焼土ブロック、灰白色粘土ブロックを含む。よく締まっている。
 - 16 黒灰色土 灰。
 - 17 黒灰色土 きめ細かく粘性有り、焼土粒を僅かに含む。
 - 18 褐色粘質土

55図 16区2号住居 遺構図

V 金古北十三町遺跡16区の遺構と遺物



56図 16区2号住居 遺物図

16区2号住居 P L25

遺物 No.	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/施成/ 色調(石材)	成整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	カマド 口縁部片	口径 12.8	細砂粒/良好/ 褐色	口縁部上位横ナデ, 中位ナデ, 下位ヘラ削り。	
2	須恵器 杯蓋	覆土中 口縁部片	口径 15.0	微砂粒/薄光面/ 褐色	ロクロ整形, 回転右回りか。	
3	須恵器 杯身	覆土中 口縁-底部片	底径 7.0	細砂粒/薄光面/ 褐色	ロクロ整形, 回転右回り。底部ヘラ削り後, 回転 ヘラ削り。	
4	土師器 壺	床直, カマド 口縁-胴部片	口径 16.0	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部横ナデ, 胴部上位横方向・中位斜め方向の ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
5	土師器 壺	覆土中 口縁-胴部片	口径 18.0	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部横ナデ, 胴部上位は横方向のヘラ削り。内 面胴部ヘラナデ。	
6	土師器 壺	カマド 口縁-胴部片	口径 18.0	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部横ナデ, 胴部上位横方向のヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
7	土師器 壺	覆土中 口縁-胴部片	口径 18.0	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部横ナデ, 胴部上位横方向のヘラ削り。内面 胴部はヘラナデ。	
8	土師器 壺	床直 口縁-胴部片	口径 19.8	細砂粒/良好/ 褐色	口縁部横ナデ, 胴部は上位より横方向・斜め方向・ 縦方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
9	土師器 壺	床直 口縁-胴部片	口径 19.8	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部に輪積みが残る。口縁部横ナデ, 胴部上位 横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
10	土師器 壺	床直 口縁-胴部片	口径 19.8	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部に輪積みが残る。口縁部横ナデ, 胴部は 上位より横方向・斜め方向・縦方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	
11	土師器 壺	床直 口縁-胴部片	口径 19.8	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	口縁部に輪積みが残る。口縁部横ナデ, 胴部は 横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
12	土師器 壺	床直 口縁-胴部片	口径 23.0	細砂粒/良好/ 明赤褐色	口縁部に輪積みが残る。口縁部横ナデ, 胴部は 横方向と縦方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。	
13	土師器 壺	床直 胴部下位1/4	底径 5.0	細砂粒/良好/ にぶい赤褐色	胴部縦方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。	

3. 土坑

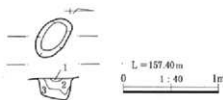
1号土坑

本土坑は2号住居の西側、2L-28グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は比較的良好である。

形態は楕円形を呈する。規模は径48×37cm、深度25cmを測る。

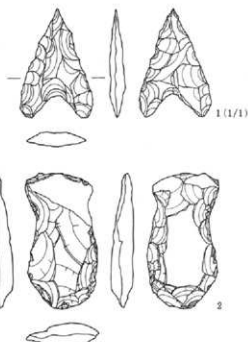
埋没状態は断面観察では自然埋没と見られるが埋没土中の灰色砂は基本層序に対応する堆積層が存在しないため人為的な埋没の可能性も否定できない。

遺物は出土していない。



57図 16区1号土坑 遺構図

4. 遺構外出土遺物



58図 遺構外出土遺物 遺物図

遺構外出土遺物 P L25

遺物 No.	種類	出土位置 残存率	計測値	石材
1	石器 鏃	2L-28 定形	長 2.8 幅 2.4 厚 0.4 重 1.49	チャート
2	石器 打製石斧	2L-28 上部欠損	長10.7 幅 5.5 厚 1.6 重121	黒色頁岩

VI 考 察

1. 青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区2号住居跡出土の墨書土器について

高島 英之

前橋市青梨子上屋敷遺跡Ⅰ区2号住居跡から出土した墨書土器は、これまでの県内における墨書土器の出土例中においてはもちろん、わが国内から出土した墨書土器の類例からみても非常に希有な例と言えるので、ここに紹介する。

1. 釈文

・体部外面 「長 福 二 百 年」

・底部外面 「 千 乃」

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

[部]

日 奉 □ 千 麻 呂

道 麻 呂

身 □ 女 女

麻

呂]

・口縁部破片 「長 麻 呂」 「福」 「□」

2. 内容

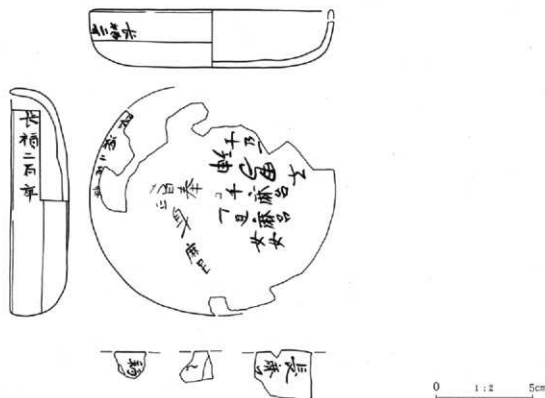
この墨書土器は、竪穴住居跡の中央部より東に寄った位置、竈のはば正面に当たる床面から多数の小片で出土した。廃棄に当たって人為的に破砕された可能性も指摘できるという。土器そのものの年代は八世紀第4四半期頃ということで、県内をふくめ、関東地方出土の墨書土器の中でも年代的にかなり早いものと言える。

文字はすべて土器の外面に記載されている。まず、体部外面、はば口縁とも言える位置に横線で「長福二百年」と記されている。「年」の字は則天文字の字形で記されている。県内出土の則天文字の例としては、境町上矢島遺跡(「𠄎」)、赤堀町堀下八幡遺跡(「𠄎」)、前橋市二之宮宮下東遺跡(「𠄎」)、前橋市二之宮千足遺跡(「𠄎」)などからの出土例に次ぐ例ということになる。

則天文字の「𠄎」の字は、我が国では中世以降、板碑などで記年銘を記す際に比較的使用される字形ではあるが、古代の墨書土器に記された例としては非常に少ない。

「長福二百年」とは、文字通り「福」が「長」く続くことを願った吉祥句の文言とみられる。吉祥句的な

青梨子上屋敷遺跡 I 区 2 号住居—1 墨書土器



59図 青梨子上屋敷遺跡 I 区 2 号住居出土墨書土器実測図

文字や文言が記された墨書土器は枚挙に暇がないほどあるが、この文言自体は、これまで明らかになっている限り、文献上でも、全国の出土例の中でも類例のない文言である。管見の限り、「福」の永続を「二百年」という文言で表現した例も寡聞にして聞かないが、興味深い表現だと思われる。

この他、「長麻呂」、「福」と記された同じ土師器杯の口縁部破片ややはり文字は縦読ことは出来ない墨痕の付着した同じ杯の破片も出土しているので、この土器の口縁部にはさらに文章をなす文字が記されていた可能性がある。

底部外面には確認できただけで21文字分の記載が認められた。「日奉部カ子麻呂」以下人名の部分とみれば、「」子男神」の部分のみが逆方向で、かつ同一面に記された他の文字より殊更に大きく記されている。また、「日奉部カ・・・」と記された部分からみて斜め左に向かって「子麻呂」と人名のみが記されている。

「」子男神」と記されているところから見て、この土器が何らかの祭祀に際して使用され、その折りに文字が記されたと考えることが妥当であろう。「」子男神」がいかなる種類の神であるのかは、この資料のみからは全く不明と言わざるを得ないが、「」子男神」の文字のみ逆方向から、しかも他の人名等と比べてより大きく記されているところからみれば、神名として世俗の人名とは差別化・超越化をはかった書き方と言うことが出来そうである。

「日奉部カ子麻呂」「道麻呂」「□女女」はともに「日奉部カ」氏族に属する人々の名であると考えられる。これらの人々がいかなる関係にあったのかについては、この土器の記載からは全くわからないが、集落内の何らかの集団、たとえば戸、住居などを同じくする人々で、この土器を使用した「」子男神」の祭祀に関

VI 考察

与した人々と考えることは出来よう。ちなみにこれまでに知られている古代上野国関係の日奉部氏の史料としては、1984年に京都府長岡京市の長岡京跡右京三条二坊一・二町地点から出土した

・上野国□ [] □□□□□□ (151)×(6)×12 081
〔部〕 〔呂〕
・日奉□□□麻□ 日奉 ×

と記された木簡が唯一の例である⁹⁾。なお、文書木簡の断片と考えられ、表面に記された「上野国」と、裏面に記された「日奉部カ」の氏族名とが必ずしも関係するとは言いつれない。

また、この土器に記された「身麻呂」と、他の「日奉部カ千麻呂」「道麻呂」「□女女」との関係も、この資料からは明らかにしがたい。

3. まとめ

以上、見てきたように、この土器に記された文言を総合的に解釈してこの土器の用途・機能を類推すると、「日奉部カ千麻呂」「道麻呂」「□女女」などの人々が主体となり、「長福二百年」を「子男神」に祈った祭祀・儀礼等の行為に際して使用されたものと考えることが出来る。祭祀の対象となるべき神名が明らかに出来ないで、具体的な祭祀の内容や、祭祀の中のどのような場面でこの土器に文字が記され使用されたのかという点については明らかにしがたい部分もあるが、これまでの祭祀関連墨書土器の使用例から類推すれば、祭祀に当たって神を降ろし迎えた依代として、あるいは神に供献した供物を盛る器として使用された可能性などが想定できるだろう。

不明な部分が少なくないとは言え、この資料のように地方の村落内における具体的な祭祀の様子がある程度明らかにできる墨書土器の類例は非常に僅少であり、その点でこの資料の有する意義は大きいものと考えられる。とくに、これまで集落遺跡出土の資料・官が・寺院遺跡出土資料を問わず、全国でも全く類例のない文言が記されているところも重要であり、村落祭祀に使用された墨書土器の多様性を示すものと位置づけられよう。

また、東日本における集落遺跡出土の墨書土器としては、相当に古い年代の資料であることも特筆すべきである。記された文字の書体からみれば、この土器に文字を記したのは、文書を通常に書くことが出来る階層・立場の人物であると見ることが出来る。文言・内容がきわめて具体的であることと併せて考えれば、村落祭祀の中に土器を墨書する行為が持ち込まれたのは、文字を自由に書くことが出来、祭祀行為そのものの意味を理解できる人々によってであることを具体的に物語る資料として重要なのである。

(1) 木村泰彦「1984年出土の木簡—京都・長岡京跡3」(『木簡研究』7 1985)、松田猛「出土文字資料からみた上野国の古代氏族」(『地方史研究』243 1993)。

圖 版



遺跡全景 垂直



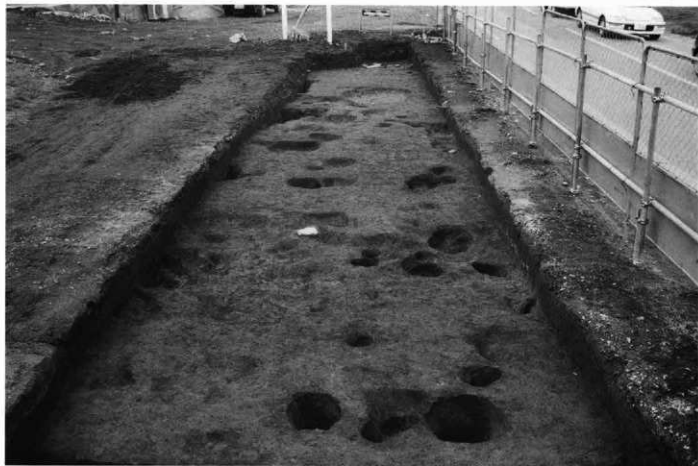
遺跡全景 斜め 北から



I区全景 垂直



I区全景 斜め 北西から



Ⅱ区全景 斜め 南から



Ⅲ区全景 垂直



IV区北部分 斜め 南から



IV区中部分 南から



IV区中部分 北から



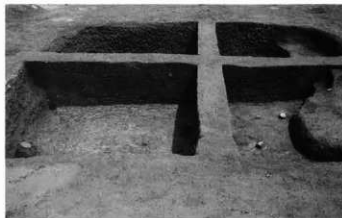
IV区南部分 斜め 南から



金古北十三町遺跡15区 全景 垂直



I区1号住居 全景 西から



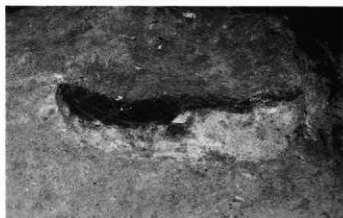
I区1号住居土層断面 南から



I区1号住居土層断面 東から



I区1号住居遺物出土状態 北西から



I区1号住居貯蔵穴土層断面 西から



I区1号住居カマド 西から



I区1号住居カマド土層断面 西から



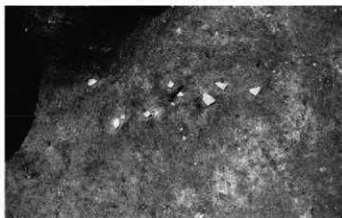
I区1号住居カマド掘方土層断面 北から



I区2号住居 全景 西から



I区2号住居土層断面 西から



I区2号住居1の土師器杯出土状態



I区2号住居貯蔵穴土層断面 西から



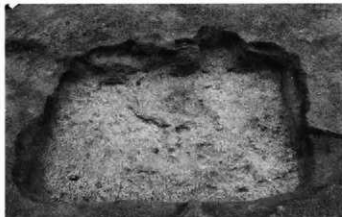
I区2号住居カマド 全景



I区2号住居カマド土層断面 西から



I区2号住居掘方 西から



I区2号住居掘方 西から



I区1号堀 全景 西から



I区1号堀 全景 東から



I区1号堀土層断面 西から



I区1号堀土層断面 東から



I区1号堀出土状態 東から



I区1号堀底面掘削時工具痕



I区2号堀 全景 南から



I区2号堀土層断面 南から



I区1号溝 全景 東から



I区3号溝 全景 南から



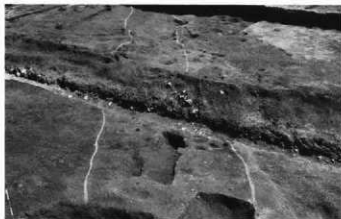
I区3号堀 全景 南から



I区1号溝土層断面 西から



I区3号溝土層断面 南から



I区4号溝 全景 北から



I区4号溝土層断面 南から



Ⅲ区1号溝 全景 南から



Ⅲ区1号溝 全景 北から



Ⅲ区1号溝土層断面 北から



Ⅲ区1号溝礎出土状態 南から



Ⅲ区2号溝 全景 西から



Ⅲ区2号溝土層断面 西から



I区1号道 全景 東から



I区1号道 全景 北東から



I区1号道硬化面土層断面



I区1号道硬化面土層断面



I区1号道掘方 西から



II区1号列石 南西から



II区1号列石土層断面 西から



I区1号井戸 全景 東から



I区1号井戸断面 東から



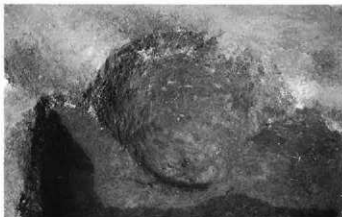
I区1号埋壺出土状態 南から



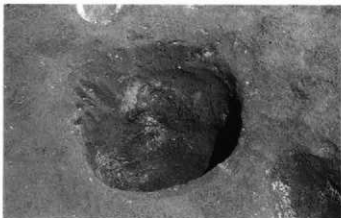
I区1号埋壺出土状態 西から



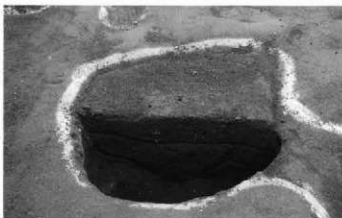
I区1号埋壺断面状態 西から



I区1号埋壺掘方 西から



I区1号土坑 全景 南から



I区1号土坑土層断面 南から



I区2号土坑 全景 南から



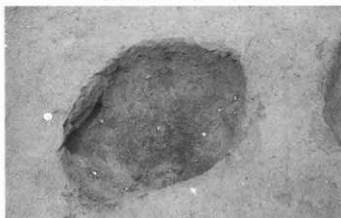
I区2号土坑土層断面 南から



I区3号土坑 全景 南から



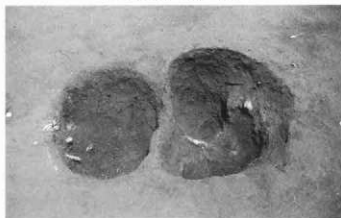
I区3号土坑 土層断面 南から



I区4号土坑 全景 南から



I区4号土坑土層断面 南から



I区5号土坑・6号土坑 全景 南から



I区6号土坑土層断面 南から



I区13号土坑 全景 西から



I区13号土坑土層断面 東から



I区23号土坑 全景 北から



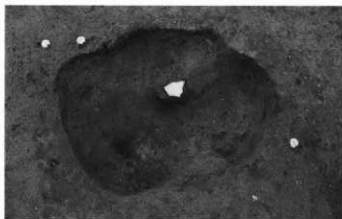
I区23号土坑土層断面 南から



I区25号土坑 全景 東から



I区25号土坑土層断面 東から



I区53号土坑 全景 東から



I区53号土坑土層断面 東から



I区125号土坑 全景 東から



I区125号土坑 全景 東南から



Ⅲ区3号土坑土層断面 南から



Ⅲ区3号土坑土層断面 南から



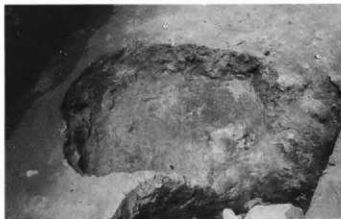
Ⅲ区3号土坑礫出土状態 南から



Ⅲ区3号土坑掘方 東から



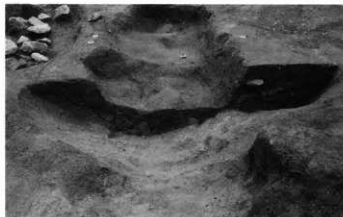
Ⅲ区4号土坑 全景 東から



Ⅲ区6号土坑 全景 東から



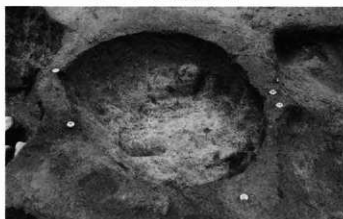
Ⅲ区8号土坑 全景 東から



Ⅲ区8号土坑土層断面 南から



Ⅲ区9号土坑 全景 南から



Ⅲ区9号土坑掘方 南から



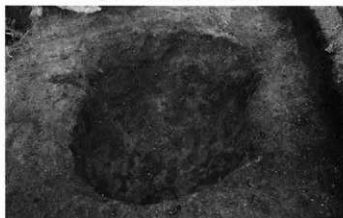
Ⅳ区1号土坑 全景 西から



Ⅳ区1号土坑土層断面 南から



Ⅳ区2号土坑 全景 西から



Ⅳ区3号土坑 全景 西から



I区1住1



I区1住2



I区1住4



I区1住6



I区1住7



I区1住9



I区1住8



I区2住2



I区2住3



I区2住4



I区2住5



I区2住1



I区2住6



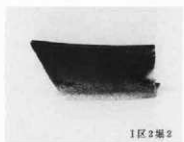
I区2住9



I区2住7

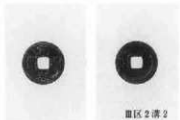


I区2住8





Ⅱ区1溝1



Ⅱ区2溝2

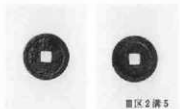


Ⅱ区2溝3

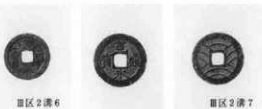
Ⅱ区2溝4



Ⅱ区2溝1



Ⅱ区2溝5



Ⅱ区2溝6

Ⅱ区2溝7



Ⅰ区1井戸1



土坑1



土坑2



土坑3



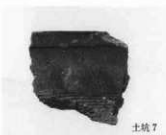
土坑4



土坑5



土坑6



土坑7



土坑8



土坑9



土坑10



土坑11



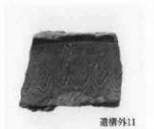
土坑12



土坑13



土坑14



遺構外11



土坑15



遺構外9



遺構外10



遺構外13



Ⅰ区1塚埋1



遺構外12



遺構外14



遺構外15



遺構外16



遺構外17



遺構外18



遺構外19



遺構外23



遺構外24



遺構外19



遺構外25



遺構外30



遺構外20



遺構外21



遺構外22



遺構外27



遺構外28



遺構外29



遺構外30



遺構外31



遺構外33



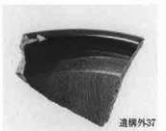
遺構外34



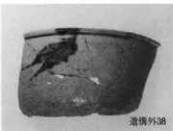
遺構外35



遺構外36



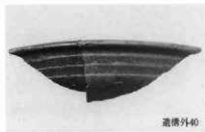
遺構外37



遺構外38



遺構外39



遺構外40



遺構外41



遺構外42



遺構外44



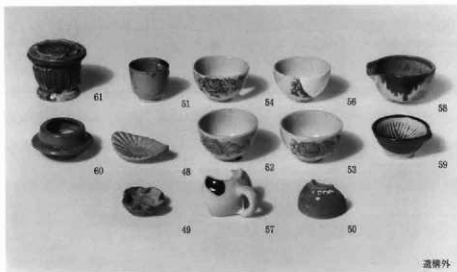
遺構外43



遺構外45



遺構外46



遺構外



遺構外62



遺構外63



遺構外64



遺構外65



遺構外66



遺構外67



遺構外68



遺構外69



遺構外70



遺構外71



遺構外72



遺構外73



遺構外75



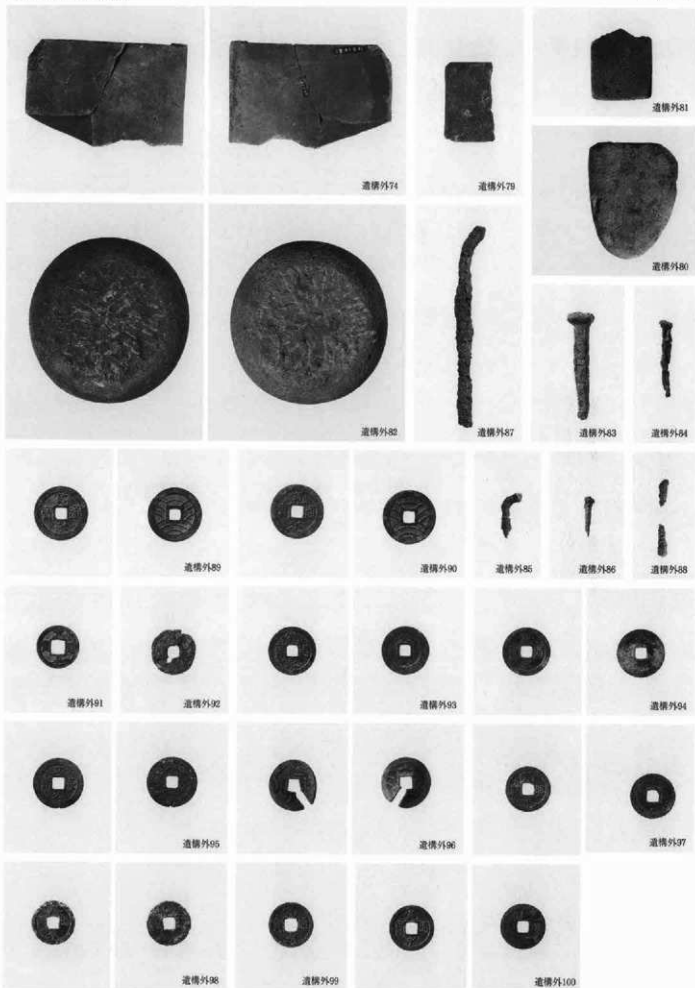
76
遺構外



遺構外77



遺構外78





遺跡 全景 西から



遺跡 全景 東から



1号住居 全景 西から



1号住居 全景 南東から



1号住居土層断面 東から



1号住居土層断面 南から



1号住居カマド 西から



1号住居カマド土層断面 西から



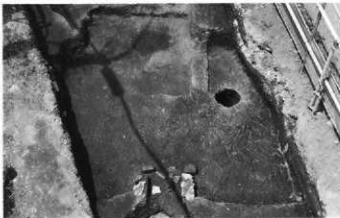
1号住居カマド掘方 西から



1号住居掘方



2号住居 全景 東から



2号住居 全景 東から



2号住居土層断面 南西から



2号住居遺物出土状態



2号住居カマド 西から



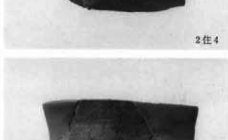
2号住居カマド 南から



2号住居掘方断面 西から



2号住居掘方 西から



発掘調査報告書抄録

ふりがな	あおなしかみやしいせき・かねこきたじゅうさんちやういせき2							
書名	青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡2							
副書名	主要地方道高崎渋川線改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	10							
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書							
シリーズ番号	314							
編著者	神谷 佳明・高島 英之							
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2							
発行年月日	2003年3月25日							
ふりがな				北緯				
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
青梨子上屋敷	群馬県前橋市青梨子町		10201		362927	20010403	3,320㎡	道路建設
			10324		1396000	20010831		
金古北十三町	群馬県群馬郡群馬町金古		10324		362911	20010403	550㎡	
					1694000	20010831		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
青梨子上屋敷	集落	奈良時代	竪穴住居	2軒	土師器・須恵器		奈良時代後期後半代の竪穴住居のカマド前部床面直上より墨書された土師器杯が出土している。 この土器には神名・人名が細かな文字で書かれていた。出土状態が小片に割れた状態であることや墨書された内容から祭祀に使用されたと考えられる。こうした墨書土器の出土例は群馬県内でも初例である。	
	館址	中世	土坑		陶磁器・石製品			
			館堀	3条				
			溝	1条				
			道	1条				
			井戸	1基				
			土坑					
	集落	近世～近代	溝		陶磁器・鉄器・銭貨			
			土坑					
金古北十三町	集落	奈良時代	竪穴住居	2軒	土師器・須恵器		奈良時代中葉の竪穴住居では住居床面を構築する際に5～10cm単位で土を版築状に突き固めている種少な例である。	
			土坑	1基				

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書314号

青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡 2

主要地方道高崎渋川線改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月20日印刷

2003年3月25日発行

発行／編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県勢多郡北碓村大字下碓田784-2

電話番号 0279-52-2511

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／松本印刷工業株式会社